地方拠点都市における学歴と学歴意識に関する調査研究

高等教育研究叢書
63　2000年3月

村澤昌崇・西本裕輝・作田良三

広　島　大　学
大学教育研究センター

地方拠点都市における学歴と学歴意識に関する調査研究

村澤昌崇・西本裕輝・作田良三

広島大学　大学教育研究センター

はじめに

本研究は平成９、１０年度の文部省科学研究費補助金（奨励研究（A））の助成を受けて実施された研究課題『個性化・多様化時代における企業の学歴観・賃金評価に関する研究』（研究課題番号 09710188）により得られた調査データを元に、学歴にまつわる人々の意識に焦点を当てて分析した成果である。

本研究の元になった調査データは、様々な内容が盛り込んである。研究代表者のもともとの関心が高校教育にあったので、当初は個性化・多様化をキーワードに改革が進んでいく高校の実態を素描することを考えていた。しかし周知の通り、近年の高校教育改革に関する調査は、私のような小兵が行わずとも、高名な先生方を中心として多くの調査が行われており、見方によってはすでに飽和状態であった。そんな中で改革の現状を訪ねるようなオーソドックスな調査を実施しても、二番煎じで実質的な意味がほとんど無いのは火を見るより明らかである。そこで、高校そのものを記述するのではなく、高校の外側から高校を記述しようー高校の外側にいる人たちは、高校をどう見ているのかーという案が漠然と浮かんだ。調査の漠然とした原案は、こうした考えが元になった。

次に調査のイメージが膨らむきっかけとなったのは、就職である。平成８年４月より広島大学調査室/大学教育研究センターに幸運にも助手として採用されたことで、自身が高等教育研究を半ば自発的半ば構造的に展開することになった。もともと高校の出口部分、特に大学進学の部分に対する高校教育の効果を研究対象としていたので、高等教育には関心があった。それが就職の機会に恵まれ、高等教育研究を展開する環境だけは十二分に整ったのである。これまでの高校教育に対する関心とも重ね合わせ、ユニバーサル化・多様化・個性化を迎えた高校、大衆化した大学・高等教育に対して、人々はそれぞれをどう見ているのか。特に、長年高卒人材と大卒人材を受け入れてきた企業は、高校教育や大学・高等教育の変化を、人材という観点から見た場合、どのように感じているのか。変化するそれら人材の「使いどころ」をどのように考えているのかーそんな調査ができればいい、と感じていた。

さらに調査のイメージを豊かにしてくれたものは、SSM 調査研究への参加である。大学院生時代から、SSM 研究に関心を持っていた私は、SSM のようなしっかりした調査を行いたい、そうしたしっかりした調査を経て得られたデータを使って分析してみたいと常日頃から思っていた。先輩の誘いもあって、数理社会学会に入会し、そこで様々な先生方とめぐりあうことができ、その先生方に、煙たがられるくらい「SSM 調査に参加したい」と伝えてきた。その甲斐あってか、1995 年 SSM 調査研究会に参加することができた。その研究会において得られた刺激やデータのノウハウを、自分自身が実際に再現してみたいーこうした思いも生じてきた。

実際の調査票を形作る上で参考にさせていただいたのは、すでにこの調査を始める前に行わ

れていた、広島大学教育社会学研究室の手による『学歴に関する意識調査』である。同研究室では、過去に新堀通也先生の時代に学歴に関する研究が盛んであり、私が院生の時代には、研究室の原田彰先生と山崎博敏先生を中心に、新堀先生の学歴意識に関する研究をリファインして追試研究をしよう、という動きがすでにあった。結果的には実査の方には私は加わることができなかったが、上述した私の調査のイメージは学歴意識の研究とかなり重複するので、リンクさせる形で積極的に取り入れた。

以上の考えを調査の基本構造とし、研究に参加してもらった西本裕輝氏（琉球大学法文学部助手）、作田良三氏（広島大学教育学部助手）のアイデアも盛り込みながら、調査票を練り上げていったのである。

しかし実際の調査は苦労の連続である。区役所に行って選挙人名簿を書き写す作業、調査票の発送作業はまさしく肉体労働である。もちろんすべてを一人でこなせるわけではなく、科研費からアルバイト代を捻出して、広島大学教育社会学研究室で当時院生だった作田良三氏（当時Ｄ２、現広島大学教育学部助手）、久保田真功氏（当時Ｍ２、現広島大学大学院教育学研究科Ｄ１）、小山陽子氏（当時Ｍ２、現専業主婦）に実作業を手伝ってもらった。結局彼らには、アルバイト代以上の作業をこなしてもらうことになってしまった。彼ら無しには本調査は不可能であった。

それにしても、調査には人と資金と時間がひたすらかかる－それを改めて痛感した。そんな労力とお金と時間をかけたにもかかわらず、十分満足のいく調査ができたわけではなく、習作の域を出ていない。得られたデータについての分析自体も、まだまだやり残した部分は多い。しかし、あえて現時点における各研究者の関心に沿った分析結果を報告し、諸先生方のご批判を仰ぐことにした。

最後に、ご多忙の中、我々の研究調査の趣旨をご理解いただき、調査に協力してくださった広島市の二つの区に在住の皆様に、この場を借りて心から感謝を申し上げたい。

研究代表者　村　澤　昌　崇

目　次

はじめに　村澤昌崇

序章　調査の内容と方法　村澤昌崇　1

第１部　論文編

第１章　地方拠点都市における社会階層と学歴の関連構造　村澤昌崇　7

第２章　学歴の座標―人々の意識における学歴の位置―　村澤昌崇　19

第３章　学校化社会における大学卒業者に対するイメージ　西本裕輝　36

第４章　学歴とパーソナリティの関連性に関する研究　西本裕輝　47

第５章　大学および大学卒業者に対するイメージの形成　作田良三　60

第２部　資料編

単純集計結果　77

調査票　113

序章　調査の内容と方法

村澤　昌崇

1.　調査の意図

現在、日本の高等学校では「多様化」「個性化」が推進され、平成元年度の学習指導要領の改訂、最近の総合制高校に代表される新しいタイプの高校の新増設、特色ある学科等の設置といった「高校教育改革」が進行している。一方高等教育は、大学進学率が40%を超え、大学の大衆化が進行するとともに、多様な学生が入学・卒業し、これまで以上に大卒学歴が就業において、もはや特権的な証書とはなり得ないという状況が進行している。

このように、中等・高等教育において、多様化・個性化が進行することによって、学歴が個人の技術力あるいは潜在能力の指標としてはもはや有効なものとはならなくなり、学歴のみに依存した人材登用の方法、および賃金評価体系が根底から見直しを迫られるのは必至である。実際、大手企業において、勤続年数や学歴に拠らず、業績を主体とした賃金評価が続々と導入され始めており、この事実は、大学進学率の上昇や受験競争の過熱などに象徴される国民の学歴信仰とは裏腹に、企業を中心として社会における学歴に対する評価が大きく揺れ動いている一端を示しているように思われる。特に今日のような日本の中等・高等教育の変動期においては、企業を中心とした社会を支配している学歴観（学歴信仰度）、それに伴う賃金評価体系、職場への人員配置方法等が根本的に変わらざるを得ない時代を迎えたのではないかと思われる。

このような一連の変化をふまえると、現時点で学歴にどのような価値があるのかについての分析、特に人々が学歴に抱いている意識や認識について、多面的な分析が必要とされることに気がつく。すでに似たような関心を持つ調査として、1997年に広島大学教育学部教育社会学研究室による「学歴に関する意識調査」がある。われわれは、この調査と基本コンセプトを共有しつつ、全面的にリニューアルしたアンケートを作成して調査を実施した。

2.　調査の内容

以下、調査票の概要を提示する（詳細は巻末の調査票を参照）。

Ⅰ　回答者自身のことや家族のことに関する質問項目

１．基本属性に関する項目
２．生活スタイルに関する項目
３．本人の職業に関する項目
４．本人の学歴に関する項目
５．本人の中学３年生時点での学寮成績に関する項目
６．本人の中学３年生時点での暮らし向きに関する項目
７．本人の父親の職業に関する項目
８．本人の両親の学歴に関する項目
９．人生における挫折経験に関する項目
１０．　日常生活における満足度に関する項目
１１．　本人のパーソナリティに関する項目

Ⅱ　仕事や学校に関する一般的な事柄に関する質問項目（意識調査）

１．仕事にまつわる一般的な意見に関する項目
２．日本の学校教育に対する意識に関する項目

Ⅲ　回答者の仕事や職場のことに関する質問項目（意識調査）

１．職場において、就職・昇進・昇給・人事などに重視されること
２．勤め先における「規則」に関する項目
３．職場で一緒になる人に求めること
４．就職・昇進・昇給・人事における公平感
５．職場において、最近就職・昇進・昇給・人事の基準に変化があったかどうか
６．昇進見通し
７．日本社会における学歴・収入・社会的地位・近所の評判の規定要因についての意識、および本人の仕事に必要なものに関する意識
８．会社や組織における慣習や立ち振る舞いについての意識
９．大卒者に対するイメージ
１０．　学歴に対する関心度、高学歴者との接触度
１１．　過去１年間の本人および配偶者の収入

以上のように、調査項目は学歴に関する人々の意識に関する調査項目を中心に、ライフスタイルに関する項目、社会階層と社会移動に関する項目、パーソナリティに関する項目、職場の

環境に関する項目など、様々な調査項目を盛り込んでいる。これは本研究に参加した研究者の研究関心を持ち寄った結果である。

3. 調査の時期・方法

調査は、1998 年 7 月に広島市の２つの区を対象に、有権者 2462 名を対象に、郵送法により実施した。調査対象者の選出は、選挙人名簿を利用して等間隔無作為抽出を行った。回収数は 694、回収率 28.1%とかなり低く、サンプル誤差が大きくなることは否めない。しかし、１章および巻末の単純集計表を参照してもらえばわかるとおり、既存の大規模調査（たとえばＳＳＭ調査）などと比べて、たとえば属性に関係する項目の分布に大きな偏りは見られないように思われる。今回調査で得られたサンプルデータの基本的な属性関係の分布は、巻末の単純集計を参照されたい。

第１部　論文編

第１章　地方拠点都市における社会階層と学歴の関連構造

村澤　昌崇

1. はじめに

本稿での関心は、地方拠点都市における社会移動と学歴の関連を記述することである。

これまで社会移動と学歴との関連を扱ったものは、社会学における社会階層研究である。この領域ではおもに社会階層の流動性と開放性における産業化の影響を、次のように整理して分析検討してきた。いわゆる「産業化命題」である。これはすなわち、産業化の進展とともに職業達成や教育達成における親子間（世代間）の移動が促進され、社会の流動性と開放性が高まることを主張するものである。具体的には、

① 親の職業的地位や教育達成が子供の教育達成に及ぼす直接的影響力が弱まる。
② 親の職業的地位や教育達成が子供の職業達成に及ぼす直接的影響力が弱まる。
③ 子供の教育達成が子供自身の職業達成に及ぼす直接的影響力が強まる。

つまり、産業化の進展によって、地位達成における出身階層の影響力が低下し、代わって本人の業績（学歴）の影響力が高まることである。

これまでこの命題に対してはさまざまな分析が試みられてきた。中でももっとも代表的なものは、Duncan(1966), Blau and Duncan(1967)の地位達成のパス解析（以下、Blau = Duncan モデルと呼ぶ）であろう。わが国に於いてもこのモデルを SSM 調査データに適用した分析が展開されている。特に今田（1998, 1999）は、1955 年から 1995 年までの 5 時点の SSM データに対して Blau = Duncan モデルを適用し、「産業化命題」の分析と検証を行っている。そして結論として、日本では社会階層における産業化命題が成立しないことを指摘した。

では、はたして以上のような全国規模の調査データを元にした分析結果は、局地的には検証されうるだろうか。以下本稿では、社会移動と学歴との関連構造について、我々が独自に調査した地域調査に対し、出身階層・学歴・到達階層の関係を記述する代表的なモデルを適用することにより分析・検討を行う。

2. 学歴と地位達成の関連構造　分析その１

2.1. 分析に用いるデータ　A

1998 年 7 月に広島市の 2 つの区 2462 名を対象に実施した「学歴と生活に関する意識調査」

（回収数 694、回収率 28.1%）のうち、男性のみを抽出したデータを用いる（アンケートについては巻末を参照）。そのうち、つぎの変数[1]を用いてその因果関係を問うことにする。

① 本人主職：問 3(e)（「あなたの働いているところでの仕事の内容は大きく分けてつぎの１～１６のどれにあてはまりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。無職の方で過去にお勤めの経験がある方は、もっとも長い間勤めた職場でのお仕事をお答えください」）によって、あらかじめこちらが用意した 16 の職業の中から本人の職業にあてはまるものを選択させている。この各職業カテゴリーに、1995 年 SSM 調査で算出された職業威信スコアの平均値を割り当てた[2]。

② 本人学歴：問 4(a)（あなたが最後に行かれた（または現在通っている）学校は、つぎのどれにあたりますか。）を元に教育年数を算出したもの。

③ 父主職：問 7(f)（「あなたのお父さまの働いている（働いていた）ところでの仕事の内容は大きく分けてつぎの１～１６のどれにあてはまりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。お父さまが無職の方で過去にお勤めの経験がある方は、もっとも長い間勤めた職場でのお仕事をお答えください」）によって、あらかじめこちらが用意した 16 の職業の中から本人の職業にあてはまるものを選択させている。この各職業カテゴリーに、1995 年 SSM 調査で算出された職業威信スコアの平均値を割り当てた。

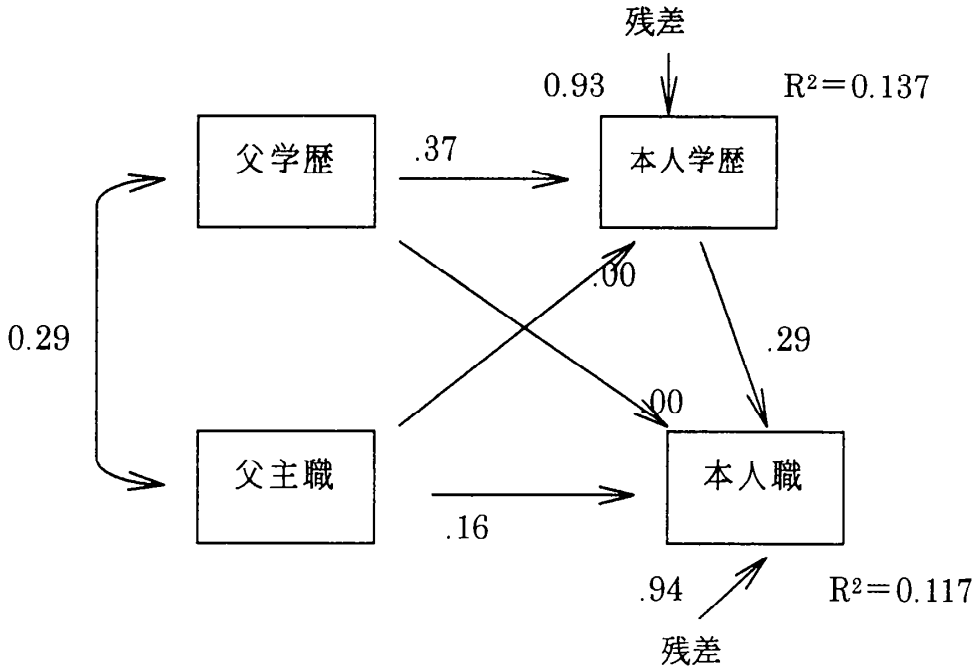
④ 父学歴：問 8（あなたのお父さまが最後に行かれた学校は、つぎのどれにあたりますか。中退、卒業に関係なくお答えください）を元に教育年数を算出したもの。

2.2. 地位達成のパス解析

分析結果は図 1・図 2 に示した。分析には AMOS Ver.3.6 を使用した。図 1 はデータをペア単位で削除したもの、図 2 はデータをリスト単位で削除したものである。それぞれの結果はともに「父学歴」と「父主職」を外生変数とする飽和モデルから検討を開始し、統計的に有意でないパス係数を 0 に固定し、その組み合わせをいくつか検討しながら、最終的にカイ 2 乗検定での有意確率が 0.05 未満になる直前のモデルを採択した。カイ 2 乗値や GFI などの適合度指標を見ると、パスモデルのデータへの当てはまり具合は悪いとは言えない。なお、比較参考のために、今田（1998,1999）の分析結果を掲載した（図 3）。

まず本人の教育達成を検討してみよう。有意な影響を与えているのは父親の学歴であり、その大きさは図 1 では 0.37、図 2 では 0.30 である。係数のみを単純に比較すれば、1955～1995 年の 5 時点における SSM 調査の全国的傾向と似通っている。ところが、父主職が本人の教育達成に与える影響はほぼ皆無である。この点は SSM の全国的傾向とはずれている。これらを総合的に判断すると、地方中核都市における教育機会の均等化は、全国的傾向に比べると進行していると推測できる。しかし、父親の学歴の影響力が全国的傾向並に残存しており、この点からすれば教育達成の世代間での再生産が依然として行われており、地方の教育達成にも「不変のレジーム」（今田　1998）が存在することを窺わせる。

図１　地位達成のパス解析（ペア単位での欠損値削除　データＡ）

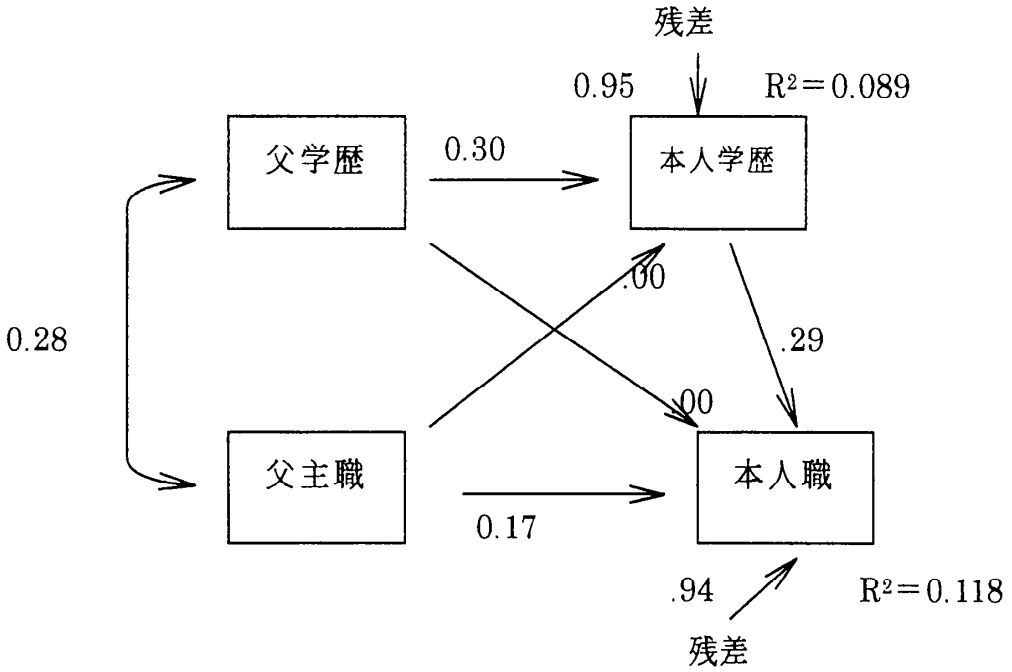


N=308, カイ二乗値=3.386,df=2,P=0.184,

GFI=0.994,AGFI=0.972,CFI=0.987,RMSEA=0.048

（※図中の矢印についている数値は標準化係数を示す。以下の表も同様。）

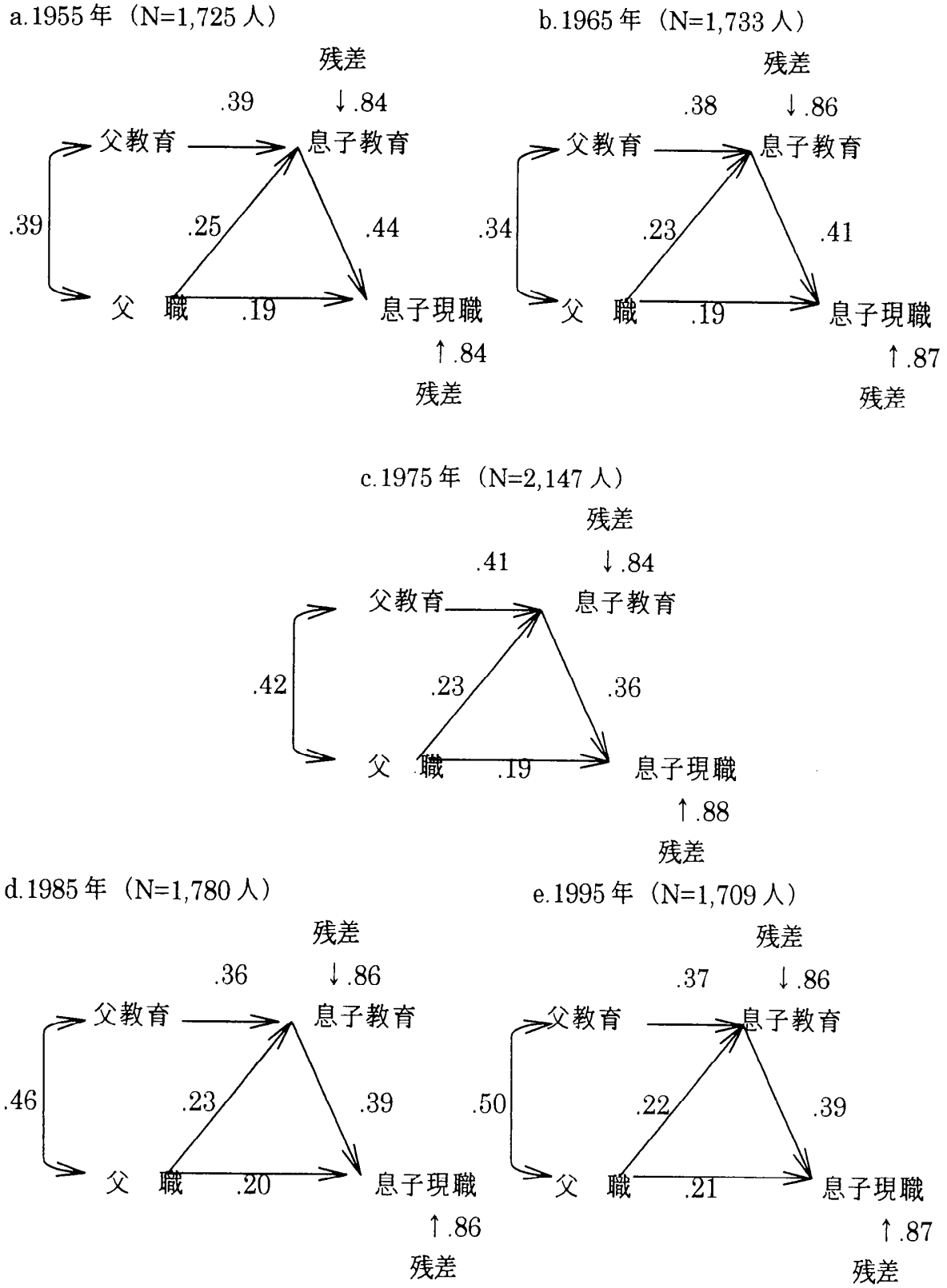
図２　地位達成のパス解析（リスト単位での欠損値削除　データＡ）



N=176, カイ二乗値=1.170,df=2,P=0.557,

GFI=0.997,AGFI=0.983,CFI=1.000,RMSEA=0.000

図３　パス解析による社会的地位達成の構造：1955-1995 年
今田（1999　7 頁）より引用



次に、本人の職業達成を検討してみよう。父親の学歴の影響力が有意な効果をもたらさないこと、父親の職業や本人の教育達成が有意な影響力を及ぼしている構造は、全国的傾向の趨勢とほぼ変わらないとみなしてよいだろう。個々のパス係数を検討していくと、父親の職業が本人の職業達成に有意な影響を与えていることがわかる。その影響力はあまり大きなものとは言えないが、世代間での階層再生産が今日においても存在していることを物語っている。

本人の教育達成が自身の職業達成に及ぼす影響力は、父親の職業の影響力に比べると高くなっており、学歴主義化が進んでいることを窺わせる。しかしその規定力は全国の趨勢に比べると0.1ポイント下回っていることにも留意せねばなるまい。

表1　本人の職業達成における出身階層と自身の学歴の影響力の総効果

	ペア単位データ	リスト単位データ	1995年SSMデータ
直接効果			
父主職	0.16	0.17	0.21
本人学歴	0.29	0.29	0.39
間接効果			
父学歴→本人学歴→本人職業	0.11	0.09	0.14
父主職→本人学歴→本人職業			0.09
出身階層の総効果	0.27	0.26	0.44

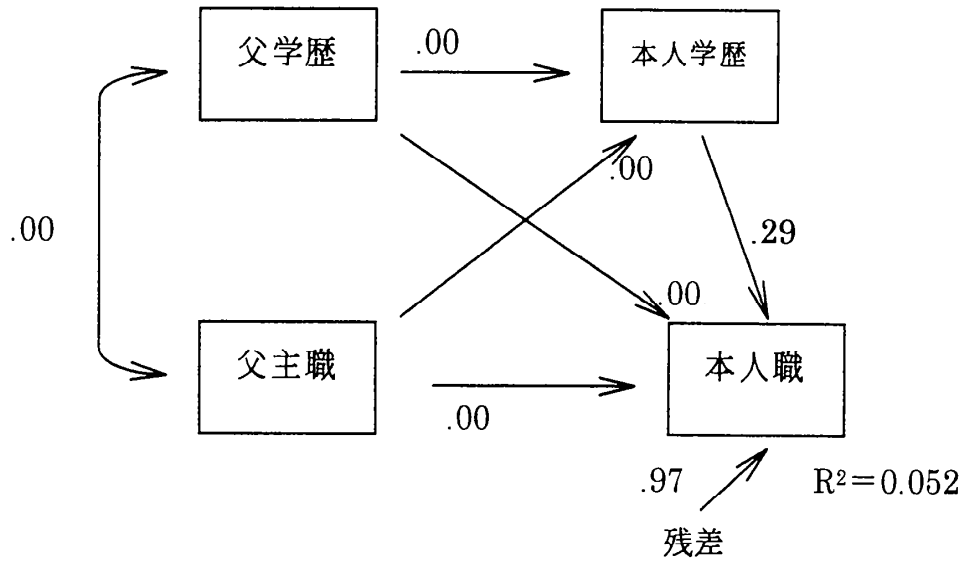
総合的に父親の学歴や職業などの出身階層の影響力と本人の学歴の影響力を評価すると、表1のようになる。1995年のSSM調査データに比べると、影響力の絶対値は出身階層と本人の学歴ともに低くなっており、相対的に残余変数の影響力が大きくなっている。地方中核都市の場合は、全国傾向に比べると、本人の職業達成に対して出身階層や本人の教育以外の要因、例えば家計収入やきょうだいの数、あるいは地方特有の産業構造や職業構造などの要因が特に強く働いていることが予想される。

しかし他方出身階層と本人の学歴の規定力を相互比較すると、その絶対値はほぼ等しいという傾向（出身階層と本人の学歴の総効果はペア単位では0.27と0.29、リスト単位では0.26と0.29）が得られており、全国の趨勢（出身階層の総効果044、本人学歴の効果0.39）とほぼ一致している。この点においては、全国的傾向と同様に、学歴主義・業績主義とほぼ同等の規定力を持つ階層再生産の構造を地方にも見出しうるといえよう。

3. 学歴と地位達成の関連構造　分析その2

これまでの分析では、今田（1998,1999）も含めて、データの年齢幅は20-69歳であった。しかし世代間移動を検討する際にこのような処理では不適切であるという指摘もある。なぜなら、企業に就職したものは20代では管理職にはなり得ないだろう。さらに高齢者の場合、長期

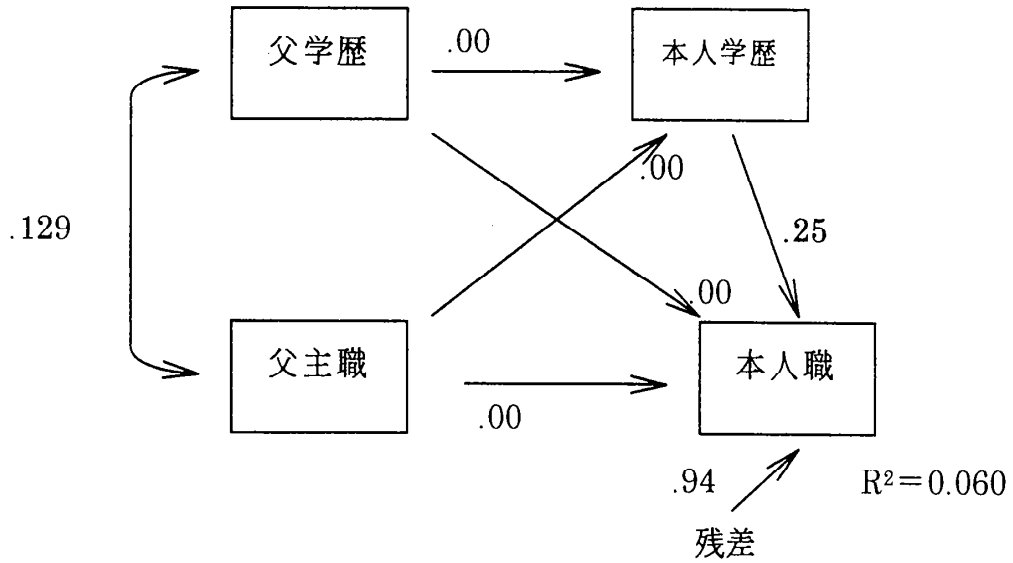
図４　地位達成のパス解析（ペア単位での欠損値削除　データ B)



N=115, カイ二乗値=8.840,df=5,P= .116,

GFI= .961,AGFI= .923,CFI=0.570,RMSEA=0.082

図５　地位達成のパス解析（リスト単位での欠損値削除　データ B)



N=80, カイ二乗値=4.075,df=4,P=0.396,

GFI=0.975,AGFI=0.938,CFI=0.983,RMSEA=0.015

雇用された会社を定年退職し再度別の会社に就職した場合、再就職先は名誉職であることが多く本人の「主な職業」あるいは「実質的な意味での最高到達階層」とはなり得ないだろう。要するに、キャリア上もっとも安定し且つ「主職」と呼ぶことができ、実質的な意味での職業上の最高達成点を明確にする必要があるのだ[3]。この方が、職業達成に対する学歴の効果を見る場合にも、より安定的且つ純粋な効果を測定でき、年齢効果（若年層における職業の未達成、高年層における主職のリタイア）もある程度除去できるだろう。それゆえ、つぎに掲げる処理を行ったデータに対して、あらためて Blau = Duncan モデルを適用してみよう。

3.1. 分析に用いるデータ　B

広島市の調査データのうち、40-59歳の男性に絞ったデータセットを分析に用いる[4]。分析に用いる変数はデータＡに準拠する。

3.2. メリトクラティックな地位達成構造？

図４はペア単位での欠損値削除を行ったデータでの分析結果を示しており、図５はリスト単位での欠損値削除を行ったデータでの分析結果である。両者ともに出身階層・学歴・到達階層の関連構造に違いはない。しかし、年齢制限を施していないデータＡの二つの分析と比べると、出身階層が本人の学歴や地位達成に与える影響は統計的に有意ではない。この結果を見ると、学歴は少なくとも本人の出身階層からの影響を免れており、機会の平等を達成しているかのように見える。そして本人の職業的地位達成については、本人の学歴のみが有意な効果をもたらしている。このことから、少なくとも地方拠点都市においては、メリトクラティックな地位達成が成されていることが推測される。

ある意味このような驚くべき結果は、データの少なさによる歪みによってもたらされているのではないかと思われたが、少なくとも学歴構成や職業威信の分布構成は、データＡとデータＢとでは大きなズレは見られず、年齢を 40-59歳に絞ったデータＢが大幅に偏っているとは言い難い(注を参照)。故に父親の主な職業と本人の主な職業をできるだけ対応させることにより、出身階層・学歴・到達階層間のよりクリアーな関連構造が描き出されたとも言える。しかし、元のデータの回収率が低いことから、サンプル誤差が大きいことは否めない。いずれにせよ、地域別のデータによる詳細な分析が待たれる。

4. まとめ

我々の分析結果から見る限り、地方中核都市における出身階層・学歴・到達階層の関連は、SSM調査による全国的傾向とほぼ同じ構造が見られた。すなわち、地方においても学歴を媒介とした階層の再生産構造が見られ、教育の機会均等や地位達成における業績（メリット）主義化は完全には浸透していないことが明らかになった。ただし他方、学歴獲得や地位達成に対する出身階層の影響力は、全国的傾向に比べると比較的弱く、特に父主職が本人の学歴獲得に与

える影響力が皆無であることに明示されている。しかも父主職と本人の「主職」を対応させるという操作を施すことにより、出身階層の影響力は、学歴獲得や地位達成両方に効果をもたらさなくなっている。このような結果から、政令指定都市規模の人口や産業構造を持つ地域においては、全国レベルのデータからは垣間見ることができない意外な事実－メリトクラシーの浸透－が発掘される可能性を本分析は提示し得た。しかし同時に、回収率の低さ故に、サンプル誤差が大きいデータであるので、今回の分析結果はあくまで一つの仮説を提示したに過ぎず、この仮説的結果を検証するための、地域レベルでの詳細なデータ収集と深遠な分析結果が待たれるところである。

[付記]本論文を執筆するにあたっては、1995年SSM調査データを使用した。データの使用及び結果の発表については、1995年SSM調査研究会の許可を得た。

◇注

(1) 基本統計量はつぎのとおり。

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度		尖度	
						統計量	標準誤差	統計量	標準誤差
本人学歴	302	6	18	13.2	2.718	−0.309	0.140	−0.783	0.280
父学歴	249	6	18	10.1	3.416	0.473	0.154	−0.761	0.307
本人現職威信	244	39	66.6	52.8	8.422	0.817	0.156	−1.044	0.310
父主職威信	260	36.7	66.6	50.4	6.904	1.426	0.151	0.899	0.301
有効ケース	176								

(2) 職業カテゴリーと職業威信スコアはつぎのとおり。

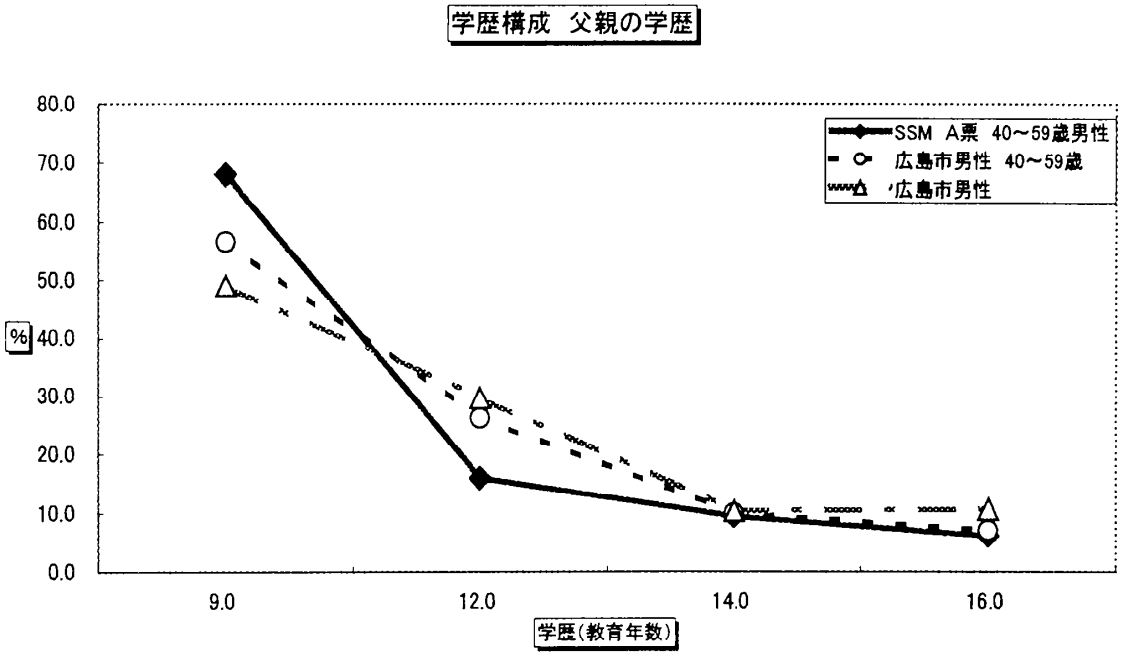
表2　職業カテゴリーと職業威信スコア

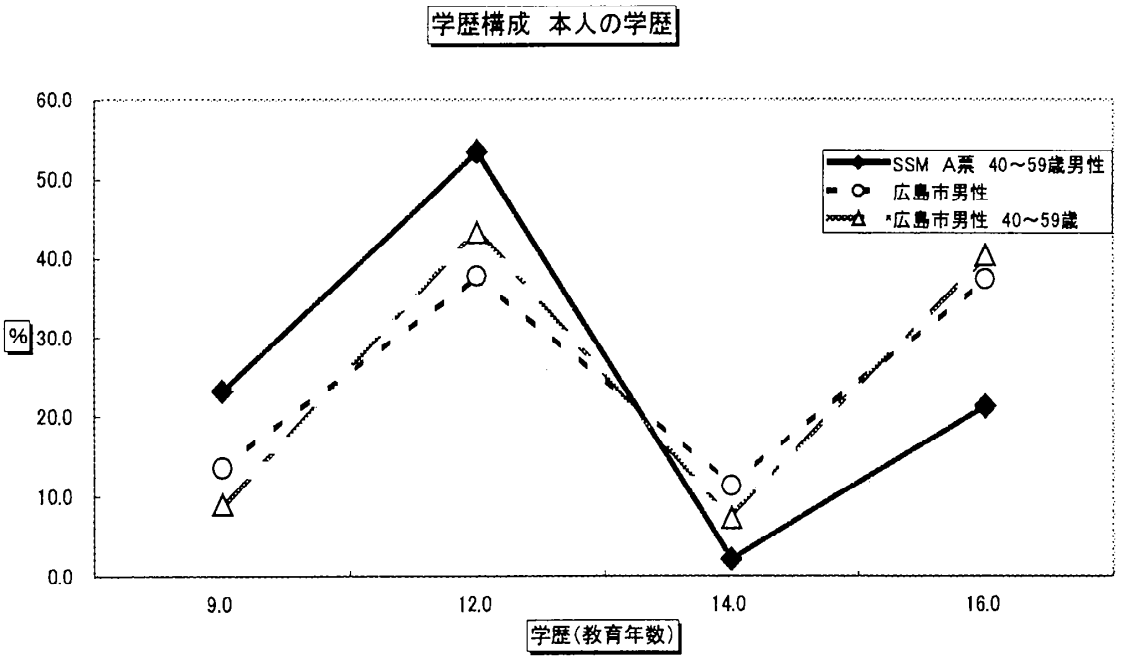
農耕・林業・漁業作業（自営）	45.9
販売的職業に従事	46.1
サービス的職業に従事	45.6
専門的な職業（医者、弁護士、各種技術士、教員、看護婦、芸術家など）に従事	66.6
管理的な職業（国会・地方議員、会社・団体役員など）に従事	64.9
事務的な職業（総務・企画・営業・受付など）に従事	48.6
保安的な職業（自衛官・警察・消防・看守など）に従事	51.9
運輸・通信（電車・自動車・船舶・航空機の運転・操縦、車掌、通信士など）に従事	55.5
採掘作業（採鉱員・採炭員、石切出作業者など）に従事	36.7
窯業（陶磁器、ガラスの製造）、土石製品・金属材料・化学製品製造などに従事	48.4
金属製品・機械などの製造作業に従事	48.9
上記10.11.以外の製品の製造作業（食品・製紙・製材・洋服仕立てなど）に従事	46.8
汽かん士、起重機・建設機械・発電所の機械の運転・点検、電気・電話工事などに従事	48.2
建設作業（大工、配管、道路・鉄道工夫、現場監督など）に従事	47.3
労務作業（倉庫夫、運搬労務、清掃員など）に従事	39.0
その他（　　）	

(3)佐藤（1998, 41頁）を参考にした。

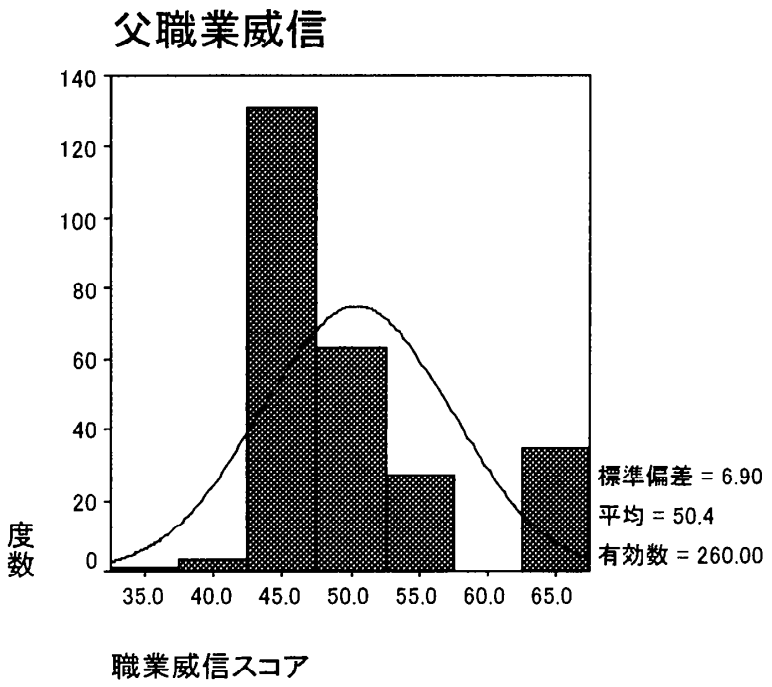
(4) このような処理を施した場合、データは極端に減り、偏りがちであり、分析結果の解釈に

は注意を要する。ちなみに学歴と職業威信の分布を比較すると次のようになる。広島市のデータA・Bは、SSMA票のデータに比べると父親の学歴、本人の学歴ともに若干高学歴者が多くなっている。しかし、広島市のデータAとBを比較すると、分布に大きな偏りはみられない。職業威信については、広島市のデータ自体がカテゴリカルデータを元にしているので、SSM データに比べると分散が小さくなっていることは否めない。しかし、広島市のA・B２つのデータ間で分布に大きな偏りはみられない。

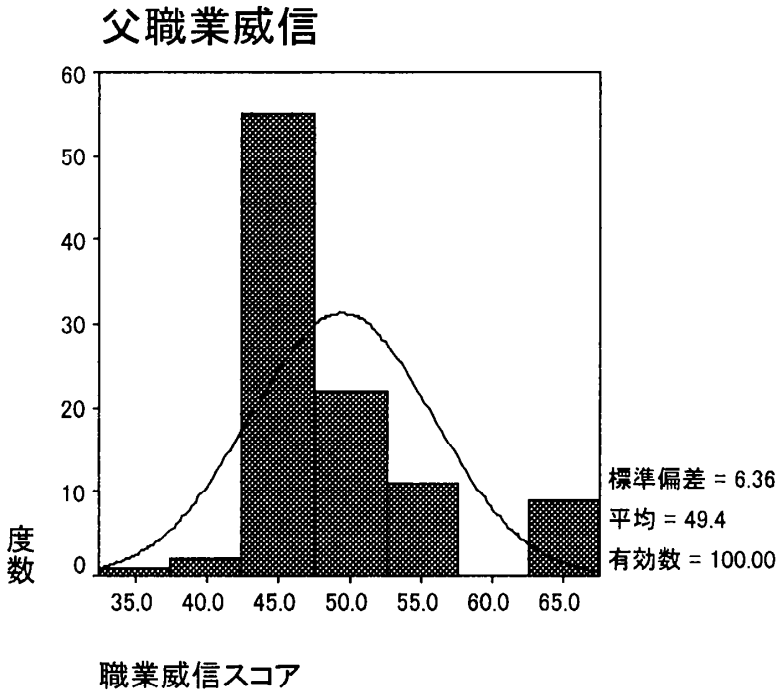




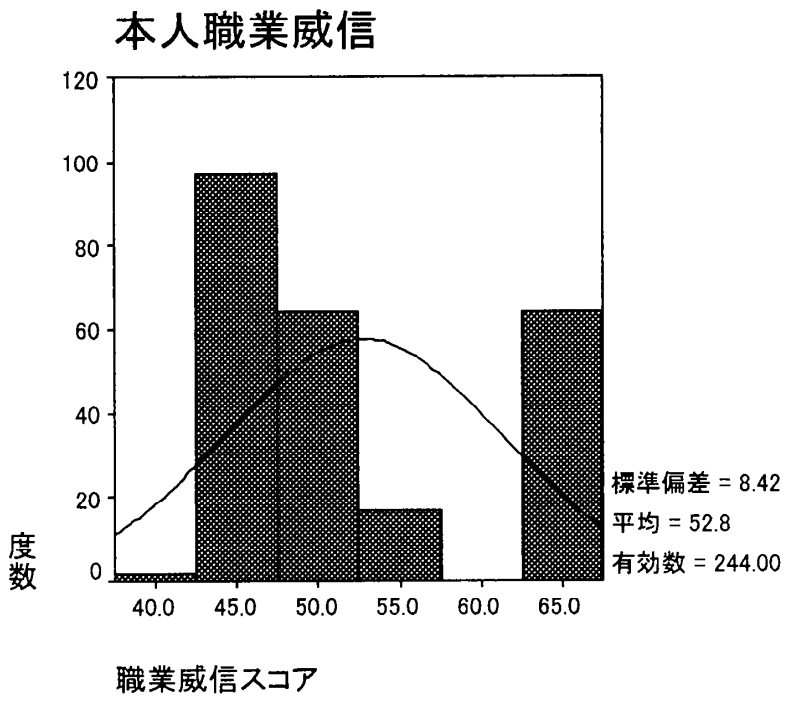
データA


父職業威信
140
120
100
80
60
40
20
0
度数
35.0
40.0
45.0
50.0
55.0
60.0
65.0
標準偏差 = 6.90
平均 = 50.4
有効数 = 260.00
職業威信スコア

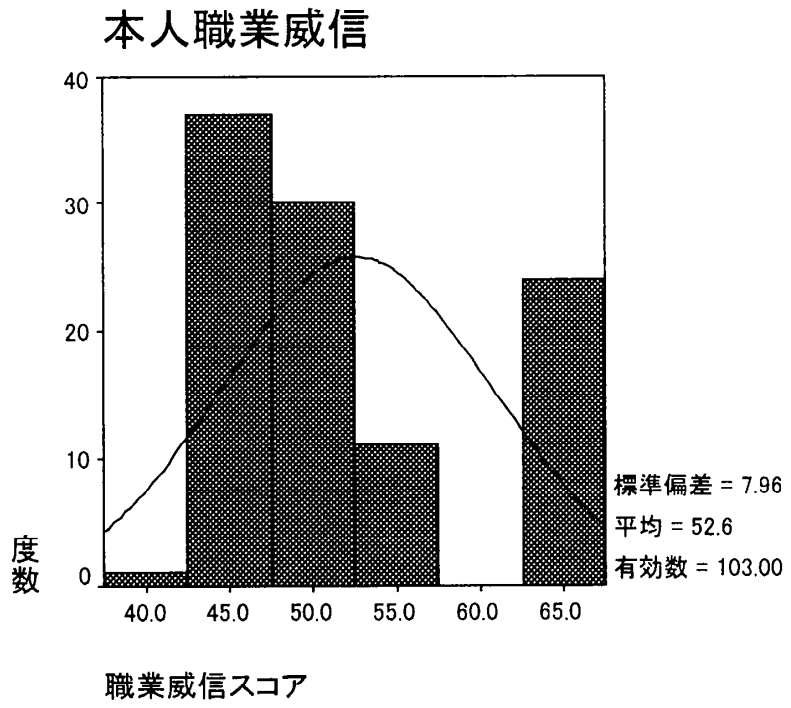
データB


父職業威信
60
50
40
30
20
10
0
度数
35.0
40.0
45.0
50.0
55.0
60.0
65.0
標準偏差 = 6.36
平均 = 49.4
有効数 = 100.00
職業威信スコア

データA


本人職業威信
120
100
80
60
40
20
0
度数
40.0
45.0
50.0
55.0
60.0
65.0
標準偏差 = 8.42
平均 = 52.8
有効数 = 244.00
職業威信スコア

データB


本人職業威信
40
30
20
10
0
度数
40.0
45.0
50.0
55.0
60.0
65.0
標準偏差 = 7.96
平均 = 52.6
有効数 = 103.00
職業威信スコア

◇参考文献

Arbuckle, JL, 1997, Amos Users' Guide Version 3.6, Small Waters Corporation.

Blau, P.M. and Duncan, O.D., American Occupational Structure, New York: Wiley and Sons.

Duncan, O.D., Path Analysis: Sociological Examples, American Journal of Sociology 72 (January): 1-16.

今田高俊『社会階層と政治』東京大学出版会, 1989年。

今田高俊「平等社会の神話を越えて」『日本労働研究雑誌』No.472/October, 1999年. 2-16頁。

今田高俊「社会移動レジームとその融解－戦後日本における産業化の帰結－」今田高俊編『1995年SSM調査シリーズ20　社会階層の新次元を求めて』1995年SSM調査研究会, 1998年, 1-24頁。

佐藤俊樹「被雇用者の職業再生産と階層－階級意識」『日本労働研究雑誌』No.455/May, 1998年, 40-49頁。

佐藤俊樹「20世紀日本の『階層』と移動」佐藤俊樹編『1995年SSM調査シリーズ　近代日本の移動と階層：1896-1995』1995年SSM調査研究会, 1998年。

安田三郎『社会移動の研究』東京大学出版会, 1971年。

第２章　学歴の座標

－人々の意識における学歴の位置－

村澤　昌崇

1.　問題の所在

人々の学歴にまつわる意識を探索的に素描すること、これが本稿の目的である。

これまでの学歴研究を俯瞰してみると、いくつかの制約を抱えていることに気づく。まず第１に、学歴の効果を測定する分析の多くは、職業的地位や収入との関連を分析するものが専らである。こうした分析自体の意義を否定するわけではなく、むしろ時代を重ねることによるデータの蓄積や分析方法の高度化などにより、より精緻な分析結果を我々は手に入れることができるようになった。しかし、学歴にまつわる客観的な分析は、ある意味このような形で精緻を極め縦断的に展開される一方で、学歴が我々の生活世界の中にどのように浸透しているのかについての分析については、一部の研究が散発的に行われるに留まっていた[(1)]。「学校化」や「学歴意識社会」[(2)]－すなわち学校教育・学歴などが、人々のあらゆる場面の中に大きく浸食し、学校・学歴が人々の行動座標軸の中心となっているかのような現象－が叫ばれる今日において必要とされる分析は、現段階で、人々が「どんな場面で」学歴を意識しているか/いないのか、を詳細に記述することではなかろうか。

第２に、学歴の効用、たとえば社会的地位達成などに対する効果を分析するときの比較対象が、出身階層（両親の学歴・職業的地位）などのように限定されていたことである。もちろんこれはそれ以外の要因を全く無視していたわけではなく、研究関心の関係から「誤差」という形で一括して処理されることが多かった。しかし「誤差」の与える影響－いや、むしろ学歴や出身階層などで説明できない部分と言った方がいいかもしれない－は、一説では８割～９割に及んでいることを考えると[(3)]、「誤差」という形で一括して処理され封印されていたものを詳細に探索してみたいという衝動に駆られる。つまり、封印されていた「誤差」をできるだけ開放することによって、学歴の相対的位置づけをよりリアルなものとする作業を試みるのである。

以上のような問題関心のもとで、抽象的とも思える「学歴社会」のイメージが、実は何を指していたのか－人々の意識の中における学歴の座標を探索するという我々の作業によって、この問題にささやかながらアプローチしていきたい。

2. 調査の内容・方法

分析に用いるデータは、1998年7月に広島市の2つの区2462名を対象に実施した「学歴と生活に関する意識調査」(回収数694、回収率28.1%) において、現在の日本社会において、個人に関して次にあげるA群の(a)～(e)が何によって決まるかを、B群より2つまで選択して回答してもらった。

A群： (a)学歴、(b)収入、(c)社会的地位、(d)近所の評判、(e)会社や組織内での地位、(f)自分の仕事にとりわけ必要なもの

B群：

1. 性格・人柄の良さ
2. 性別
3. 努力
4. 上司の評価
5. 家柄
6. 年齢
7. 勤続年数
8. コネや縁故
9. 生まれつきの能力
10. 同僚の評価
11. 肩書きとしての学歴
12. 実力としての学歴
13. 特定の学校歴
14. 入社試験
15. 幸運
16. 仕事の出来映え
17. 人望
18. 本人の希望
19. 学閥
20. 協調性の高さ
21. 資格
22. 組織への忠誠心
23. 個性
24. 団体スポーツ競技経験
25. その他

複数回答なので、A群の(a)～(e)それぞれについて例えば「1.性格・人格の良さ」を選択すれば1，そうでなければ0のカテゴリカル変数に変換した。故に変数は、A群の(a)～(e)それぞれについて25変数、合計125変数となる。しかし実際にはあり得ない回答もあるので、それらを取り除いて集計した結果を以下に示していく。

3. 分析結果

3.1. 意識世界における学歴の規定要因と学歴の規定力

3.1.1. 学歴の規定要因

まず学歴の規定要因については、「努力」をあげる者がもっとも多い。次いで「生まれつきの能力」が多く、「本人の希望」や「家柄」「性別」などの属性要因や「幸運」のような運的な要素を学歴の規定因と見なす人は極端に少ない（図1）。

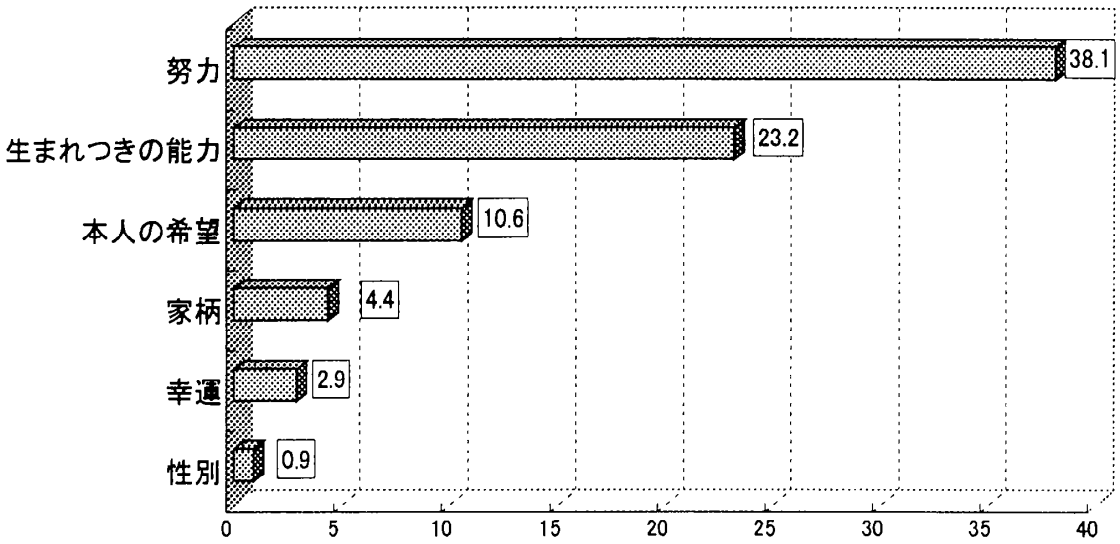
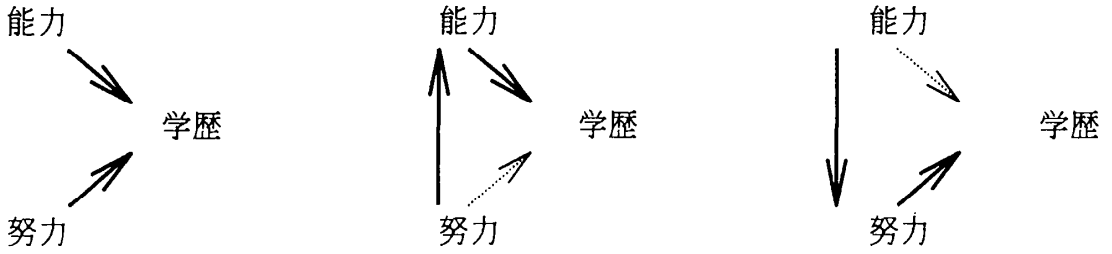


図1　学歴の規定要因に関する意識

次にこれら学歴の規定要因として選択されている6つの項目群を、等質性分析（HOMALS）を用いて分析することにより、その関連性を布置構造で表現し検討した（図2）。次元1と次元2の固有値はそれぞれ0.230と0.178であり、2つの次元でデータの40.8%が説明されていることになる。つぎに変数の布置構造を見ると、3つの大きな特徴、すなわち「家柄・幸運決定論」「性別決定論」「能力・努力決定論」の3つの方向性が見いだせる。「家柄」「幸運」は、常識的には関連が無いようにも思えるが、いずれも「自分ではどうすることもできない」という意味で共通している。その点で「性別」も本人の選択の自由度がほとんど無いものであるが、人々が「家柄」や「幸運」とは異なる位置づけをしていることは注目すべき点である。しかし、単純集計の結果を見てもわかるように、学歴の規定要因として性別を選択した人は1.0%（4人）しかいないので、この結果をそのまま受け止めるには注意が必要である。一方「生まれつきの能力」と「努力」は共に学歴を獲得する上で等価なものとして位置づけられていることは興味深い。しかしこれら項目の位置づけはきわめて微妙で、考えられ得る限り、以下のような異なる現象に対する認識を、一つの空間に凝縮している可能性がある。

①素質と能力が独立に影響　　②努力による能力の可変　　③能力に努力を上乗せ



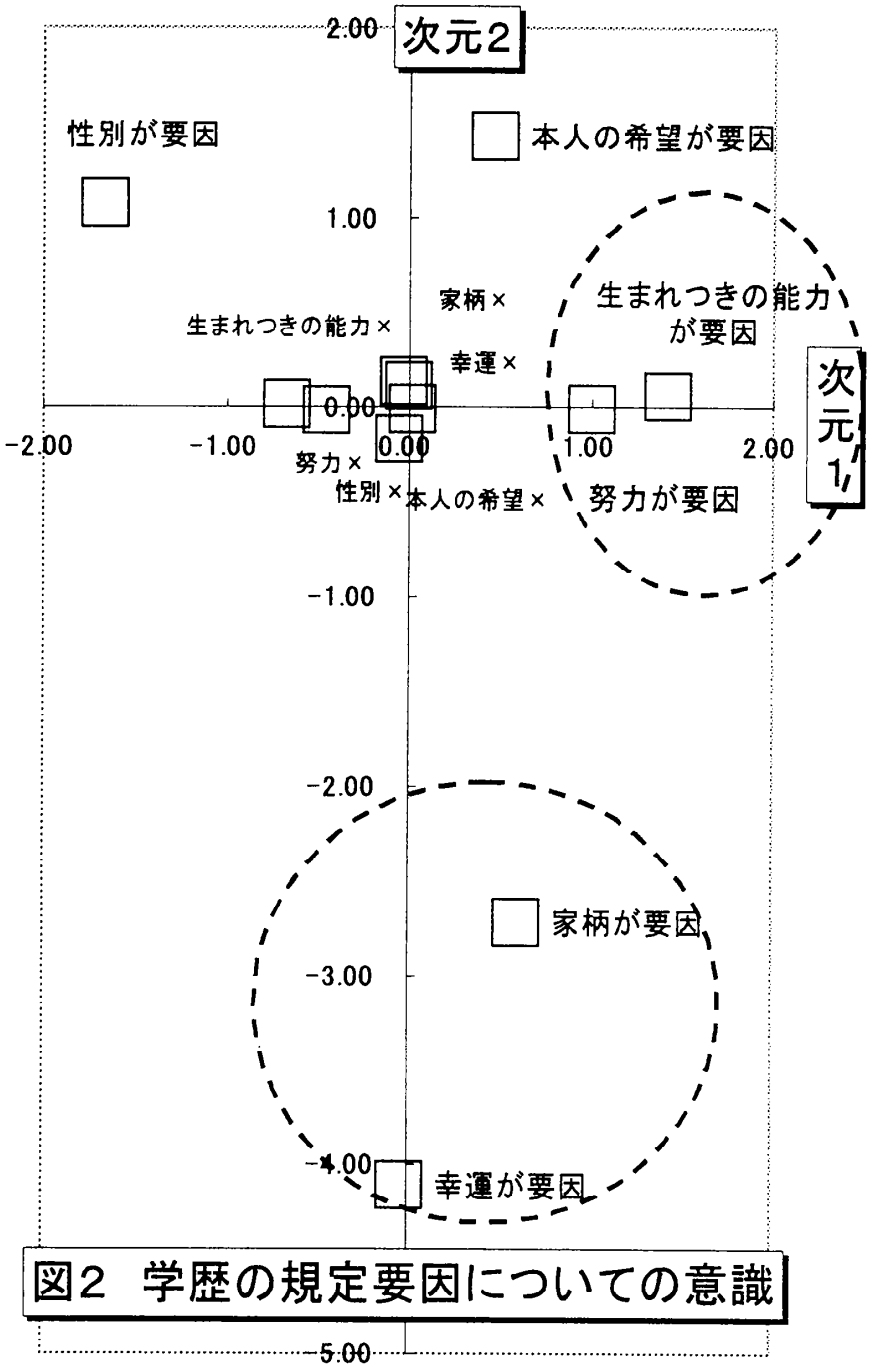


図2 学歴の規定要因についての意識

学歴獲得過程に関する「生まれつきの能力」と「努力」の関係の認識については、上の構造のうち、どれをイメージしているのかを厳密に検討する必要があるが、今回のアンケートでは質問項目の関係からクリアーにはできない。よって今後詳細な調査による分析が必要とされる。しかしいずれにせよ、「生まれつきの能力」「努力」は両方とも個人にかかわるもので、内因性のものである。あえて断言すれば「自分自身」であると言える。そうした観点から捉えるならば、「学歴獲得には、『自分自身』に依るところが大きいのだ」と認識していることがうかがえる。

3.1.2. 収入の規定要因

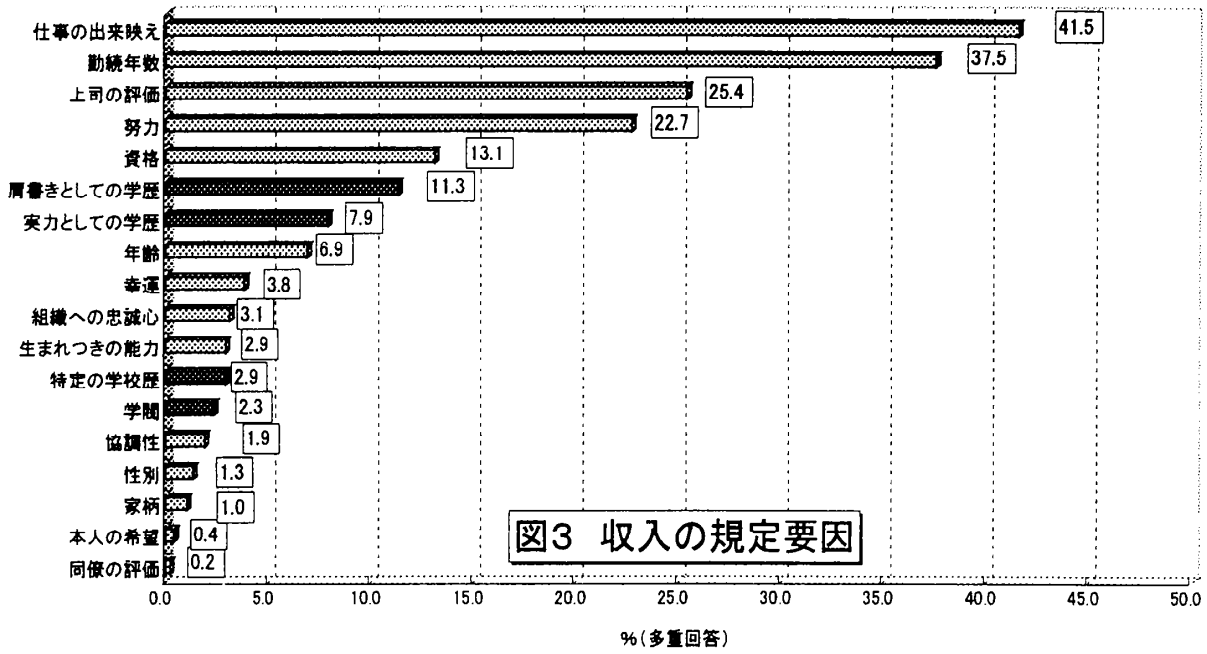


図3 収入の規定要因

次に収入の規定要因については、「仕事の出来映え」をあげる者がもっとも多く、次いで「勤続年数」「上司の評価」「努力」と続く。「肩書きとしての学歴」や「実力としての学歴」を収入の規定要因と答えている人は10%前後と少ない。さらに「生まれつきの能力」や、「家柄」や「性別」などの属性、「協調性」や「組織への忠誠心」などの態度を収入の規定因と見なしている人は、ごく少数の人である。これから推測されるのは、1)「年と功」という意味での「年功」の依然としての重みと、2)象徴的・実質的如何に関わらない学歴（学校歴）の軽視と、3)属性や態度の軽視である（図３）。

3.1.3. 社会的地位の規定要因

収入とは一変して「人望」といった人格的要素や「肩書きとしての学歴」を社会的地位の規定要因として選ぶ者が多く、他の要素に比べると頭一つ抜け出ている。しかしこれらを選択する者は全体の３割に達しておらず、「学歴」「収入」の規定要因の時と比べると回答が分散傾向にある。これは裏を返せば「社会的地位」の構成要素自体が多岐にわたることを物語っていることでもあろう[4]。「実力としての学歴」は、「肩書きとしての学歴」よりも社会的地位形成機能が低いと評価されており、その差は10%の開きがある（図４）。

3.1.4. 会社や組織内での地位の規定要因

他を圧倒して抜きんでているのは、「上司の評価」、それに次いで「仕事の出来映え」であるが両者の差は10%の開きがある。これらの次は15%の開きがあり、「組織への忠誠心」「同僚の評価」「人望」「努力」「協調性」などの態度や性格や他人の評価が続く。興味深いのは、収入の

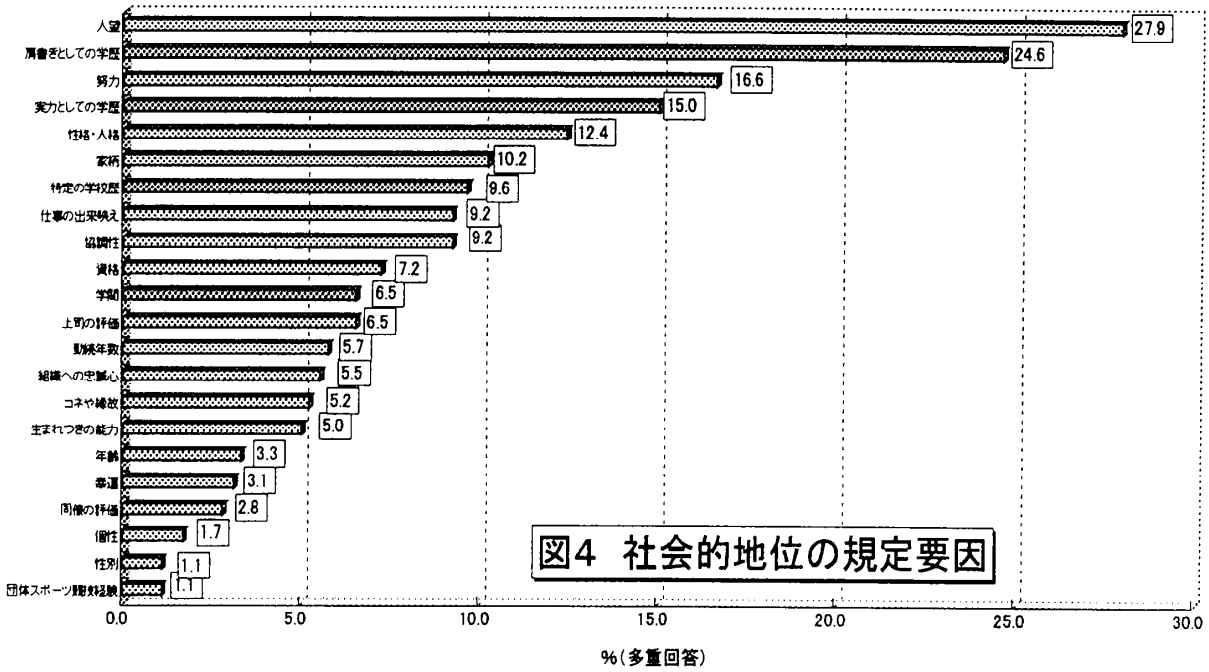


図4 社会的地位の規定要因

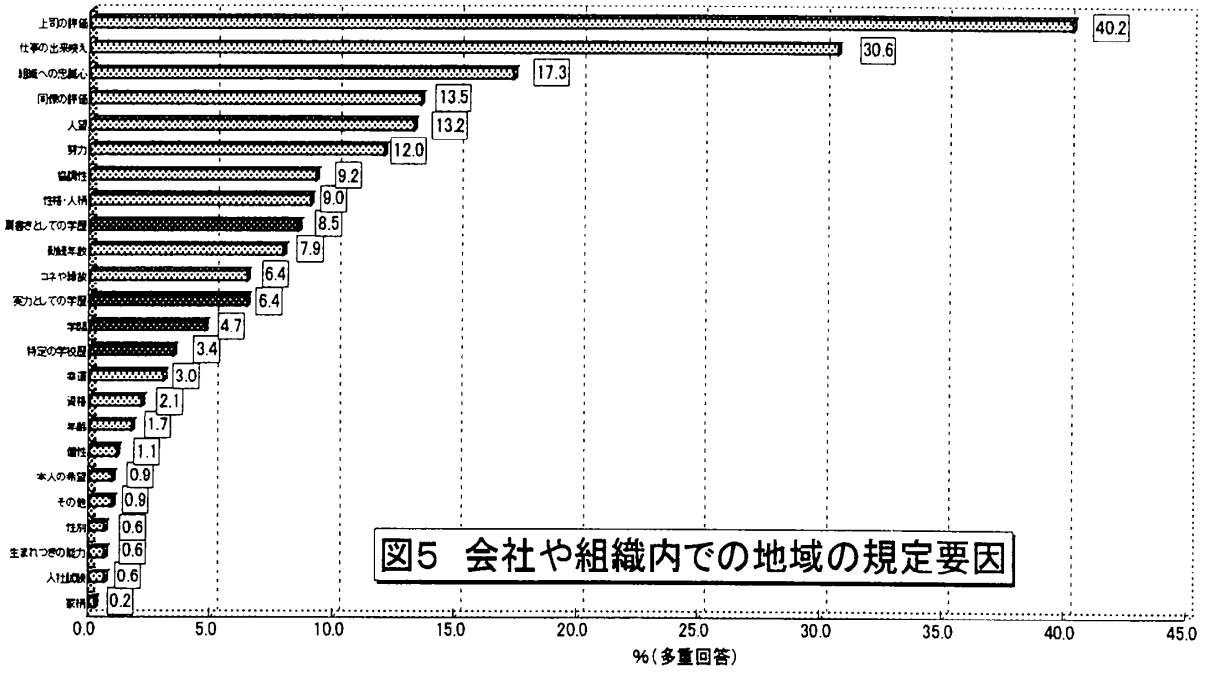


図5 会社や組織内での地域の規定要因

規定要因で上位にあがっていた「勤続年数」が、ここでは少ないことである。収入は「<年と功>の年功」がダイレクトに反映されているが、会社や組織内の地位については年功の「功」の部分、すなわち業績のみが反映されていると見ているようだ。学歴については象徴的・実質的の如何に関わらず、その効力を認めている人は少ない。性別や家柄などの属性的要因に対する評価も低い（図５）。

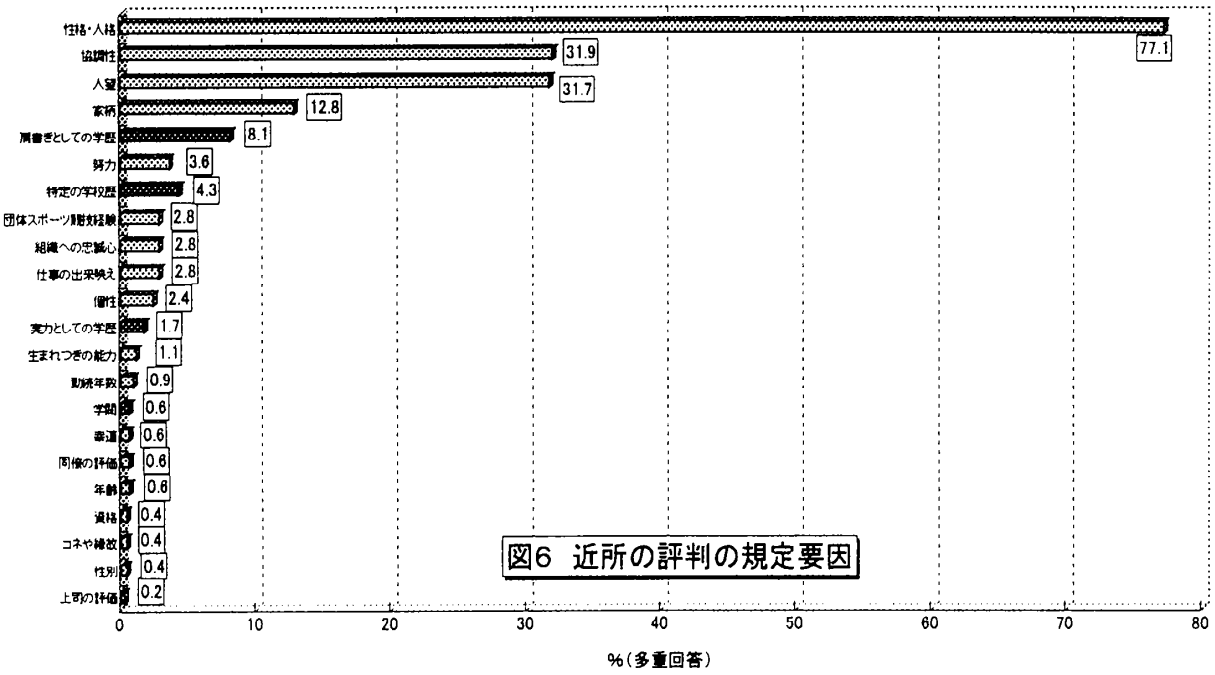


図6 近所の評判の規定要因

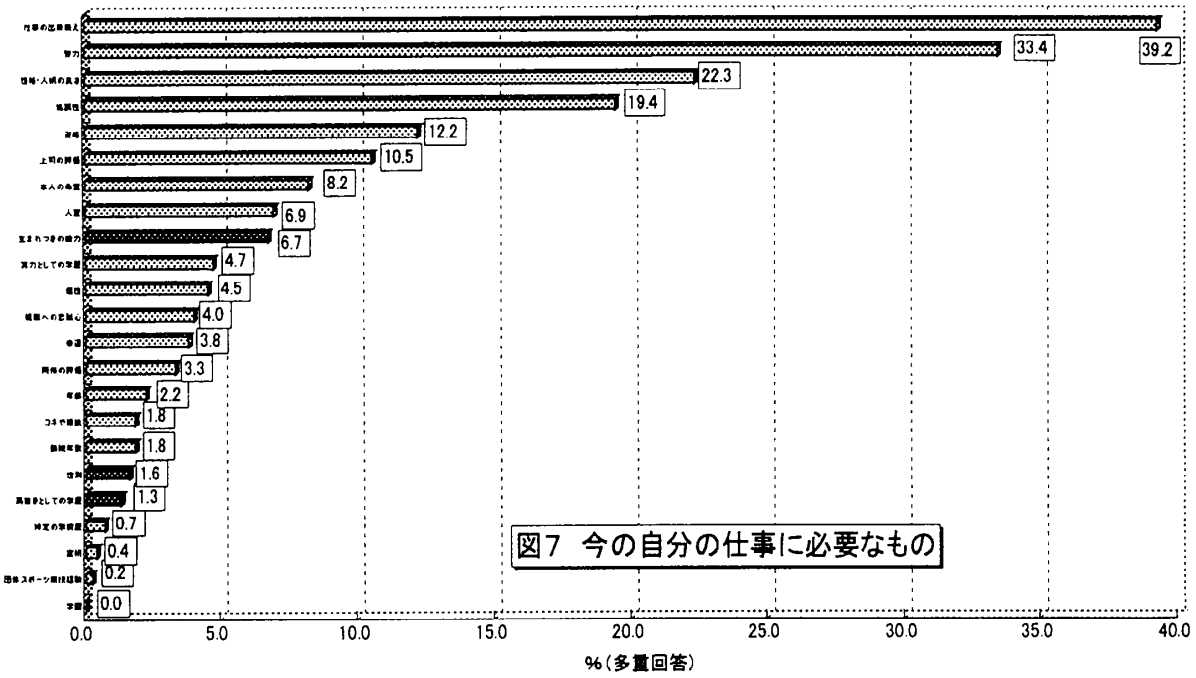


図7 今の自分の仕事に必要なもの

3.1.5. 近所の評判の規定要因

「性格・人格」が他を圧倒する形で多くの人々から支持されている。ついで「協調性」「人望」など、トップ3位にランキングされたものはすべて人格的要素である。4番目には「家柄」、5番目には「肩書きとしての学歴」が位置しているが支持率はともに12.8%、8.1%と低い。残りの項目はすべてドングリの背比べで大きな差はない(図6)。

3.1.6. 自分の仕事に必要なもの

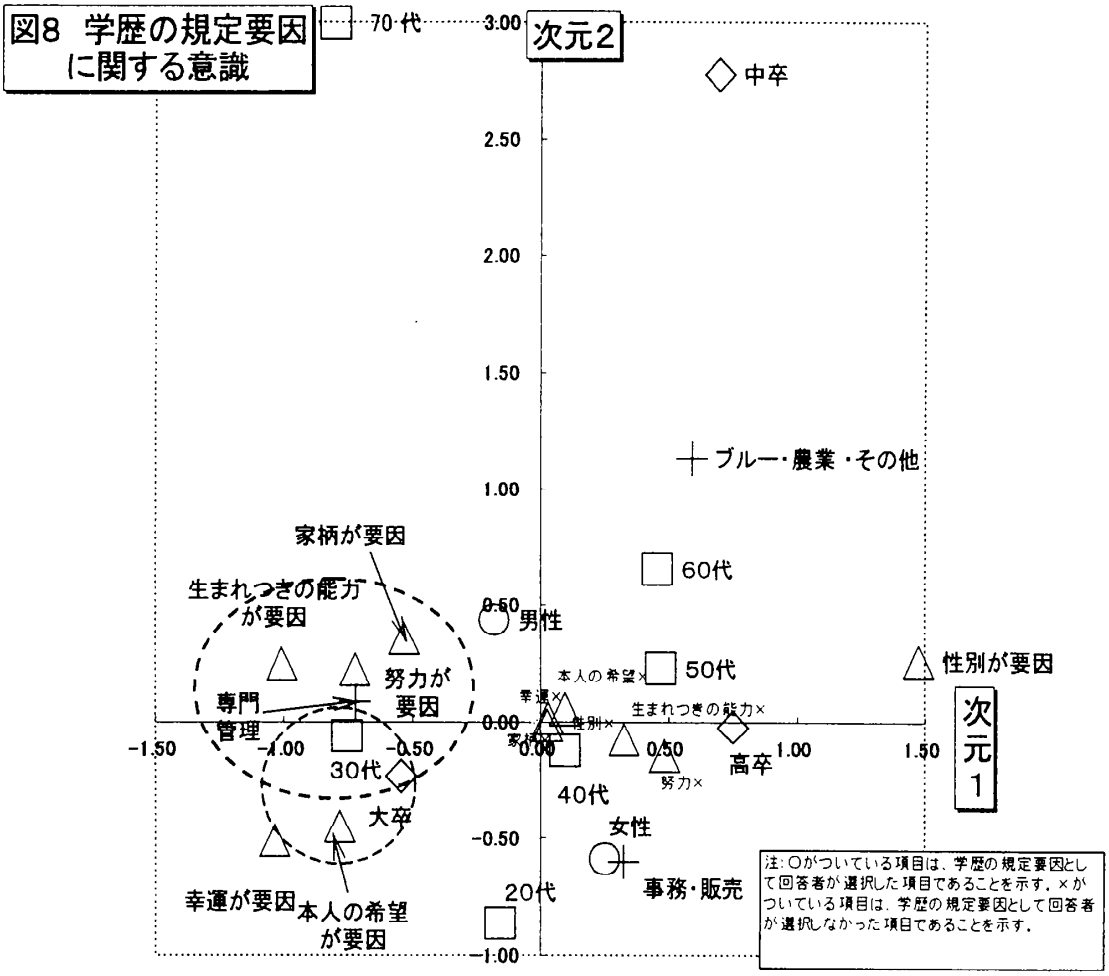
抜きんでているのが「仕事の出来映え」と「努力」である。次いで「性格・人格の良さ」と「協調性」が高い。これらに比べると属性的要因や学歴を自分の仕事に必要なものと答える者は非常に少ない。優先順位が、1)output、2)output に至るまでの process、3)仕事を共同あるいは組織で進める上で必要な「和」となっている（図７）。

3.2. 学歴を意識する人々はどんな人か

では、(a)学歴の規定要因として「努力」「生まれつきの能力」「本人の希望」「家柄」「性別」「幸運」をそれぞれ選んだ人々はどんな人たちなのか。そして(b)収入、(c)社会的地位、(d)近所の評判、(e)会社や組織内での地位、(f)自分の仕事の規定要因として、学歴に関係する事柄を選んだ人々はどのような人なのだろうか。彼らの基本的属性やプロフィールなどとの対応関係を検討してみよう。

3.2.1. 学歴の規定要因についての認識と本人の属性との関係

図８は、図２の分析をさらに拡張し、学歴の規定要因として考えられる６つの項目（「性別」



「努力」「幸運」「生まれつきの能力」「家柄」「本人の希望」）と、性別（１＝男、２＝女）、年齢（１＝２０代、２＝３０代、３＝４０代、４＝５０代、５＝６０代、６＝７０代）、本人の学歴（１＝中卒、２＝高卒、３＝大卒）、本人の現在の職業（１＝専門・管理、２＝事務・販売、３＝ブルーカラー・農業・その他）との関連を等質性分析により検討したものである。次元１と次元２の説明率はそれぞれ 0.231、0.183 であり、２次元でデータの 41.4%が説明されている。特徴的な関連を見いだすとすれば、30 代、専門・管理職の人は、学歴が「努力」「生まれつきの能力」「家柄」で規定されていると考える傾向がある。大卒は「本人の希望」（読み替えればアスピレーション）を学歴の規定要因として重視する傾向がある。しかし、「学歴の規定要因」の６項目と本人の属性との関係は、必ずしも明確ではない[5]。

3.2.2. 収入・評判・地位の規定要因に関する認識と本人の属性

以下では、「収入」「社会的地位」「会社・組織内の地位」の規定要因と、「あなたの仕事に必要なもの」に関する認識について、性別・学歴別・本人の職業別・年齢別に見た場合に、意識差があるかどうかを検討してみる。なお、項目数が多いために、クロス表で検討した結果を表１～４に示している。分析の結果次のような傾向が見られた。

① 性別による違い

表１　収入・地位・評判などの規定要因に関する意識　性別

	男	女
収入の規定要因　努力	29.9	15.9**
収入の規定要因　勤続年数	29.9	44.7**
会社・組織での地位の規定要因　努力	15.4	8.7*
会社・組織での地位の規定要因　幸運	4.8	1.2*
会社・組織での地位の規定要因　仕事の出来映え	35.7	25.7*
あなたの仕事に必要なものの規定要因　性格・人格	13.3	31.3**
あなたの仕事に必要なものの規定要因　上司の評価	13.8	7.1*
あなたの仕事に必要なものの規定要因　人望	9.3	4.5*

数値は、それぞれの項目を「規定要因」として選択した人の比率。
**はカイ２乗検定の結果、５％水準で、*は１％水準で有意であることを示す。
以下の表も同様である。

まず気がつくのは、収入、地位、評判、仕事に必要なものとして「肩書きとしての学歴」「実力としての学歴」「特定の学校歴」「学閥」などを挙げる人に男女差が見られないことである。収入が「努力」によって決まると思っているのは、男性に多い。勤続年数によって決まると思っているのは女性に多い。会社・組織での地位が「努力」「幸運」「仕事の出来映え」によって決まると思っているのは、男性に多い。自分の仕事に必要なものが「性格・人格」によって決

まると思っているのは女性に多い。「上司の評価」「人望」によって規定されると思っているのは男性に多い傾向である（表１）。

② 年齢による違い

表２　収入・地位・評判などの規定要因に関する意識　年齢別

	２０代	３０代	４０代	５０代	６０代	７０代
社会的地位の規定要因　努力	18.8	27.9	13.6	12.2	9.4	20.0*
社会的地位の規定要因　上司の評価	12.5	4.7	8.0	4.1	2.4	15.0*
近所の評判の規定要因　特定の学校歴	11.5	5.6	2.2	1.0	3.4	**
会社・組織での地位の規定要因　性格・人格	14.1	7.9	6.6	2.9	9.4	25.0*
会社・組織での地位の規定要因　協調性	1.3	13.5	5.5	14.6	11.8	**
あなたの仕事に必要なものの規定要因　性格・人格	37.3	19.0	18.5	22.0	16.7	22.2*

社会的地位の規定要因として「努力」を挙げるのは30歳代に多い。「上司の評価」を挙げるのは20代と70代に多く二極分化している。近所の評判が「特定の学校歴」によって決まると考えているのは20代に多い。会社・組織内での地位が「性格・人格」で決まると思っているのは70歳以上に多い。「協調性」を挙げるのは30、50歳代に多い。自分の仕事に必要なものとして「性格・人格」を強調するのは20代に多い（表２）。

③ 学歴による違い

表３　収入・地位・評判などの規定要因に関する意識　学歴別

	中卒	高卒	大卒
近所の評判の規定要因　家柄	29.0	12.9	11.2*
近所の評判の規定要因　実力としての学歴	3.2	3.5	0.4*
近所の評判の規定要因　資格	3.2	0.6	*
近所の評判の規定要因　団体スポーツ競技経験	9.7	4.7	0.8**
会社・組織での地位の規定要因　仕事の出来映え	16.7	16.7	42.0**
あなたの仕事に必要なものの規定要因　年齢		5.4	0.4**

収入の規定要因に関する意識については学歴による格差は見られない。近所の評判を「家柄」「実力としての学歴」「資格」「団体スポーツ経験」によって決まると見ているのは中卒者に多い。会社・組織での地位が「仕事の出来映え」によって決まると考えているのは、大卒者に多い傾向である。自分の仕事に必要なものとして「年齢」を挙げているのは、高卒者に多い（表３）。

③本人の職業による違い

収入、地位、評判、仕事に必要なものとして「肩書きとしての学歴」「実力としての学歴」「特

定の学校歴」「学閥」などを挙げる人に、職業による差が見られないことがわかる。会社・組織での地位が「仕事の出来映え」で決まると考えているのは、専門・管理、事務・販売職に多く、「組織への忠誠心」だと考えているのは「事務・販売」に多い。自分の仕事に必要なものとして「上司の評価」「年齢」「勤続年数」を挙げるのは、ブルーカラー、農業、その他の職業に多い。

表4　収入・地位・評判などの規定要因に関する意識　職業別

		専門・管理	事務・販売	ブルー・農業・その他
会社・組織での地位の規定要因	仕事の出来映え	41.6	42.9	25.7**
会社・組織での地位の規定要因	組織への忠誠心	15.7	25.7	13.1*
あなたの仕事に必要なものの規定要因	上司の評価	5.7	14.5	15.2*
あなたの仕事に必要なものの規定要因	年齢	0.8	0.8	6.1*
あなたの仕事に必要なものの規定要因	勤続年数		0.8	4.5*

以上の結果を学歴関連の項目に限定して概観してみると、学歴関連の項目（「肩書きとしての学歴」「実力としての学歴」「特定の学校歴」「学閥」）が収入・地位・評判などの規定要因となっているかどうかについて、性別・年齢・学歴・職業による意識差は大きくないと言えよう。

4.　結論

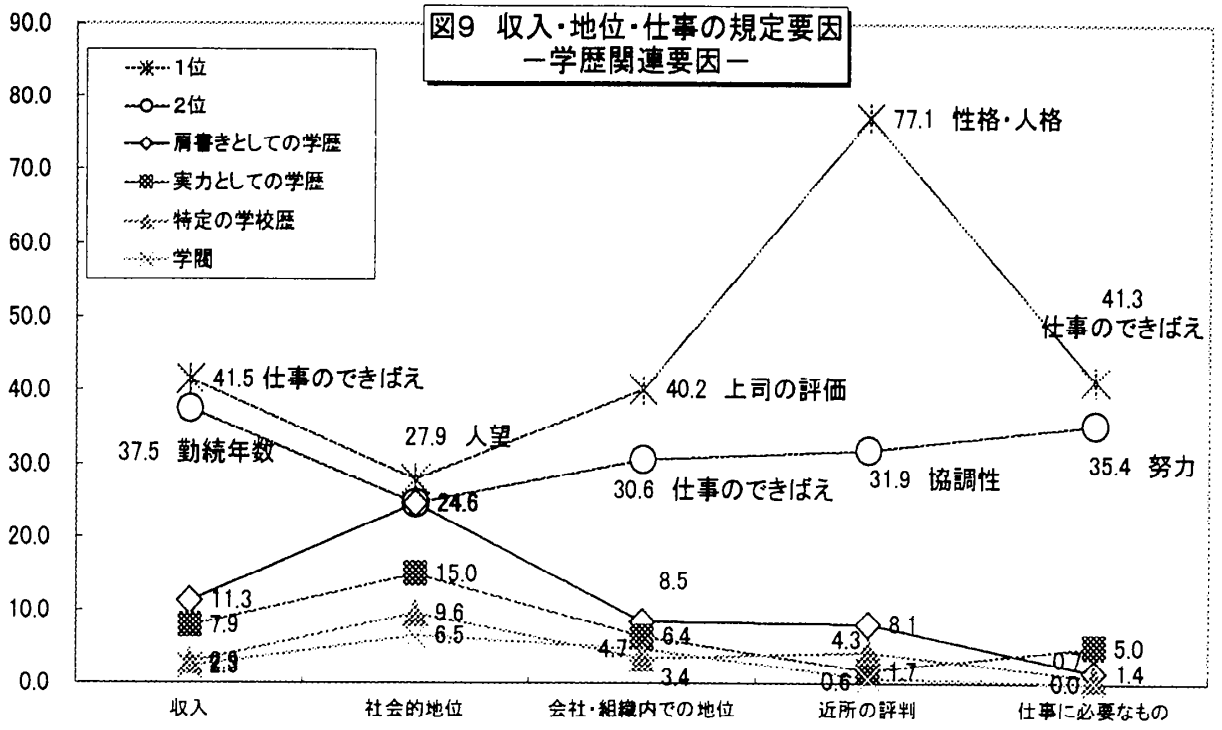
これまでの結果を改めて整理し、若干の考察を加えてみよう。

4.1.　学歴は「生まれつきの能力」と「努力」によって決まる

学歴は何によって決まるのか。この問いに対して「努力」によって決まると考えている人が最も多い。しかしその人の取得した学歴や職業によるところも大きく、大卒や専門・管理職に就いている人は、学歴獲得がより多くの要因によって成し遂げられていると見ている。

4.2.　人々の意識の中における「学歴」の希薄化

「収入」「会社・組織内での地位」「近所の評判」の決め手として、そして「あなたの仕事に必要なもの」として、「学歴」が占める位置は高くはない。それぞれについて1位に位置づけられている規定要因と比べてみても、「肩書きとしての学歴」「実力としての学歴」「特定の学校歴」「学閥」の位置は、順位の点（最高で5位、最低だと19位）でも%ポイントの点（1位との開きで「収入」で30.2%ポイント、「近所の評判」で69.0%ポイント）でも大きく下回っている。



図注1：数値は収入・地位・評判などの規定要因として、それぞれの項目（例えば「仕事のできばえ」「人望」などを指す）を選んだ人の比率。

図注2：丸のついた番号は、それぞれの項目が、収入・地位・評判などの規定要因として選んだ人の比率が、上から数えて何番目だったかを示す。

これまでの学歴にまつわる議論は、「学歴主義社会」論や「過大学歴社会」論－すなわち学歴が実力を反映していないにも関わらず、学歴を過度に尊重する社会－を議論していた。あるいは「学歴意識社会」論－学歴が社会的・経済的地位を形成する上で格別大きな役割を果たしていないことが事実上確認されているにもかかわらず、人々のまなざしや意識の中で学歴が大きな位置を占めている状態－を議論していた。しかし我々の調査結果から描き出された学歴の存在は－あくまで意識の中であるが－社会的地位に対する効果を除けば、あまりにも希薄である。少なくとも人々の意識レベルにおいて、その中身がどうであれ（「肩書きとしての学歴」であろうが「実力としての学歴」であろうが）、学歴は「収入」「会社・組織内での地位」「近所の評判」「自分の仕事」を決定づける重要な要素とは位置づけられなかったのである。むしろこれまで蓄積されてきた学歴の効果に関する分析結果－すなわち、学歴の社会経済的効果はそう大きなものではなく、むしろそれ以外の要因の説明力が大きい－と、人々の意識がかなり重なり合っていると見なしても過言ではあるまい。

4.3. 意識世界における２つの学歴社会イメージ

しかし他方、「社会的地位」[6]の規定要因として「肩書きとしての学歴」が比較的多くの人々によって支持された（図９）[7]。この結果だけを取り上げれば、今日においても依然として人々の意識レベルにおいて「学歴主義社会」という社会認識が根強いことが指摘できるかもしれない。だが、一見すると上述した傾向とは矛盾する。

注意せねばならないのは、「社会的地位」という言葉自体が抽象的で、「収入」「会社や組織内での地位」「近所の評判」などのようにより指標化されたものとは異なり、構成概念[8]に近いことである。むしろ「収入」「会社や組織内での地位」「近所の評判」などの具体的指標で構成される潜在変数のようなものだ。このことを踏まえると、意識のレベルにおいては、より抽象度の高いレベルでの学歴論議と、より具体的な指標や場面をイメージした状況下での学歴論議が、ズレを見せているということになる。この問題をどう受け止めればいいのか。

4.4. 学歴は人々の意識レベルでももはや効果がないのか？

一つの突破口は、これまでの学歴社会論からすれば意外な、しかし実際の学歴の効果に近い人々の評価を元に、逆に「学歴主義社会」「学歴意識社会」「学歴社会の仮想現実」などの諸説の妥当性や今日的意義を、改めて吟味する必要を迫ることである。ある意味、このような結果は大いに予想されたことでもある。それは今日の教育の大衆化を見れば火を見るより明らかだ。高等教育がエリート、マス、ユニバーサル化への道を進むことと反比例するかたちで、学歴の価値は数的にレア（rare:希少性の高い）、アンコモン（uncommon:希な）、そしてコモン（common:一般的な）へと価値を下げていった。このような時代に、その中身如何に関わらず高い学歴を取得したとしても、価値がレアだった時代と同じ人生や物語を生きることはもはや難しい。

「学歴主義社会」論が妥当性を持っていた時代、それは教育機会が今日に比べると開かれておらず、経済的な理由や家庭の事情で教育機会を利用できない人も多かった時代である。この時代の人々のうち、「学歴取得に至るまでの教育の不平等を体験してきた人々が、学歴取得後の学歴による差別を恨んだ」[9]のである。そのことが契機となっているかどうかはわからないが、実際に教育機会は急速に開かれていくことになる。しかし、熾烈な受験競争を勝ち抜いてやっとの思いで獲得した学歴は、もはや前世代の時のようなオールマイティーパスではなかったのである。人々が論じ罵りながらも羨望の的でもあった（高）学歴は、「学歴主義社会」論の中で展開された「学歴と実力の不一致」という見方が、あたかも「予言」となって「自己成就」[10]するかのごとく、その実質的価値を高等教育の大衆化過程の中で失っていくのである。アンケートに答えた人々は、実はこのような学歴の価値の変遷を身近に、具体的にそして冷静に感じているのではないか。

4.5. 学歴は日本人にとって半永久的な敵なのか

しかし他方、次のようにも考えられる。人々にとって学歴とは、たとえ現実とは食い違って

いたとしても、許してはいけない悪であり敵なのだ、と。意識のレベルでも、より具体的な指標や身近な場面をイメージすれば、学歴のもたらす効果についての人々の評価は、学歴の実際の効果に近いものであったのに、より抽象的なレベル（社会的地位の規定要因）では、依然として「肩書きとしての学歴」が幅を利かせている－この分析結果は、学歴の社会経済的地位形成効果が必ずしも大きくないという事実を認識していたにもかかわらず、我が国を「学歴が過度に偏重されている社会」とした臨教審答申と似ている。学歴社会に関する臨教審答申の議論の揺れについては、学歴が人々のまなざしの中で「貴種」「プライド」として作用しているからだ、とする説明もある[11]。これはおそらく、学歴の実際の効果と、人々の意識における学歴は異なることを暗に指摘していよう。しかし、我々の調査は、意識レベルでも、学歴の効果に関する評価が二極分化していることを描き出したのである。これはまるで、学歴について漠然と、総論的に述べるときには、常に「こう論じよ」というマニュアルがあたかも存在しているようである。あるいは一種の「すり込み」であり、その結果生じる条件反射のようでもある。おそらく日本の学歴を論じるときに、人々の間で共有されるようになった「学歴主義社会」という「公式の解釈図式」であり「了解」[12]なのだろう。

このような学歴に関する「了解」が「了解」として今も根強く「了解」たりうることの意味はなんだろうか。学歴のもたらす「生々しい」効果に薄々気づき始めているということは、逆に自分自身に帰責される部分が相対的に肥大していることにも気づいている、ということでもある。「収入」「会社・組織内での地位」「近所の評判」の規定要因や、「自分の仕事に必要なもの」として、「仕事の出来映え」の評価が高いことからもそれはうかがえる。自分自身にすべてが帰責される社会、それは実力主義の到来という意味にも解釈でき、今の社会においては華々しく歓迎されるかもしれない。しかしすべてが自分の責任であるから、逃げ道の余地は少ない。そんな精神的負担が増大する複雑化した社会において、人々はわずかな「言い訳」を学歴に求め、敵に仕立て上げないと、精神的負担の増大に耐えられず、生きていくことができないのかもしれない。学歴を糾弾しながら結果的には学歴にしがみついている－そんなパラドックスが今後も続いていくのであろうか[13]。

◇注

(1)原田(1975)を参照。

(2)竹内(1995 90頁)を参照。

(3) たとえば今田（1989, 1998, 1999）を参照。

(4) 社会学の社会階層と社会移動調査では、本人の社会的地位の指標に職業威信を使用することが多いが、この職業威信自体さまざまな測定尺度を用いて総合的な数量指標としている。

(5) 今回の分析では、直感的な把握を優先し、二次元の出力にとどめたが、変数間の関係が高次で複雑な場合もあり、その場合、二次元空間に表現された布置構造は、歪んでいる可能性

もある。この点については、佐藤（2000　184-185 頁）を参照のこと。以下にはカイ二乗検定で有意であったクロス表を乗せておく。

	20代	30代	40代	50代	60代	70代
学歴の規定要因　努力	50.0	46.6	38.2	26.3	33.8	27.8*

	中卒	高卒	大卒
学歴の規定要因　努力	34.5	30.5	44.1*
学歴の規定要因　生まれつきの能力	13.8	17.4	28.3*
学歴の規定要因　本人の希望	6.9	6.0	14.2*

	専門・管理	事務・販売	ブルー・農業・その他
学歴の規定要因　生まれつきの能力	34.6	19.4	17.2**
学歴の規定要因　本人の希望	15.0	11.6	1.6*

これらを見ると、学歴が「努力」で決まると思っているのは、20代、大卒、専門・管理職に多いことがわかる。「生まれつきの能力」によって学歴が決まると思っているのは、大卒・専門・管理職に多い。「本人の希望」（≒アスピレーション）によって決まると思っているのは、大卒・専門管理職に多い。しかし周知の通り、クロス表はあくまで2変数間の関係を見ているだけであり、その他に考えられ得る変数の影響を取り除いてはいない。両方の結果を見比べてより適切な「読み」を行う必要がある。この分析結果の場合、強いて指摘すれば、大卒・専門・管理職は、他の人々に比べると、学歴がより多様な要因によって形成されていると見ている、と見なすべきであろう。

(6) ただし回答者の反応を見る限り、「社会的地位」の定義は、調査者が想定した「職業達成」「職業的地位」のような一義的なものとして捉えられていない可能性があるので注意せねばならない。「人望」が1位に挙げられていることや、「性格・人格」や「協調性」なども高い確率で選択されていることから、「社会的地位」を「社会の中で信頼・信用・支持を集めている」と定義した上で、その規定要因となる項目を選んでいることが想像できる。しかし、そのような項目を排除しても、「肩書きとしての学歴」は高い位置にある。

(7) これと似たような傾向は、別の調査（広島大学教育社会学研究室　1998）でも指摘されている。

(8) 実際には測定できず、存在を客観的に確認できないが、敢えてその存在を仮定することにより、複雑で認識が困難な現象を比較的単純に理解することを目的として構成された概念のこと。たとえばそれは「知能」や「学力」などを想像してみるとよい。

(9) 苅谷(1995 147頁)を参照。

(10) 予言の自己成就についてはMerton (1957:邦訳1961 382-399頁) を参照。

(11)竹内 (1995 88-89頁) を参照。

(12) 「公式の解釈図式」「了解」については佐藤 (1993) を参照。

(13) 苅谷剛彦によれば、1970年代後半以降、学歴差別の問題が、「学歴取得競争が引き起こす受験競争の不当性を軸に、教育における能力差別を批判する視点からの学歴差別問題に転化している」(苅谷 1995, 148頁) とし、「現在の学歴主義批判が、かつてのようなリアリティを失っている」としている (苅谷 1995, 152頁)。このことは、学歴を論じる内容が転化しただけで、学歴論議自体はリアリティを失っておらず、依然として「やり玉」にあがっていることを意味しているとも解釈できる。こうした解釈に依拠するならば、本論とも整合的である。

◇参考文献

天野郁夫『学歴主義の社会史 : 丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂高文社, 1991年。

麻生 誠『学歴と生きがい－“学閥”への抵抗と追従』日経新書, 1977年。

原田 彰「「教育意識」研究の動向と課題」『人文学』第128号, 1975年, 57-83頁。

広島大学教育社会学研究室「学歴意識に関する調査研究(1)」広島大学教育社会学研究室編『教育社会学研究室年報』第1号, 1997年, 1-32頁。

今田高俊『社会階層と政治』東京大学出版会, 1989年。

今田高俊「平等社会の神話を越えて」『日本労働研究雑誌』No. 472/October, 1999年, 2-16頁。

今田高俊「社会移動レジームとその融解－戦後日本における産業化の帰結－」今田高俊編『1995年SSM調査シリーズ20 社会階層の新次元を求めて』1995年SSM調査研究会, 1998年, 1-24頁。

Ishida, Hiroshi *Social Mobility in Contemporary Japan: Educational credentials, class and the Labour Market in a Cross-National Perspective*, The Macmillan Press Ltd., 1991.

石田 浩「学歴と社会経済的地位の達成-日米英国際比較研究-」『社会学評論』第40巻, 1989年, 252-266頁。

苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史—』中公新書, 1995年。

Merton, R.K. Social Theory and Social Structure - Toward the Condification of Theory and Research, The Free Press, 1957. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961年。

佐藤俊樹『近代・組織・資本主義—日本と西欧における近代の地平—』ミネルバ書房, 1993年。

佐藤俊樹「被雇用者の職業再生産と階層－階級意識」『日本労働研究雑誌』No. 455/May, 1998年, 40-49頁。
佐藤俊樹「統計の実践的意味を考える—計量分析のエスノメソッド—」佐伯胖・松原望編『実践としての統計学』東京大学出版会, 2000年, 179-214頁。
新堀通也『学歴－実力主義を阻むもの』ダイヤモンド社, 1966年。
新堀通也編『学歴意識に関する調査研究』広島大学, 1967年。
新堀通也編著『学閥 —— この日本的なもの』福村出版, 1969年。
トロウ, マーチン（天野郁夫, 喜多村和之訳）『高学歴社会の大学 ： エリートからマスへ』東京大学出版会, 1976年。
竹内　洋『日本のメリトクラシー－構造と心性』東京大学出版会, 1995年。
安田三郎『社会移動の研究』東京大学出版会, 1971年。

第３章　学校化社会における大学卒業者に対するイメージ

西本　裕輝

1. はじめに

今日、日本は「学歴社会」であると言われ、それが通説となり、人々に強く意識されている。社会学においては通常、学歴社会とは「成員の社会的地位を決定する学歴の力が相対的に大きい社会」（麻生 1991, 27 頁）と定義される。そして、「日本は学歴社会だから偏差値教育による序列化がなされ、それが様々な教育問題を引き起こしている」といった類の認識枠組みを与えている。このように常識の世界においては、今日の日本は学歴社会であり、しかも日本だけがそうであるといった認識がはびこっていると言ってよい。そして最近ではこうした学歴社会批判から、「生涯学習社会」への移行も叫ばれている。

確かに、社会学においても、当初は「学歴社会は日本特有のものである」という見方が一般的であった（例えば、麻生 1977, 新堀 1966; 1969; 1967, 尾形 1976)。ところが近年、特に日本だけが学歴社会であるというわけではないと指摘する研究がいくつかある（天野 1977, 石田 1989, Ishida 1993, 小池・渡辺 1979)。そのことを最初に指摘したのは天野（1977）であったが、最近では石田（1989）による研究が代表的であろう。

石田は、日米英で、比較可能なデータを用いて、学歴と社会的地位との関係の国際比較を行っている。それによると、第一に、学歴が出身背景に比べて相対的重要性が高まってきているのは、日米英、すべての国において見られる傾向であるということが明らかになっている。また、そうした傾向はアメリカにおいてもっとも顕著に見られ、日本はイギリスよりも学歴の相対的重要性が低いと指摘されている。すなわち、日本だけが、学歴社会 ── 社会的地位を決定する学歴の力が相対的に大きい社会 ── であるとは必ずしも言えず、しかも他国に比べれば、そうした傾向は比較的弱いということである。

また小池・渡辺（1979）も、学歴による格差が日本ではそれほど大きくなく、少なくとも欧米と比べて特に大きいものではないことから、「学歴社会の虚像」を主張している。

さらに苅谷（1995）は、日本は「学歴社会」であるという学歴社会論は現代の神話であり、むしろ「大衆教育社会」ととらえるべきであるという立場をとっている。苅谷の言う「大衆教育社会」とは、「教育が量的に拡大し、多くの人々が長期間にわたって教育を受けることを引き受け、またそう望んでいる社会」（苅谷 1995, 12 頁）のことである。

以上のように、近年の研究では、日本だけが学歴社会であるというとらえ方はもちろん

のこと、日本が学歴社会であるということすら確証を持って呼ぶ傾向にはなく、むしろそれは幻想であるというとらえ方が一般的になりつつあるように思われる。

ただし、原・盛山（1999）のように、日本は学歴社会であり、しかもその傾向はますます強まっていることを指摘する研究も最近なされており、まだまだ結論の出ないところのようである。そこでここでは新たに、日本は「学校化社会」である、というとらえ方を採用したい。

ここで「学校化社会」論を採用するのは、「学歴社会」という言い回し自体に、常に通俗的な思い込みが含意されてきたこと、「学歴社会」論には上記に示したように議論の拡散があるためである。そこで「学歴社会」に代わる概念として、あるいは、学歴社会よりも適切な表現として「学校化社会」を採用したい。

「学校化」（schooling）という概念を最初に提起したのはイリイチ（Illich, I.D. 1970）である。イリイチの著書『脱学校の社会』では、「学校化された社会」（schooled society）が「脱学校社会」（deschooled society）の対概念として用いられている。イリイチの言う学校化された社会とは、端的に言えば、学校的価値が教室を越えて社会全般に広がり、人々の意識を覆うようになった社会のことである。

我が国においても、イリイチの言う学校化に基づいた研究は哲学や社会学の分野において数多く見受けられるが（例えば、岩見 1985, 木田 1990, 岡村 1989, 豊泉 1998）、それをもっともよく具現化して数々の教育問題を論じているのが社会学者、宮台真司であろう。宮台（1997a·1997b）の言う学校化とは、イリイチのものとほぼ同義であるが、評価者である社会（大人）と評価対象である子ども（小・中・高校生）の心理的側面により焦点化したものとなっていると言ってよい。すなわち、学校化とは、学校における評価原則が家庭や地域にも広がるという評価原則の均質化により、子どもが常に一元的な評価にされされる状態のことである。

より具体的に説明してみたい。学校化とは別の表現を用いれば、地域や家庭が学校の出店機関に成り下がっている状態である。かつて子どもが生活する空間は三つあった。それが学校、家庭、地域である。一昔前までは、それら三つはそれぞれに評価原則を持っていた。そのため、たとえ学校で勉強ができなくても、家庭や地域には活躍の場が残されていた。例えば、現在ではすでに消滅したと言われるガキ大将がアニメ『ドラえもん』にジャイアンとして描かれている。ジャイアンは決して学校では優等生ではない。家庭においてもいつも母親に叱られてばかりいる。しかし、地域では生き生きと活躍している。「学校終わればまかせとけ」という一節が彼のテーマソングに登場するが、その表現はまさに学校とは別の評価基準の存在を明確に示していると言えよう。また、映画に登場する寅さんも、学歴はなくても地域の人気者であった。家庭においても、学校で勉強ができない子どもであっても、子守をしたり、花嫁修業をしたり、家業を継いだりすることによって名誉挽回ができた。学校での劣等生が家庭や地域の劣等生とは限らず、多様なパターンの人間が存

在できた。これがおよそ30年前までの日本の姿であった。

表1）過去と現在の子どもの評価軸比較

	過去の評価軸							現在の評価軸	
学校	○	×	×	×	○	○	学校	○	×
家庭	×	○	×	○	×	○	家庭	○	×
地域	×	×	○	○	○	×	地域	○	×

ところが現在では、子どもの評価基準はきわめて一元的であり、かつそれは学校的なものとなっている。そのことにより、学校での優等生は家庭でも地域でも優等生、学校での劣等生は家庭でも地域でも劣等生という事態が生ずる。礼儀作法が身についていなくても、成績さえよければ安心する母親などはまさに典型的な例である。それぞれのパターンを模式的に表すと表1のようになるだろう。

どこへ行っても同じ評価基準が作動する。そうした状況は特に中学生や高校生にとっては息苦しさを感じるものである。優等生よりも劣等生の方がその度合いは大きいだろうが、優等生と言えども、やはり息苦しさは感じるだろう。そうした三つの空間のいずれにおいてもストレスを感じる子どもは、優等生／劣等生に限らず、学校でも家庭でも地域でもない第四の空間である「郊外」で浮遊し、様々な教育問題を引き起こすというのが宮台の主張であり、その主張の元凶に「学校化」がキーワードとしてあげられるのである。

このように学校化は、現代の日本をとらえるのに有効な用語であるように思われる。実際、岡村（1989）は、学歴社会は学校化社会の一つの特殊な形態にすぎないと指摘している。つまり、学校化社会の下位概念として学歴社会をとらえているのである。ここで学校化社会というとらえ方を採用するのも、学歴社会であるか否かにかかわらず、日本が学校化社会であることはほぼ了解が得られるであろうという考えからである。

ちなみに岡村は、学校化の意識レベルだけでなく、制度レベルにも注目し、「学校化社会は、学校よりも力をもつ他の諸制度が産出する価値を制度化するために、学校が最大のインフラストラクチュアであるような社会」（岡村 1989, 19頁）であると定義している。

以上のように学校化は、現在の日本において、人々の意識に深く浸透しているものと考えられるが、それだけにまた、さまざまな弊害ももたらしているように思われる。例えば、人々が一元的な評価をすることにより、学歴の高い人に対して能力だけでなく人柄にまで高い評価を与えるなどである。こうした学校化された社会において、人々がどの程度学校化を意識し、またその意識がどのように学歴と結びついているかを、調査によって得られたデータの分析に基づき、実証的に明らかにすることが、本論文の課題である。現在のところ、本格的に学校化について実証的なデータを用いて検討した研究は見あたらない。

ここで検討したい仮説を示すと以下ようになる。すなわち、仮説①「学歴の高い者ほど

学校化を強く意識している」、仮説②「学校化を強く意識している者ほど、大卒者に対するイメージがよい」、仮説③「年齢が若くなるほど学校化を強く意識している」の三つである。

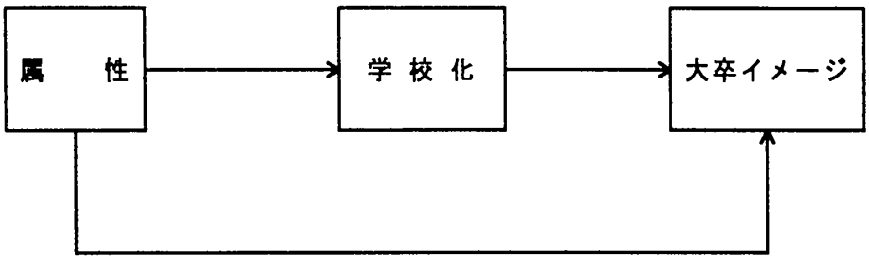
仮説①は、高い学歴を取得している者の方が、これまでの経験から学校的価値を正当化し内面化しやすく、ゆえに学校化も強く意識しやすいのではないかという予測に基づいている。仮説②で言う「大卒者に対するイメージ」とは、主に人格や能力についての評価のことである。具体的質問項目は後に示すが、例えば、「協調性がある」「考え方に柔軟性がある」「教養を身につけている」「専門的知識・技術がある」といった項目について、大卒者にどの程度あてはまるかを問うものである。そして学校化を強く意識している者の方が、一元的に人物を評価する傾向が強く、大卒者の能力ばかりか人格までも高く評価する傾向があるのではないかという予測に基づいている。仮説③は、学校化傾向は昔よりも現在の方がより強まっているのではないか、つまり年齢が若い者の方がより強く学校化を意識しているのではないかという予測に基づいている。宮台も、一昔前までは多元的な評価がなされていたと指摘している。

本研究で用いるデータは、文部省の助成を受けて実施された広島県内の成人を対象とした「学歴と生活に関する意識調査」と称した調査で得られたものである。調査は、親の学歴・職業、本人の学歴・職業・収入、家庭の文化、パーソナリティ等、学歴に関する多岐の項目からなっている。分析では回答のあった694名のデータを用いる。

2. 分析枠組

ここでの分析枠組みを示すと図１のようになる。性、年齢、父親の学歴といった属性が、本人の学校化を意識する程度にどの程度影響を与え、またそれを経由することにより、結果的に大卒者のイメージにどの程度結びついているかを検討しようとするモデルである。ここでは主として重回帰分析を中心に、分析を進めていく。

図１　分析モデル



3. データの概要と分析に用いる変数

重回帰分析といった具体的分析に入る前に、ここではまず、データの概要と具体的な分析に用いる変数についてふれておきたい。

先にもふれたが、本研究で用いるデータは、文部省の助成を受けて実施された広島県内の成人を対象とした「学歴と生活に関する意識調査」と称した調査で得られたものである。調査は、親の学歴・職業、本人の学歴・職業・収入、家庭の文化、パーソナリティ等、学歴に関する多岐の項目からなっている。分析では回答のあった694名のデータを用いる。

ここでは先ほど挙げた分析モデルにしたがって、「属性」に関する項目（性別、年齢、父親の学歴・職業、本人の学歴・職業）、「学校化」に関する項目、「大卒イメージ」に関する項目を分析に用いることにする。以下、それぞれの変数について順にふれたい。

（1） 属性

属性に関する変数は計６つ用いた。

①性別（男性）

「性別」については、男子＝１、女子＝０のダミー変数を与えている。

②年齢

「年齢」については回答者の年齢をそのまま数値として用いた。

③父学歴

質問では１２の項目を用いて学歴をとらえている。それら１２項目に教育水準に応じて数値を与えたものを分析には用いる。具体的には、旧制尋常小学校・旧制高等小学校・新制中学校＝１、旧制中学校・高等女学校、実業学校・新制高校＝２、師範学校・新制短大・高専＝３、旧制高校・専門学校・高等師範学校・新制大学＝４、旧制大学・新制大学院＝５という数値を与えている。

④父職業（威信スコア）

質問では「農耕・林業・漁業作業」「販売的職業」「サービス業」「専門的な職業」「管理的な職業」「事務的な職業」などの１６項目から父親の職業を選択させているが、ここではそれらに職業別の得点を与えた。威信の高い職業には高い得点を、低い職業には低い得点を与える職業威信スコアが社会学ではよく用いられる。ここではＳＳＭの職業威信スコア（直井・盛山　1990）を用いた。

⑤本人学歴

③の父学歴と質問項目が同様であるので、ここでは詳細な説明は省略する。

⑥本人職業（威信スコア）

④の父職業と質問項目が同様であるので、省略する。

（2）学校化

ここでは学校化の尺度を作成する。項目は次に示す因子分析結果（表２）に示すが、学校化を「家庭や地域が学校の出店機関になり下がっていること」であり、さらに「評価・判断の基準が学校を基準に一元化されていること」とらえ、項目を設定した。本来であれば「学校で成績の悪い子は家庭でも悪い子であると評価される」といったように、学校化についてより直接的に問う形式で項目を作成するということも可能であったが、今回は、その方法を採ると誘導になりかねないという懸念から、ある程度距離を置いた問い方を試みた。そのように作成した７項目を因子分析した結果が表２である。

表2）学校化の因子分析（バリマックス回転）

	因子1 学校化1	因子2 学校化2
テレビ・雑誌などの教育関連の話題が気になる	0.535	0.210
家族・親戚に高学歴の人が多い	0.474	0.285
子どもの進学のことが近所でよく話題になる	0.464	0.032
となり近所に高学歴の人がいる	0.463	0.279
近所に有名進学校・有名大学などがる	0.325	0.205
職業柄高学歴の人を相手にする機会がある	0.143	0.683
自分の職場に高学歴の人が多い	0.245	0.563
固有値	2.445	1.026
回転後の負荷量平方和（%）	16.101	14.71
回転後の負荷量平方和（累積%）	16.101	30.812

注）因子負荷量は、絶対値が .300以上のものを採用した。

表から明らかなように、分析では二つの因子が抽出された。解釈によっては、因子１を「生活における学校化」、因子２を「職場における学校化」といった命名の仕方もできるだろうが、因子２に属している項目が２項目のみであったため、細かい命名はしなかった。分析では因子１の因子得点を「学校化」尺度として用いることにする。そして、言うまでもないことであるかもしれないが、因子得点が高くなるほど学校化を意識する程度も強くなると考えられる。

（３）大卒イメージ

ここでは、大学卒業者に対するイメージを表に示す 17 項目により測定した。項目は、知識や技能、人格などを問うものからなっている。それらの項目を因子分析によって構造を明らかにしたものが次の表３である。

因子１は、「協調性がある」「考え方に柔軟性がある」「臨機応変に対応できる」など、主として柔軟性に富んだ人柄や行動力に関する項目からなっている。そこでこれを「柔軟

な行動力」と命名した。

因子２は、「教養を身につけている」「専門的知識・技術がある」「独創力がある」「努力家である」といった、主として知識・教養・技能や、それに対して真面目に取り組む行動特性を示す項目からなっている。そこでこれを「知識・教養」と命名した。

分析ではこれら二つの変数を従属変数として用いる。

表3）大卒イメージの因子分析（バリマックス回転）

	因子1 柔軟な行動力	因子2 知識・教養
協調性がある	0.733	0.127
考え方に柔軟性がある	0.634	0.289
向上心がある	0.591	0.453
責任感がある	0.590	0.527
臨機応変に対応できる	0.579	0.490
意欲的に働いている	0.544	0.419
人をまとめる力がある	0.544	0.504
常識がある	0.540	0.404
教養を身につけている	0.273	0.623
専門的知識・技術がある	0.105	0.603
独創力がある	0.385	0.568
努力家である	0.464	0.559
指導力がある	0.493	0.541
物事に対して積極的である	0.531	0.461
のみこみが早い	0.434	0.424
事務処理能力に優れている	0.427	0.419
社交性がある	0.470	0.197
固有値	8.120	1.064
回転後の負荷量平方和（%）	26.003	21.770
回転後の負荷量平方和（累積%）	26.003	47.773

注）因子負荷量は、絶対値が .540以上のものを採用した。

4. 学校化の程度と大卒者に対するイメージ

それでは次に、以上の変数を用いて、学校化と学歴がどのように関わっているかを、重回帰分析及びパス解析により明らかにしたい。重回帰分析の結果を示したものが次の表４、５である。

表４では、大卒イメージ「柔軟な行動力」を従属変数として重回帰分析を行った結果である。分析では、本人の学歴、学校化の程度が有意な影響を与えている。よって、学歴が高いほど、また学校化を強く意識しているほど、大卒者に対するイメージがよいと解釈できる。

また表５は、大卒イメージ「知識・教養」について、同様の手続きで重回帰分析を行った結果である。ここでは、先ほどと同じく、本人の学歴、学校化の程度が有意な影響を与えている。同じように、学歴が高いほど、また学校化を強く意識しているほど、大卒者に対するイメージがよいと解釈できる。

表4)大卒イメージの規定要因分析(「柔軟な行動力」)

従属変数:「柔軟な行動力」	標準化係数	確率
独立変数	β	
男性	-0.008	
年齢	0.066	
父学歴	-0.025	
父職業	0.028	
本人学歴	0.120	**
本人職業	0.009	
学校化	0.074	*
** p<.01, * p<.05	R= .145*	

表5)大卒イメージの規定要因分析(「知識・教養」)

従属変数:「知識・教養」	標準化係数	確率
独立変数	β	
男性	-0.089	*
年齢	0.139	**
父学歴	-0.057	
父職業	0.040	
本人学歴	0.087	*
本人職業	-0.023	
学校化	0.169	**
** p<.01, * p<.05	R= .264**	

表6)学校化の規定要因分析

従属変数:「学校化」	標準化係数	確率
独立変数	β	
男性	-0.154	**
年齢	0.297	**
父学歴	0.042	
父職業	0.006	
本人学歴	0.129	**
本人職業	0.006	
** p<.01, * p<.05	R= .292**	

ただし、その他の変数である、性（男性）、年齢も有意な影響を与えている。女性の方が男性よりも、年齢が上の者ほど、大卒者に対するイメージがよいと解釈できる。

次に、以上の分析でも取りあげている「学校化」という変数に対して、どのような要因

が影響しているのかを確認したい。表６は「学校化」を従属変数として重回帰分析を行った結果である。

表から明らかなように、性（男性）、年齢、本人の学歴がそれぞれ有意な影響を与えている。男性よりも女性の方が、年齢が上になればなるほど、学歴が高くなればなるほど、学校化を強く意識するという傾向がうかがえる。

以上の分析結果をふまえて考察を行う際の補足資料を得るため、試行的に上記の変数を用いてパス解析を行った結果を示したのが、次の表７である。

表7）大卒イメージの規定要因（パス解析）

	本人学歴 R= .509**	本人職業 R= .299**	「学校化」 R= .292**	「柔軟な行動力」 R= .145*	「知識・教養」 R= .264**
男性	0.145 **	0.040	−0.154 **	−0.008	−0.089 *
年齢	−0.410 **	0.106 *	0.297 **	0.066	0.139 **
父学歴	0.133 **	−0.076	0.042	−0.025	−0.057
父職業	0.104 **	0.088 *	0.006	0.028	0.040
本人学歴		0.305 **	0.129 **	0.120 **	0.087 *
本人職業			0.006	0.009	−0.023
学校化				0.074 *	0.169 **

** p<.01, * p<.05

表７で得られた結果も含めて解釈したうえ、次の考察に移りたい。

5. 考察

最初に述べたように、ここでの目的は、三つの仮説を検討することであった。まず仮説①「学歴の高い者ほど学校化を強く意識している」から順に考察を加えたい。

仮説①に関しては、ほぼ支持されていると言ってもよいであろう。特に表６からその傾向はうかがえる。本人の学歴が「学校化」に対して、プラスの効果が見出される（0.129**）からである。やはり、学歴の高い者の方が学校的価値を正当化しやすく、学校化をより強く意識するようになるためであると考えられる。

次に仮説②「学校化を強く意識している者ほど、大卒者に対するイメージがよい」であるが、これも支持されるだろう。例えば、表４、表５では、大卒イメージ「柔軟な行動力」に対して「学校化」から有意な影響が見受けられ（0.074*）、「知識・教養」に対しても同様に有意な影響が見られる（0.169**）。学校化を強く意識している者の方が、評価も一元的になりやすく、学歴の高い者を、能力だけでなく人柄をも含めて高く評価する傾向にあるように思われる。

最後に仮説③「年齢が若くなるほど学校化を強く意識している」であるが、これは支持

されなかった。予想では、年々学校化は質的にも量的にも広がりを見せており、高い年齢層では学校化の程度はそれほどでもなく、むしろ若年層で強い傾向が見られると思われた。ところが、分析結果からはむしろ逆で、年齢が高くなるほど学校化の程度は強くなっている傾向が見受けられる（表６、表７）。これは宮台の指摘とは異なり、学校的価値が異常に高い状態というのは最近に始まったことではなく、むしろ一昔前の方がそうした傾向は強く、最近では弱まりつつあるのではないかということを示唆する結果であると言える。

ただし、仮説の設定枠組み自体を見直す必要があるかもしれない。あらためて表６、７を見ると、男性よりも女性の方が学校化を意識する程度が強いという結果が出ている。このことから推測されることは「子育て」との関係ではないだろうか。「教育ママ」という言葉があるように、男性に比べ、女性の方が一般的に子どもの教育に関しては熱心である。そうしたことをふまえて、あらためて、年齢が高くなるほど学校化を意識する程度が強くなるという、表６、７の結果を考えると、子どもの有無による差である可能性もある。

ここで新たに考えられる仮説の枠組みは次の通りである。すなわち、中学校や高校時代に学校化にさらされていた者でも、高校を卒業して進学や就職をしてそこを通過してしまえば、いったんそのような価値は忘れ去ってしまう。しかし子どもを持つことをきっかけとして、進学問題などを考えるにつき、再び学校的価値を思い出し、受け入れるようになる。そしてその傾向は特に女性の方が強い。もちろん男性の場合でも、子どもを持っている場合とそうでない場合では、子どもを持っている者の方がそうした傾向は強い。このように、いったん冷却された学校化意識が子育てを機にいわば再加熱することが、そうした結果、すなわち「年齢が高くなればなるほど、男性よりも女性の方が学校化を意識する」ということに結びついていると考えられるのである。このように考えると、今回得られた結果は、必ずしも宮台の指摘と矛盾するものではないとも言える。

ただ今回の結果からはそこまで確認することができない。ここでの調査対象者の年齢構成が、20歳以上の成人で、そのうちわけが20～35歳23.2%、36～50歳26.8%、51～65歳33.9%、66歳以上16.2%となっていることからある程度は推察できるが、子どもの有無などとも絡めて、さらなる詳細な分析が必要となるだろう。

測定項目自体に問題がある可能性もある。誘導になるので今回は学校化を問うのに直接的な表現は避けたが、やはり「学校で成績の悪い子は家庭でも悪い子であると評価される」といったような項目により、学校化を測った方がよりクリアーな結果が導き出せたのかもしれない。さらに測度の開発を検討する必要があるだろう。

いずれにしても、今後、学校化についてのさらなる研究が求められるであろう。そのためにも、実証的データを積み重ねていく必要があろう。

◇参考文献

天野郁夫「学歴社会の病理」麻生誠・潮木守一編『学歴効用論』有斐閣, 153-176頁, 1977

年。
麻生誠『日本の学歴エリート』玉川大学出版部, 1991 年。
原純輔・盛山和夫『階層社会——豊かさの中の不平等——』東京大学出版会, 1999 年。
イリイチ著, 東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』東京創元社, 1977 年。 Illich, I.D., *Deschooling Society*, Harper & Row, 1970.
Ishida, H. , *Social mobility in contemporary Japan*, Macmillan, 1993.
石田浩「学歴と社会経済的地位の達成——日米英国際比較研究——」『社会学評論』第159巻, 252-266頁, 1989年。
岩見和彦「学校化社会と都市文化——『生徒化』からの離脱——」都市問題研究会『都市問題研究』37 巻 2 号, ,72-83 頁, 1985 年。
苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』中公親書, 1995 年。
木田邦治「イリイチにおける<学校化>と権力」三田哲学会編『哲学』第 90 集, 1990 年, 141-164 頁。
小池和男・渡辺行郎『学歴社会の虚像』東洋経済新報社, 1979 年。
宮台真司 『まぼろしの郊外』朝日新聞社, 1997a年。
宮台真司 『透明な存在の不透明な悪意』春秋社, 1997b年。
尾形憲『学歴信仰社会 — 大学に明日はあるのか』時事通信社, 1976年。
岡村遼司「学校化社会批判の視点（一） — 産業経済制度と教育 — 」『早稲田大学教育学部学術研究（教育・社会教育・教育心理・体育学編)』第 38 号, ,19-29 頁, 1989 年。
新堀通也編著『学歴 — 実力主義を阻むもの』ダイヤモンド社, 1966 年。
新堀通也編著『学閥 — この日本的なもの』福村出版, 1969 年。
新堀通也編『学歴意識に関する調査研究』広島大学, 1967 年。
豊泉周治「学校化と否定された自己の病理」『群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編)』第 47 巻, 393-410 頁, 1998 年。

第４章　学歴とパーソナリティの関連性に関する研究

西本　裕輝

1. はじめに

本研究の目的は、学歴とパーソナリティの関連性を明らかにすることである。本人あるいは親の学歴によって、パーソナリティにどのような相違が生じるのか、調査によって得られたデータにより実証的に明らかにする。

周知のことではあるが、外国語からの翻訳が多い社会科学用語の中で、「学歴」は例外的に和製の専門用語である。現在では学歴に educational credential あるいは educational career、学歴主義に credentialism あるいは degreeocracy という訳語があてられているが、それも 1970 年代に入ってからのことである。したがって、学歴とパーソナリティの関連について明らかにした研究は海外にはほとんど存在しないと言ってよい。

また、我が国においても、それらの関連性について扱った研究は意外に少ない。したがって、ここではまず、もう少し解釈を広げて、学歴とその学歴を取得した、あるいは取得しようとする個人の心理的側面との関連に焦点を当てた研究について、我が国のものを中心に、社会学的研究のみならず、心理学的な研究をも含めて概観したい。①学歴とアイデンティティに関する研究、②学歴と階層帰属意識に関する研究、③学歴と自尊感情に関する研究である。

学歴とアイデンティティに関する研究は、学歴を取得することが、それを取得した個人のアイデンティティ形成に影響を与えるということを明らかにするものである（例えば、石川 1992, 黄 1994; 1998, 石戸 1995)。黄（1994）は、これまでの研究が、学歴獲得者に心理的、文化的に作用する学歴の「目的的・結果的」機能が見落とされているとして、同窓会の分析を通して、学歴が同一の学歴取得者の間でどのような機能を果たしているのかを考察している。黄は次のように述べている。

「日本において学歴は、その獲得者にとって心理的避難所という、消極的意味だけをもつものではない。むしろそれは学歴獲得後の生活において同一の学歴獲得者の間で社会的交際を深め心理的に強い連帯感、結束を維持する一方、他の学歴獲得者との差異を認知し、また認知されることによって、自分が誰であるのかの自己定義と自己確信の原点及び現在地でもあるという積極的な意味をもっている」（黄 1994; 27 頁)。

すなわち、学歴を獲得したという事実自体が、その獲得者にアイデンティティの準拠枠を与えているという指摘である。また黄は、こうした同一の学歴獲得者の間で有する連帯感、結束の特性は学歴の日本的構造に由来すると述べている。

学歴と階層帰属意識に関する研究では、主に夫側の学歴が、自分がどの階層に位置付いているかの意識を規定しているか否かに注目した研究である。一般に、学歴が高いほど階層も高く意識され、低いほど階層も低く意識される傾向にある。そして学歴と階層帰属意識との関連性は、近年強まってきているという報告もある（吉川 1998a)。ただし、我が国には、「一億総中流意識」というものが存在し、日常生活においては特に階層を意識するような場面が少ないため、とりわけ最近の研究においては、学歴によってはっきりとした意識の差が生じているとは言いにくく、調査結果がいつも安定しているとは言い難い。実際、三隅(1990)のように、階層帰属意識には分析価値が消失したとまで指摘する研究もある。階層帰属意識については、ＳＳＭの調査項目で毎回測定されていることもあって、主にその調査に従事している研究者による報告が多い。こうした研究には、三隅（1986;1990)、直井（1990)、間々田（1990)、高坂・宮野（1990)、小林（1995)、木村（1998)、青木（1998)、吉川（1998a;1998b)、数土（1998)、原・盛山（1999）などが挙げられよう。

学歴と自尊感情に関する研究では、学業達成することにより高い学歴を有することで、自己に対する評価を高めるということが明らかになっている。こうした研究には、バックマンとオマリー (Backman, J.G. & O'Malley, P.M. 1977; 1986)、マルヤマら (Maruyama, G., *et al.* 1981)、柏木（1983)、井上（1986）のものが挙げられる。もっとも、こうした研究は、学歴取得そのものよりも、どちらかと言えば学業達成の方に注目する傾向が強いので、学歴自体はこうした研究に従事する研究者たちの関心事からは、はずれている可能性もある。なお、自尊感情（self-esteem）とは、「個人の自己の価値についての知覚」と定義される。そして一般に、「自尊感情が高い」とは、自己に対して肯定的な評価を与えているということを、逆に「自尊感情が低い」とは、否定的な評価を与えていることを意味する。

以上のように、様々な立場からの研究を概観してきたが、学歴を取得した、あるいは取得しようとする個人に、何らかの心理的影響を与えているということは共通しているように思われる。しかしながら、そうした問題をパーソナリティに関連づけてより直接的に扱った研究は少なく、さらにその中で実証的なデータに基づいた指摘というものはきわめて少ない。よってここでは、パーソナリティと学歴との関係を実証的に明らかにしたい。

ここではパーソナリティ測定項目を作成する際、心理学におけるＬＯＣ（Locus of Control）を参考とした。ＬＯＣはロター (Rotter, J.B. 1966) のものが代表的であり、「統制感」と訳さる。我が国においてもいくつかの研究が見受けられる（神田 1993, 杉山 1994, 杉山・神田 1996)。統制感の概念においては、個人の統制に関する一般化された期待が、内的統制と外的統制という両極を持つ一次元的な連続体としてとらえられる。内的統制への期待とは、「自分自身の行動がある成果をもたらすという期待」（杉山 1994, 415 頁）を

指し、外的統制への期待とは、「自分の行動以外の外的な力が結果の生起を左右するという期待」（杉山 1994, 415 頁）を指す。つまり、内的統制は、例えば「努力」のように、自分自身の力で何とかなるものであり、外的統制は、例えば「運」のように、自分の力ではコントロール不能なものを指す。

ここでＬＯＣ尺度を用いるのは、今日、日本は学歴社会であるという言説の延長線上に、日本はメリトクラシーの社会であるという言説があるからであり、そうした状況下で個人が影響を受けうるパーソナリティ項目をもっとも顕著に、かつ対応した形で表していると思われるからである。

これもまた周知のことではあるが、メリトクラシーとは、社会学の用語で「業績主義」のことであり、メリトクラシーの社会とは、どのような家庭に生まれるかよりも、個人の「メリット（能力＋努力）」によって成功の機会が与えられる社会のことである。したがって、ある地位が世襲によって相続されたりするような、いわゆる封建社会や階級社会とは根本的に異なる。日本はメリトクラシーの社会を目指し、教育の機会を均等にするため、学校を増やし、教育を広く行きわたらせることによってそうした社会を実現し、学校教育はそれに大きく貢献してきたかに見えた。

しかしながら、もしメリトクラシーの社会が実現されているのであれば、例えば未だに我が国において同和地区の子どもの学力が地区外の子どもに比べて低いのはなぜだろうか。沖縄の子どもの学力が県外に比べて低いのはなぜだろうか。我が国とほぼ同様の教育システムを持つアメリカにおいて白人よりも黒人の学力が低いのはなぜか。イギリスやフランスにおいて中産階級の子どもよりも労働者階級の子どもの学力が低いのはなぜか。能力が低いのか、努力が足りないのか。答えは否である。ここにメリトクラシー的視点の限界が浮き彫りになるのである。

したがって、現代の日本社会をメリトクラシーの視点だけで論じるのには限界があり、むしろ人々がメリトクラシーという幻想・神話に踊らされている状態であると言う方が、社会学的には一般的になりつつある（例えば、苅谷 1995, 竹内 1995）。こうした神話の背景には、明治以降から昭和初期にかけての、教育による上昇移動が顕著にみられた時代の残照等があると思われるが、ここでは論点がずれるのでこれ以上ふれない。

いずれにしても、人々の意識レベルにおいては、メリトクラシーが存在しているということは事実であろう。筆者は、ＬＯＣによって「能力」の部分が「外的統制」に、「努力」の部分が「内的統制」にそれぞれ相当すると考えている。つまり、統制感尺度によって個人がそのメリット（能力＋努力）を認識している程度が測られるのではないかと考えているのである。本研究でパーソナリティ尺度にＬＯＣを用いる所以である。

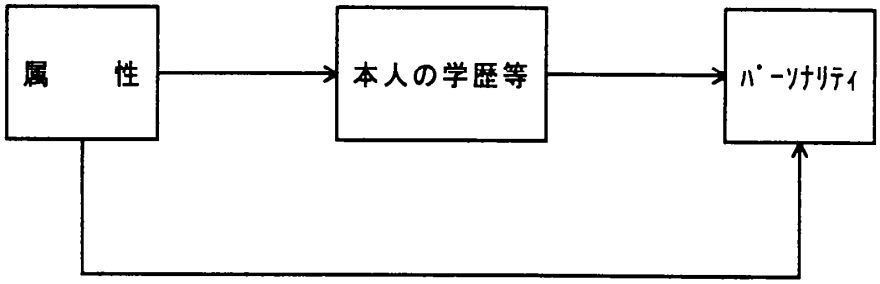
したがって、本研究の仮説としては、親の学歴や本人の学歴が高ければ高いほど、努力志向的なパーソナリティが形成される（内的統制感が高まる）というものである。すなわち、学歴獲得前であれば、高学歴な親を持つほど「今努力しておけば後が楽になる」とい

う価値を持ちやすく、また、学歴獲得後であれば、成功者ほど、これまでの自己の行動を正当化し、「努力は報われる」といったような価値にとらわれやすくなる。現代の学歴社会ないしはメリトクラシー社会という状況下では、高学歴の親を持つ者ほど、また高い学歴を獲得した者ほど、そうした価値に裏付けされたパーソナリティを形成しやすくなるのではないか。データに基づき明らかにしたい。

2. 分析枠組

ここでの分析の視点としては、次の二つのモデルを想定している。すなわち、①属性が直接パーソナリティに影響を与えるとする「属性→パーソナリティ」というモデル、②属性の影響が本人の学歴等を介してパーソナリティに影響するとする「属性→本人の学歴等→パーソナリティ」というモデルである。①と②を総合すると、ここでの分析モデルは図1のようになるだろう。ここでは、こうした因果モデルを採用する。

図1　分析モデル



3. データの概要と分析に用いる変数

重回帰分析、パス解析といった詳細な分析に入る前に、ここではまず、データの概要と具体的な分析に用いる変数についてふれておきたい。

本研究で用いるデータは、文部省の助成を受けて実施された広島県内の成人を対象とした「学歴と生活に関する意識調査」と称した調査で得られたものである。調査は、親の学歴・職業、本人の学歴・職業・収入、家庭の文化、パーソナリティ等、学歴に関する多岐の項目からなっている。分析では回答のあった694名のデータを用いる。

ここでは上の分析モデルにしたがって、「属性」に関する項目（性別、年齢、父親の学歴・職業、家庭の文化）、「本人の学歴等」に関する項目（本人の学歴・職業・収入、生活満足度）、「パーソナリティ」に関する項目を分析に用いることにする。以下、それぞれの変数について順にふれたい。

（1）　属性

属性に関する変数は計５つ用いた。

①性別

「性別」については、男子＝１、女子＝０のダミー変数を与えている。

②年齢

「年齢」については回答者の年齢をそのまま数値として用いた。

③父学歴（教育年数）

質問では１２の項目を用いて学歴をとらえている。それら１２項目に教育年数を数値として与えたものを分析には用いる。具体的には、旧制尋常小学校＝６、旧制高等小学校＝９、旧制中学校・高等女学校、実業学校＝１２、師範学校＝１３、旧制高校・専門学校・高等師範学校＝１４、旧制大学＝１７、新制中学校＝９、新制高校＝１２、新制短大・高専＝１４、新制大学＝１６、新制大学院＝１８である。

④父職業（威信スコア）

質問では「農耕・林業・漁業作業」「販売的職業」「サービス業」「専門的な職業」「管理的な職業」「事務的な職業」などの１６項目から父親の職業を選択させているが、ここではそれらに職業別の得点を与えた。威信の高い職業には高い得点を、低い職業には低い得点を与える職業威信スコアが社会学ではよく用いられる。ここではＳＳＭの職業威信スコア（直井・盛山　1990）を用いた。

⑤家庭の文化

ここでは詳細な分析の前段階として、家庭環境の一つの変数として「家庭の文化」を加えるべく、因子分析を行い因子を抽出した。家庭の文化の測定項目は、社会学で再生産研究として知られるものを参照して設定した（例えば、Ishida　1993, 片岡　1998, 宮島・藤田　1991)。なお、ここで家庭の文化に注目するのは、それが最近の社会学、特に文化的再生産論に依拠する研究において、家庭環境をとらえるうえでの重要なキーワードとなっているからである。実際に因子分析を行った結果が表１である。

ちなみに、数々の文化的再生産論に依拠した研究では、家庭の持つ文化を測定する際、具体的には「美術館に行く」「博物館に行く」「クラシックのコンサートに行く」などの項目をよく用いる。こうした項目からなる文化を「正統文化」と呼び、文化的に高度であるとされている。一方、「スポーツ新聞を読む」「ドライブをする」などの項目からなる文化は「大衆文化」と呼ばれる。ここではそうしたことをふまえて、因子を命名した。

因子１は、「美術館や美術の展覧会、博物館へ行く」「芸術や歴史に関する本を読む」「クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く」などの項目からなっている。そこでこの因子を「正統文化志向」と名付けた。

一方、因子２は、「スポーツ新聞や女性週刊誌を読む」「芸能雑誌や写真雑誌を読む」「家でビデオ鑑賞をする」といった項目からなっていた。そこでこれを「大衆文化志向」と名

付けた。

なお、後ほどの重回帰分析では「正統文化志向」を用いることにする。

表1）家庭の文化の因子分析（バリマックス回転）

	因子1 正統文化志向	因子2 大衆文化志向
美術館や美術の展覧会、博物館へ行く	0.652	−0.037
芸術や歴史に関する本を読む	0.503	0.055
クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く	0.476	0.038
フランス料理の店で食事をする	0.447	0.095
演劇を見に行く	0.447	0.064
手芸や木工・模型作りなどをする	0.361	0.074
スポーツ新聞や女性週刊誌を読む	0.096	0.660
芸能雑誌や写真雑誌を読む	0.114	0.655
家でビデオ鑑賞をする	0.199	0.410
総合雑誌を読む	0.358	0.398
ドライブをする	0.111	0.398
テレビの歌謡番組を見る	0.014	0.363
ファミリーレストランで食事をする	0.206	0.332
繁華街に出てウインドーショッピングなどをする	0.353	0.314
映画を見に行く	0.284	0.281
競艇・競輪に行く	0.088	0.263
パチンコやマージャンをする	0.008	0.259
若手作家の小説を読む	0.346	0.228
キャンプなどの野外活動をする	0.067	0.211
手づくりでパンや菓子を作る	0.318	0.102
社会活動に参加する	0.317	0.102
家でくつろいでいる	−0.029	0.092
ゴルフをする	0.197	0.070
ピアノを弾く	0.190	0.068
テニスをする	0.091	0.051
短歌・俳句を作る	0.293	−0.053
固有値	3.988	1.959
回転後の負荷量平方和（%）	9.186	7.962
回転後の負荷量平方和（累積%）	9.186	17.148

注）因子負荷量は、絶対値が .360以上のものを採用した。

（2）本人の学歴等

ここでは本人に関する４つの変数についてふれる。本人学歴（教育年数）、本人職業（威信スコア）、本人収入、生活満足度である。

⑥本人学歴（教育年数）

③の父学歴と質問項目が同様であるので、ここでは詳細な説明は省略する。

⑦本人職業（威信スコア）

④の父職業と質問項目が同様であるので、省略する。

⑧本人収入

質問では、現在の本人の収入を１７のカテゴリで尋ねている。ここでは収入が多くなれば数値が高くなるように１７の数値を与えた。

⑨生活満足度

「生活全般」「職場での処遇」「仕事の内容」「学歴」「社会的地位」という５つの場面を想定し、それぞれについての現在の満足度を５段階で尋ねている。それらを因子分析により「生活満足度」因子を抽出し、その因子得点を用いる。なお、ここでは因子分析表を省略するが、因子得点は高くなるほど生活に満足していることを示す。

（３）パーソナリティ

⑩パーソナリティ

最後に、従属変数に用いるパーソナリティについてふれたい。２４の項目により測定されたパーソナリティにおいて、３つの因子を抽出した。その結果を示したのが、上の表２である。

因子１には、「努力すれば、どんなことでも自分の力でできる」「幸福になるか不幸になるかは、自分の努力しだいだ」「努力すれば、立派な人間になれる」など、努力を強調する項目からなっている。そこでこれを「努力志向」と命名した。

因子２では、「幸福になるか不幸になるかは、偶然によって決まる」「自分の人生は、運命によって決められている」「将来は、運やチャンスによって決まる」など、運や運命によって価値づけられる項目からなっている。よってこれを「運命志向」と名付けた。

因子３は、「友人の数は多い方だ」「好きなことに時間を忘れる」「自分の生活を大切にしたい」といった、外向的で自分自身の時間や生活についてしっかりとした考えを持っている傾向がうかがえる項目からなっている。よってこれを「友人志向」と名付けた。

ここでは因子１「努力志向」の因子得点を分析に用いることにする。

表2)パーソナリティの因子分析

	因子1 努力志向	因子2 運命志向	因子3 友人志向
努力すれば、どんなことでも自分の力でできる	0.627	-0.023	0.047
幸福になるか不幸になるかは、自分の努力しだいだ	0.617	0.002	0.135
自分の一生を思いどおりに生きることができる	0.526	-0.042	0.087
いっしょうけんめい話せば、だれでもわかってくれる	0.480	-0.080	0.080
努力すれば、立派な人間になれる	0.480	-0.040	0.113
たいていの場合、自分自身で決断した方が、よい結果を生む	0.425	0.160	0.158
自分の人生は自分自身で決定している	0.412	0.031	0.118
幸福になるか不幸になるかは、偶然によって決まる	-0.110	0.610	-0.053
自分の人生は、運命によって決められている	0.060	0.543	0.033
将来は、運やチャンスによって決まる	0.133	0.498	0.105
自分の身におこることを自分の力ではどうすることもできない	-0.194	0.489	0.176
人生は、ギャンブルのようなものだ	-0.003	0.488	-0.013
どんなに努力しても、友人の本当の気持ちを理解することはできない	-0.052	0.471	-0.065
友人の数は多い方だ	0.266	-0.081	0.455
好きなことに時間を忘れる	0.162	0.081	0.448
自分の生活を大切にしたい	0.152	0.062	0.441
ものを深く考える方だ	0.017	0.063	0.375
流行には敏感な方だ	0.144	0.053	0.349
努力すれば、だれとでも友人になれる	0.365	-0.021	0.191
自分自身の身におこることは自分のおかれている環境によって決定されている	0.039	0.380	0.100
努力することと、成功することはあまり関係がない	-0.175	0.301	0.087
将来何になるかについて考えることは、役に立つ	0.389	0.043	0.067
他人の意見に左右される方だ	0.035	0.113	0.047
なんでも、成り行きにまかせるのが一番だ	0.036	0.372	-0.034
固有値	3.470	2.844	1.447
回転後の負荷量平方和(%)	9.981	8.594	4.427
回転後の負荷量平方和(累積%)	9.981	18.574	23.001

注)因子負荷量は、絶対値が .400以上のものを採用した。

3．学歴とパーソナリティの関連性分析

それでは次に、以上の変数を用いて、パーソナリティに学歴がどのように関わっているかを、重回帰分析及びパス解析により明らかにしたい。重回帰分析の結果を示したものが次の表3である。

この結果を見ると、パーソナリティ「努力志向」に対して有意な影響を与えているのは「正統文化志向」「生活満足度」のみである。家庭の文化が正統文化的であればあるほど、また現在の生活に満足していればいるほど、努力志向的なパーソナリティを有すると解釈できる。

表3)パーソナリティの規定要因分析

従属変数:「努力志向」 独立変数	標準化係数 β	確率
男性	0.024	
年齢	−0.014	
父学歴(教育年数)	0.015	
父職業(威信スコア)	0.021	
正統文化志向	0.103 **	
本人学歴(教育年数)	0.005	
本人職業(威信スコア)	−0.045	
本人収入	0.065	
生活満足度	0.254 **	
** p<.01, * p<.05	R= .297**	

なお、ここでは学歴の影響は特に見られない。しかしながら、この分析はあくまで直接効果のみに着目するものであり、学歴のパーソナリティに対する間接的な効果までは確認できない。よって次には、これらの変数を用いて、パス解析を行いたい。パス解析は単純な重回帰分析と違い、途中の影響過程まで明らかにできる分析である。

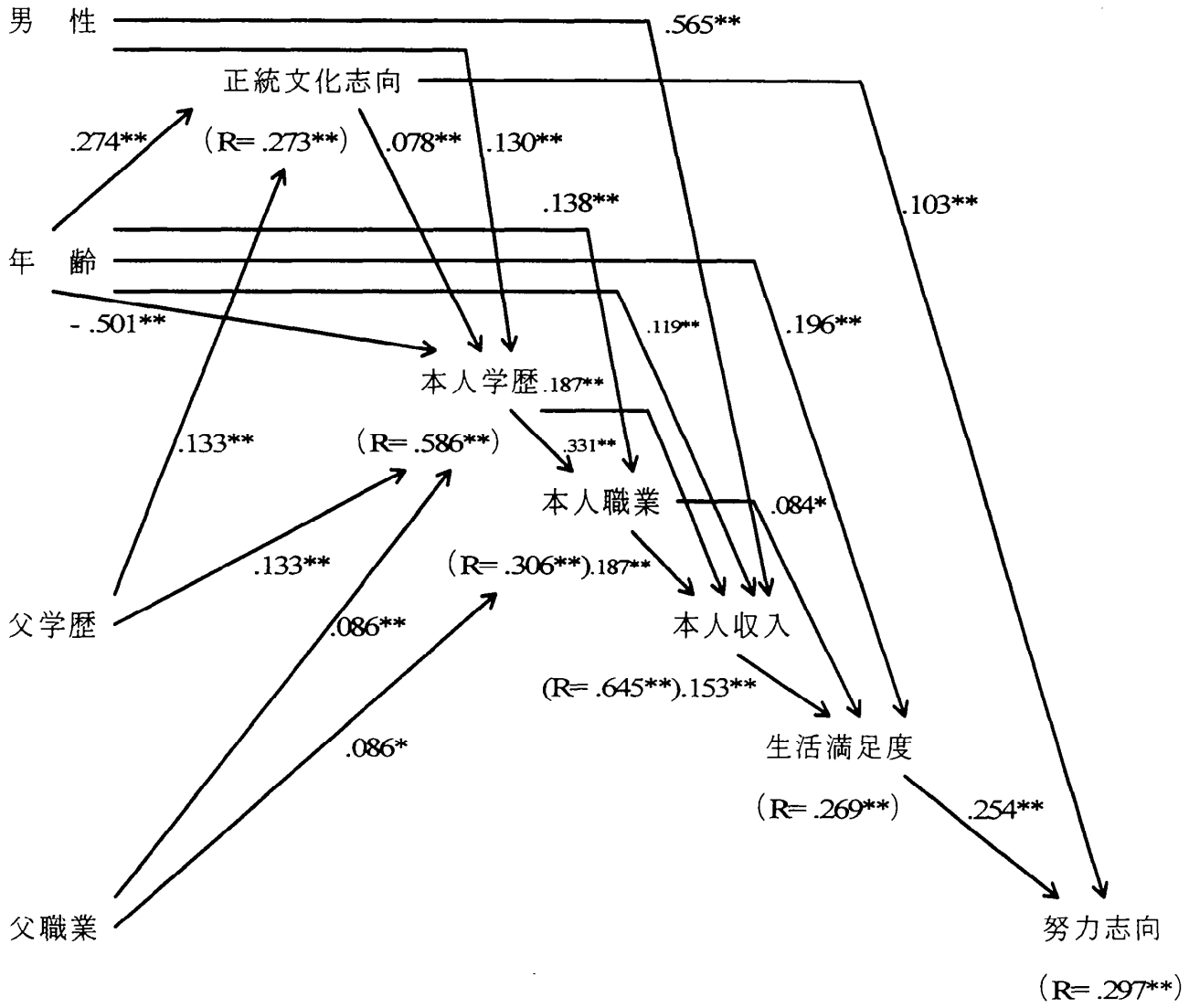
パス解析の結果を示したものが図2である。分析では外生変数として「男性」「年齢」「父学歴」「父職業」といった属性を示す変数を設定し、媒介変数として、「正統文化志向」「本人学歴」「本人職業」「本人収入」「生活満足度」といった、現在の個人を示す変数を設定した。

この図により、学歴のパーソナリティに対する影響が明らかになる。すなわち、本人の学歴からパーソナリティ「努力志向」への直接効果は確かにないが、「本人学歴」から「本人職業」(.331**)、「本人職業」から「本人収入」(.187**)、「本人収入」から「生活満足度」(.269**)、「生活満足度」から「努力志向」(.254**) という、これらの変数を介した間接効果は見出せる。その他にも、「本人学歴」から「本人収入」(.187**)、「本人職業」から「生活満足度」(.084**) という効果も併せて考えることができる。また、その「本人学歴」に対しても、「父学歴」からの直接効果 (.133**) が見出されている。さらに、「父学歴」から「正統文化志向」(.133**)、「正統文化志向」から「努力志向」(.103**) という、「父学歴」から「正統文化志向」を介したパーソナリティへの影響も明らかになる。

その他、「父職業」から「本人学歴」、「父職業」から「本人職業」、「正統文化志向」から「本人学歴」など、再生産論的にも興味深い結果が見出されており、さらに細かく検討すると様々な影響に焦点を当てることができるが、こうした結果より概して言うと、父親あるいは本人の学歴とパーソナリティの形成とは、決して無関係ではないことが示唆されていると言える。

なお、図ではパス係数の絶対値が .070 未満のパスは削除されている。

図２）パーソナリティ規定要因のパス・ダイアグラム



結びにかえて

本研究の結果は図２に縮約されている。また、ここでの結果は、最初に挙げた仮説を指示するものであった。すなわち、学歴はパーソナリティ形成に影響を与えており、さらに具体的には、親や本人の学歴が高ければ高いほど、努力志向的なパーソナリティが形成される（内的統制感が高まる）ということである。

心理学における「パーソナリティ」と社会学における「ハビトゥス」は、ほぼ同義のも

のとされている。したがって、文化的再生産論の観点からは、学歴とパーソナリティの関連が見出されることは、むしろ当然のことであるかもしれない。しかしそうであるならばなおさら、今後、学歴とパーソナリティ、学歴とハビトゥスに関する実証的研究が必要であると思われる。その意味においては、本研究の結果から、そうした必要性が認識されることを期待したい。

いずれにしても、メリトクラシー社会という幻想は、世代を越えて、さらに温存されることになるだろう。

なお、最近の心理学界の研究動向において、パーソナリティ構造について、「Big Five」（５大次元尺度）か「Giant Three」（巨大３次元尺度）かといった議論が盛んになっている。つまり、パーソナリティの次元は何か、そしてそれはいくつ必要なのかについての議論である。３類型なのか５類型なのか、一部においては徐々にどちらかに収束しつつある。ここでは検討しなかったが、今後、このような尺度と学歴との関係も明らかにする必要があろう。

◇ 参考文献

青木章之介「過渡期の男女平等と階級・階層帰属意識」『日本労働研究機構研究紀要』No.16, 27-47 頁, 1998 年。

Backman, J.G., & O'Malley, P.M., Self-esteem in young men: A longitudinal analysis of the impact of educational and occupational attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 365-380, 1977.

Backman, J.G., & O'Malley, P.M., Self-concepts, self-esteem, and educational experiences: the frog pond revisited(again). *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 35-46, 1986.

黄順姫「学歴の社会的機能 ── アイデンティティの準拠・社会的資本の蓄積 ── 」『社会学ジャーナル』第 19 号, 26-47 頁, 1994 年。

黄順姫『日本のエリート高校 ── 学校文化と同窓会の社会史 ── 』世界思想社, 1998 年。

原純輔・盛山和夫『階層社会──豊かさの中の不平等──』東京大学出版会, 1999 年。

石戸教嗣「パラドックスとしての学歴主義 ── パーソナリティ・システムとの関わりをめぐって ── 」『社会学評論』Vol. 46, No. 1, 1995年。

石川准『アイデンティティ・ゲーム ── 存在証明の社会学』新評論, 1992年。

井上信子「児童の自尊心と失敗課題の対処との関連」『教育心理学研究』34集, 10-19頁, 1986年。

Ishida, H. , *Social mobility in contemporary Japan*, Macmillan, 1993.

石田浩「学歴と社会経済的地位の達成――日米英国際比較研究――」『社会学評論』第159巻, 252-266頁, 1989年。
神田信彦「子ども用一般主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討」『教育心理学研究』第41巻, 第3号, 275-283頁, 1993年。
苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』中公親書, 1995年。
柏木恵子『子どもの自己の発達』東京大学出版会, 1983年。
片岡栄美編『文化と社会階層(1995年ＳＳＭ調査シリーズ)』1995年ＳＳＭ調査研究会, 1998年。
吉川徹「階層評価基準の静かな変容 ― 階層帰属意識の規定要因の時系列比較」間々田孝夫編『現代日本の階層意識(1998年ＳＳＭ調査シリーズ)』1995年ＳＳＭ調査研究会, 1-21頁, 1998年。
吉川徹『階層・教育と社会意識の形成 ― 社会意識論の磁界』ミネルヴァ書房, 1998年。
小林久高「階層帰属意識と不公平感についての一考察」『奈良女子大学文学部研究年報』第39号, 39-52頁, 1995年。
高坂健次・宮野勝「階層イメージ－イメージ形式過程への数理的アプローチ」原純輔編『現代日本の階層構造②：階層意識の動態』東京大学出版会, 47-70頁, 1990年。
木村邦博「教育、学歴社会イメージと不公平感」『理論と方法』Vol. 13, No. 1, 107-126頁, 1998年。
間々田孝夫「階層帰属意識 ― 経済成長、平等化と『中』意識」原純輔編『現代日本の階層構造②：階層意識の動態』東京大学出版会, 23-45頁, 1990年。
Maruyama, G., Rubin, R.A., & Kingsbury, G.G., Self-esteem and educational achievement: independent constructs with a common cause? *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 962-975, 1981.
三隅一人「地位の非一貫性と階層帰属意識 ― 準拠集団論からのパースペクティヴ ― 」『山口大学文学会誌』第37号, 139-154頁, 1986年。
三隅一人「階層帰属意識 ― その分析価値の消失 ― 」原純輔編『現代日本の階層構造②：階層意識の動態』東京大学出版会, 71-95頁, 1990年。
宮島　喬・藤田英典編『文化と社会 ― 差異化・構造化・再生産』有信堂, 1991年。
直井道子「階層帰属意識 ― 女性の地位借用モデルは有効か ― 」原純輔編『現代日本の階層構造②：階層意識の動態』東京大学出版会, 147-164頁, 1990年。
直井優, 盛山和夫編『現代日本の階層構造①:社会階層の構造と過程』東京大学出版会, 1990年。
O'Malley, P.M., & Bachman, J.G., Self-esteem and education: sex and cohort comparisons among high school seniors. *Journal of Personality and Social Psychology*,37,1153-1159,1979 .

Rotter, J.B., Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28, 1966.

杉山　成「中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性」『教育心理学研究』第 42 巻, 第 4 号, 415-420 頁, 1994 年。

杉山　成「青年期における一般的統制感と時間的展望 ── アパシー傾向との関連性 ── 」教育心理学研究』第 44 巻, 第 4 号, 418-424 頁, 1996 年。

数土直紀「学歴と階層意識 ── 学歴が階層帰属意識の形成に及ぼす二つの効果」間々田孝夫編『現代日本の階層意識（1998年ＳＳＭ調査シリーズ)』1995年ＳＳＭ調査研究会, 23-45頁, 1998年。

竹内　洋『日本のメリトクラシー ── 構造と心性』東京大学出版会, 1995 年。

Wiggins, J.S. (Ed.), *The five-factor model of personality*, New York: Guilford Press, 1996.

第５章　大学および大学卒業者に対するイメージの形成

作田　良三

1.　はじめに

大学が大衆化しユニバーサル化へと向かおうとしている現在、人々のなかで大学はどのような機関として捉えられているのであろうか。また、大学卒業者（以下、大卒者）はどのような人たちと考えられているのだろうか。本稿では、大学に対するイメージ、大卒者に対するイメージについて分析・考察する。

現在は500超の大学が存在しているため、人々の意識においても「○○大学は…」「△△大学だから…」というように、個別の大学に対してイメージをもっていると考えられる。さらには、「○○大学の□□学部は…」というように、各大学の学部それぞれにも何らかのイメージを付与していることであろう。これは、大卒者に関しても同様である。同じ大卒者であっても、その出身大学によって人々は異なるイメージをもつと考えられる。

だがここで取り上げるのは、大学全般・大卒者全般に対するイメージである。何らかの学歴をすでに取得した（あるいは取得予定の）成人は、世代によっていくらか異なるであろうが、学歴獲得競争に駆り立てられた、あるいはその競争からおりた経験のある人々が多く存在していることだろう。そのため、「大学をどのような機関だと考えるか」「大卒者はどのような人々か」という問いを投げかけた場合、人々は、学歴獲得競争における自己の経験に基づいて回答するのではないだろうか。

そこで本稿では、大学・大卒者に対するイメージに関連する要因を明らかにすることをとおして、そこに表象される人々の学歴意識を探ることとする。

2.　大学・大卒者イメージの諸相と分析方法

2.1.　大学イメージの諸相

大学イメージとしては、第一に、大学がいまや誰でも望めば進学できる機関として位置づけられているのかどうかを取り上げる。つまり、志願者全入時代が近い将来訪れるであろうと推測されている現在において、学歴獲得競争を終えた人々の意識のレベルでどのように捉えられているのかを明らかにするのである。

第二に、大学教育の機能について取り上げ、人々が、大学を一般教養と専門的知識・技能のいずれを習得させる機関として捉えているのかを明らかにする。無論、両方ともに大学に課せ

られた教育機能であり、その両方を大学教育に求めている人々も存在するであろう。だがその一方で、大学教育内容が無効であるという論はあちこちで展開されていることでもある。一般教養も専門的知識・技能も習得させない（させられない）機関として大学を捉えている人は、実質としての学歴に意味を見出していないと捉えられ得るだろう。これらの大学教育機能に対する意識は、大卒者においては、自分の受けてきた大学教育に対する評価を内包したものとして位置づけられよう。

さらに、大学教育の効用に関するイメージも取り上げる。一つは、「大学の教育内容は直接仕事に結びついていなければならない」かどうかについてである。これは、大学教育の職業レリヴァンスに関わるイメージである。またこれと関連して、大学教育に対する批判の一つとして「専門学校で学んだことの方が社会に出てから役に立つ」というものがある。かつては大学・短大の受け皿として捉えられがちだった専門学校も、近年では大学のオールタナティブとして位置づくと考えられる。そこで、「大学の教育内容が専門学校と比較して有効なものなのか」という問いも取り扱うこととする。なお、大学教育の機能に関するイメージと同様、このイメージについても、大卒者の場合は実際に大学教育を受けてきたわけであるから、その経験に基づいた評価が加味されていると考えられる。

2.2. 大卒者イメージの諸相

大卒者に対するイメージについては、「あなたの周囲にいる大学卒の人たちを全体としてみたとき、つぎのことがどの程度あてはまると思いますか」という設問で、17 項目の態度・能力を挙げ、「とてもそう思う－ややそう思う－あまりそう思わない－全くそう思わない－わからない」の５肢選択で尋ねている。ちなみに、ここで取り上げる 17 項目の態度・能力は、主に、職業・職種に関係なく、職務を遂行するうえで要求されうるものを想定して作成したものである。

表１は素集計を示したものである。これによると、全体的には否定的に評価する傾向が見られる。「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答した人が過半数を占めたのは「専門的知識・技術がある」(55.0%)、「社交性がある」（50.2%）の２項目だけである。そのほか、「のみこみが早い」(45.5%)、「教養を身につけている」(42.7%)の２項目で４割を超えている。

これら 17 項目の相関を調べてみると、どの項目間も相関が高かった。だが、便宜上、これらの項目を表２のように、「意欲・態度」、「適応能力」、「知識・教養」、「対人関係能力」、「リーダーシップ能力」、「実務能力」という６つの側面に分類し、以下の分析に用いることとする。

表１）「大卒者の評価」に関する素集計

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない	無回答	合計
意欲的に働いている	32	156	323	54	27	102	694
	4.6	22.5	46.5	7.8	3.9	14.7	100.0
努力家である	26	149	308	64	45	102	694
	3.7	21.5	44.4	9.2	6.5	14.7	100.0
向上心がある	39	196	272	44	38	105	694
	5.6	28.2	39.2	6.3	5.5	15.1	100.0
責任感がある	35	147	295	69	44	104	694
	5.0	21.2	42.5	9.9	6.3	15.0	100.0
物事に対して積極的である	26	146	316	55	49	102	694
	3.7	21.0	45.5	7.9	7.1	14.7	100.0
のみこみが早い	58	215	261	33	34	93	694
	8.4	31.0	37.6	4.8	4.9	13.4	100.0
臨機応変に対応できる	34	193	261	67	41	98	694
	4.9	27.8	37.6	9.7	5.9	14.1	100.0
考え方に柔軟性がある	33	195	280	48	35	103	694
	4.8	28.1	40.3	6.9	5.0	14.8	100.0
専門的知識・技術がある	63	264	195	41	31	100	694
	9.1	38.0	28.1	5.9	4.5	14.4	100.0
教養を身につけている	39	214	270	39	30	102	694
	5.6	30.8	38.9	5.6	4.3	14.7	100.0
常識がある	30	185	286	71	23	99	694
	4.3	26.7	41.2	10.2	3.3	14.3	100.0
協調性がある	30	157	313	55	36	103	694
	4.3	22.6	45.1	7.9	5.2	14.8	100.0
社交性がある	57	242	230	38	29	98	694
	8.2	34.9	33.1	5.5	4.2	14.1	100.0
指導力がある	34	166	288	64	39	103	694
	4.9	23.9	41.5	9.2	5.6	14.8	100.0
人をまとめる力がある	24	147	317	55	46	105	694
	3.5	21.2	45.7	7.9	6.6	15.1	100.0
独創力がある	28	133	319	64	49	101	694
	4.0	19.2	46.0	9.2	7.1	14.6	100.0
事務処理能力に優れている	41	193	273	44	40	103	694
	5.9	27.8	39.3	6.3	5.8	14.8	100.0

表２）大卒者の能力・態度に関する評価項目の類型

類　型	項　目		
意欲・態度	意欲的に働いている	向上心がある	物事に対して積極的である
	努力家である	責任感がある	
適応能力	のみこみが早い	臨機応変に対応できる	考え方に柔軟性がある
知識・教養	専門的知識・技術がある	教養を身につけている	常識がある
対人関係能力	協調性がある	社交性がある	
リーダーシップ能力	指導力がある	人をまとめる力がある	独創力がある
事務処理能力	事務処理能力に優れている		

以下の分析では、これら６つの類型をそれぞれ一元化し、その６つの尺度を用いることによって、大卒者に対するイメージに迫ることとしたい。各尺度は、各類型に含まれる項目の得点の和を、項目数で除したものである(1)。そうすることにより、項目数の異なる６つの能力・態度を比較可能な尺度に変換できるのである。

表３）各側面の平均値・標準偏差

	平均値	標準偏差
意欲・態度	2.30	0.588
適応能力	2.41	0.600
知識・教養	2.44	0.592
対人関係能力	2.42	0.623
リーダーシップ能力	2.26	0.604
事務処理能力	2.42	0.744

すると、各尺度の平均値・標準偏差は表３のようになる。素集計でも明らかであったように、どの能力・態度に関しても平均値は低い。特に「リーダーシップ能力」は最も評価が低い。

2.3. 分析方法

分析は、本サンプル全体で、本人の属性（性・年齢・学歴・職業）によって、大学・大卒者イメージがいかに異なっているのかを明らかにする(2)。なお、先にも述べたが、大学教育の機能・効用に対するイメージの形成には、大卒者の場合、自己の経験に基づく評価が含まれる傾向にあると考えられる。そのため、このイメージについては、大卒者のみを取り出し、そのなかで属性との関連も探ることとする(3)。そのうえで、大学イメージと大卒者イメージとの関連について探ることとする。

なお、分析手法としては、クロス分析および平均値の差の検定を用いることとする。

3. 大学に対するイメージの傾向

3.1. 教育機会の平等に関するイメージ

全体の回答状況をみると、大学が「いまや望めば誰でも行ける教育機関である」と思う人は、「とてもそう思う」「ややそう思う」を合わせると、約３分の２に及んでいる（表４）。教育機会が平等に開かれているという意識は、多くの人々に浸透しているようである。

表４）「教育機会の平等」イメージの素集計

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない	無回答	合計
大学はいまや望めば誰でも行ける教育機関である	162	280	153	45	20	34	694
	23.3	40.3	22.0	6.5	2.9	4.9	100.0

それでは、属性によってこのイメージはどのように異なるのであろうか。表５は、本人の属性（性・年齢・学歴・職業）についてクロス集計した結果である(4)。すると学歴においてのみ有意差が見出され、「いまや望めば誰でも行ける教育機関である」と考える人は大卒・中卒に多いことが分かる。逆にいうと、高卒・短大卒において「望んだからといって誰でも行けるとは限らない」と考えている者の割合が高いといえる。

表５）「教育機会の平等」イメージと属性との関係

	性						年齢					
	男		女		合計		20-35歳	36-50歳	51-65歳	66歳以上	合計	
大学はいまや望めば誰でも行ける教育機関である	67.8		70.1		69.1		67.8	70.6	68.2	70.9	69.1	
	学歴						職業					
	中卒	高卒	短大卒	大卒	合計		専門的・管理的職業	事務的・販売的職業	農業・労働・その他		合計	
大学はいまや望めば誰でも行ける教育機関である	72.6	67.4	61.2	76.6	69.2	***	72.4	71.5	63.3		69.6	

注：*は5%水準、**は1%水準、***は0.1%水準でそれぞれ有意であることを示す（以下同様）。

3.2. 大学教育の機能に関するイメージ

素集計（表６）をみると、大学を「職業に役立つ専門教育を施す」機関と捉えている人も、「高度な教養を身につける」機関と捉えている人も、どちらも過半数を占めていることが分かる。すなわち、全体的には、大学教育の機能に対してそれほど否定的なイメージを持ってはいないといえよう。

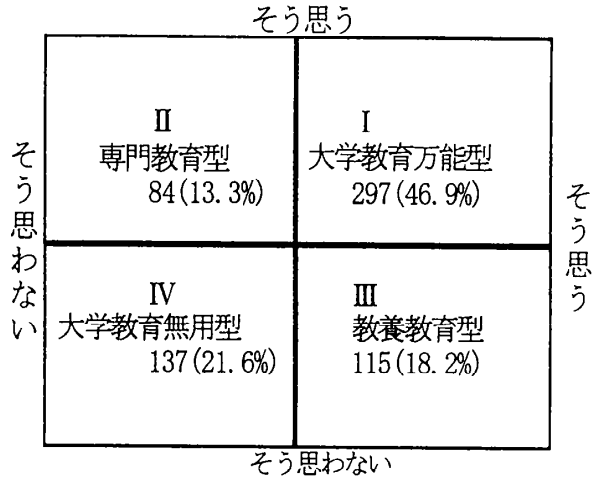
表６）「大学教育の機能」イメージの素集計

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない	無回答	合計
大学は職業に役立つ専門教育を施すところである	150	241	206	48	19	30	694
	21.6	34.7	29.7	6.9	2.7	4.3	100.0
大学は高度な教養を身につけるところである	181	238	188	37	19	31	694
	26.1	34.3	27.1	5.3	2.7	4.5	100.0

では次に、この２項目を用いて大学教育の機能に対するイメージを類型化してみよう（図１）。まず、大学を専門教育も施し、高度な教養も身につけさせる機関と考える人は、大学教育に様々な役割を期待していると考えられるため、「大学教育万能型」（以下Ⅰ型と表記）と捉えられよう。次に、専門教育を施すが、教養を身につける機関ではないと考える人は「専門教育型」（以下Ⅱ型と表記）とし、同様に、教養を身につけさせるが専門教育は施さないと考える人は「教養教育型」（以下Ⅲ型と表記）と名づける。また、大学に対してどちらの役割も見出していない人は「大学教育無用型」（以下Ⅳ型と表記）と名づけることとする。すると図１に示すように、全体的には「Ⅰ型」に属する人が297名（46.9%）と最も多い。だがその一方で、「Ⅱ型」（13.3%）と「Ⅲ型」（18.2%）よりも、「Ⅳ型」（21.6%）が多いことも見逃せないであろう。すなわち、たしかに大学教育の役割を肯定的に捉える人が多い一方で、まったく機能を果たしていないと考える人が５人に１人存在しているのである。

それでは以下、この類型を用い、属性や学歴満足度との関連について調べることとする。

まず属性との関連を調べると、表7に示すように、年齢において有意差が見られた。すなわち、51 歳以上（とりわけ66歳以上）の人において「Ⅰ型」の比率が高く、20－35歳の若年層においては、「Ⅳ型」に属するものが3割に及んでいる。高齢者ほど、大学教育の機能に対して肯定的・好意的に受け止めているようである。



縦軸：「大学は職業に役立つ専門教育を施すところである」
横軸：「大学は高度な教養を身につけるところである」

図1）大学教育機能に関するイメージの類型化

だが、そのほか、性・学歴・職業によっては大学教育機能に関するイメージに差異はみられなかった。大学教育を受けた大卒者においても、その2割は大学教育が無用であると考えているのである。なお、大卒者のみを取り出して、性・年齢・職業との関係を調べたところ、高齢者において若干「Ⅰ型」の割合が高いものの、どれについても有意差は見られなかった（表8）。

表7）「大学教育の機能」イメージと属性との関係

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	合計	
性	男性	48.1	12.6	17.9	21.4	100.0	
	女性	46.0	13.8	18.4	21.8	100.0	
年齢	20-35歳	36.6	13.7	19.0	30.7	100.0	***
	36-50歳	41.8	13.0	18.6	26.6	100.0	
	51-65歳	49.1	14.2	20.2	16.5	100.0	
	66歳以上	69.9	10.8	10.8	8.4	100.0	
学歴	中卒	55.6	17.5	14.3	12.7	100.0	
	高卒	48.8	14.0	14.7	22.5	100.0	
	短大卒	37.5	15.6	22.7	24.2	100.0	
	大卒	46.2	9.9	21.6	22.2	100.0	
職業	専門的・管理的職業	48.3	13.1	14.5	24.1	100.0	
	事務的・販売的職業	42.8	18.1	20.3	18.8	100.0	
	農業・労働・その他	49.1	9.4	14.2	27.4	100.0	

表８）大卒における「大学教育の機能」イメージと属性との関係

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	合計
性	男	45.7	10.3	20.7	23.3	100.0
	女	47.3	9.1	23.6	20.0	100.0
年齢	20-35歳	42.9	11.1	17.5	28.6	100.0
	36-50歳	42.1	8.8	24.6	24.6	100.0
	51-65歳	48.7	10.3	25.6	15.4	100.0
	66歳以上	75.0	8.3	16.7	0.0	100.0
職業	専門的・管理的職業	53.1	4.7	20.3	21.9	100.0
	事務的・販売的職業	31.0	23.8	23.8	21.4	100.0
	農業・労働・その他	40.0	6.7	33.3	20.0	100.0

3.3. 大学教育の効用に関するイメージ

大学教育の効用に関する素集計（表９）をみると、「大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ」という人は６割強存在しており、全体的にはネガティブなイメージを持つ傾向がある。専門教育と教養教育の両方を期待している人が多いという前述の結果、および「教育内容が直接仕事に結びつかなくてもよい」という人が半数に満たないということを加味すると、大学教育に対する期待がある分、その効用に関して歯がゆい感情を抱いているとも考えられる。

表９）「大学教育の効用」イメージの素集計

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない	無回答	合計
大学での教育内容は直接仕事に結びつかなくてもよい	69	228	219	104	36	38	694
	9.9	32.9	31.6	15.0	5.2	5.5	100.0
大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ	165	264	158	26	51	30	694
	23.8	38.0	22.8	3.7	7.3	4.3	100.0

属性に関するクロス集計（表 10）からは、まず、「専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ」という意見が、世代や学歴等を問わず大きいということが看て取れる。実際に大学教育を受けた大卒者であっても、若干割合は下がるが、他の学歴の人と同じように、専門学校の方が社会に出て役立つと考えているのである。

表 10）「大学教育の効用」イメージと属性との関係

	性				年齢					
	男	女	合計		20-35歳	36-50歳	51-65歳	66歳以上	合計	
大学での教育内容は直接仕事に結びつかなくてもよい	52.1	44.4	47.9		46.4	43.7	48.1	60.8	48.1	*
大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ	67.5	72.0	70.0		72.7	65.7	70.0	73.3	69.9	

	学歴						職業				
	中卒	高卒	短大卒	大卒	合計		専門的・管理的職業	事務的・販売的職業	農業・労働・その他	合計	
大学での教育内容は直接仕事に結びつかなくてもよい	54.8	40.2	46.4	57.7	47.9	**	43.2	50.7	47.1	47.0	
大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ	75.0	72.1	68.9	65.4	70.0		68.3	77.1	67.3	71.1	

また、職業レリヴァンスに関しては、まず年齢による違いがみられる。つまり、66歳以上の人においては、「仕事に結びつかなくてもよい」と考える人の割合が群を抜いて高いのである。また学歴においても有意差が見られ、その多くが高齢者である中卒において「結びつかなくてもよい」という人が多くみられる。先の分析結果で、高齢者（特に66歳以上の人）は大学教育の機能に対して肯定的イメージを持つことを明らかにしたが、これらの世代の人々は、その一方で大学教育の効用を度外視する傾向にある。

また、学歴に関しては中卒だけでなく、大卒においても「直接仕事に結びつかなくてもよい」と考える人々の比率が高くなっている。そこで、実際に大学教育を受けた大卒者のみを取り出して分析を行ったが、表11に示すように、属性との関連は見られなかった。つまり、どのような人であれ、大卒者は職業レリヴァンスを評価しない傾向にあるといえる。

表11）大卒における「大学教育の効用」イメージと属性との関係

	性				年齢					
	男	女	合計		20-35歳	36-50歳	51-65歳	66歳以上	合計	
大学での教育内容は直接仕事に結びつかなくてもよい	60.5	51.9	57.8		62.9	52.6	56.4	60.0	57.8	
大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ	63.2	69.8	65.4		63.2	66.0	62.2	83.3	65.4	

	職業				
	専門的・管理的職業	事務的・販売的職業	農業・労働・その他	合計	
大学での教育内容は直接仕事に結びつかなくてもよい	58.7	56.1	66.7	58.9	
大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ	60.3	74.4	71.4	66.6	

4. 大卒者に対するイメージの傾向

大卒者に対するイメージが回答者の属性によってどのように異なっているのか調べると、表12・表13のような結果が得られた。これらの表より、大卒者に対するイメージには性や職業は関係がないと推察される。それに対して、学歴による差は顕著であり、6側面すべてに関して大卒および中卒の人々が肯定的なイメージを示す傾向にある。また、年齢別に見た場合も4つの側面において有意差が見出され、いずれも66歳以上の高齢者において得点が高い。

表12）「大卒者イメージ」と性・年齢との関係

		意欲・態度		適応能力		知識・教養		対人関係能力		リーダーシップ能力		事務処理能力	
性	男	2.268		2.405		2.417		2.423		2.212		2.440	
	女	2.327		2.408		2.473		2.426		2.300		2.402	
年齢	20-35歳	2.281		2.336	***	2.425	**	2.500		2.150	***	2.384	*
	36-50歳	2.255		2.378		2.408		2.404		2.209		2.372	
	51-65歳	2.292		2.396		2.417		2.363		2.274		2.409	
	66歳以上	2.527		2.735		2.730		2.529		2.639		2.704	

表 13)「大卒者イメージ」と学歴・職業との関係

		意欲・態度	適応能力	知識・教養	対人関係能力	リーダーシップ能力	事務処理能力
学歴	中卒	2.418 **	2.617 ***	2.545 **	2.535 *	2.533 **	2.891 ***
	高卒	2.197	2.296	2.357	2.336	2.180	2.341
	短大卒	2.276	2.336	2.395	2.418	2.238	2.325
	大卒	2.419	2.533	2.550	2.516	2.300	2.436
職業	専門的・管理的職業	2.305	2.412	2.444	2.457	2.247	2.358
	事務的・販売的職業	2.232	2.381	2.333	2.444	2.183	2.323
	農業・労働・その他	2.274	2.411	2.454	2.342	2.239	2.490

しかし、職業は本当に大卒者イメージと関連がないのであろうか。先述のように、これらの能力・態度は職務遂行上必要とされるものを想定して作成されたものである。そのため、質問文では「あなたの周囲にいる大学卒の人たちは・・・」と尋ねているものの、回答者の側からしても、職場における大卒者を想起していることは十分考えられる。そこで、「自分の職場に高学歴の人が多い」と「職業柄、高学歴の人を相手にする機会がある」という 2 項目との関係を調べることとする。すなわち、職業上、大卒者を身近に感じているかどうかによってイメージが異なるかどうかを調べるのである(5)。

すると、学歴段階別にみた場合、表 14・表 15 のような結果が得られた。中卒者や大卒者を中心に、職場で高学歴者を身近に感じている人の方が大卒者に対するイメージがよい傾向にある。

表 14)「大卒者イメージ」と「自分の職場に高学歴の人が多い」との関係

		意欲・態度	適応能力	知識・教養	対人関係能力	リーダーシップ能力	事務処理能力
中卒	あてはまる	2.60	2.62	2.61	2.81	2.50	3.00
	あてはまらない	2.34	2.52	2.56	2.46	2.39	2.76
	合計	2.43	2.56	2.58	2.58	2.43	2.86
高卒	あてはまる	2.19	2.29	2.42	2.33	2.21	2.34
	あてはまらない	2.18	2.29	2.28	2.33	2.15	2.33
	合計	2.18	2.29	2.33	2.33	2.17	2.34
短大卒	あてはまる	2.32	2.41	2.41	2.47	2.30	2.49 *
	あてはまらない	2.24	2.27	2.35	2.35	2.19	2.22
	合計	2.27	2.32	2.38	2.40	2.23	2.32
大卒	あてはまる	2.61 **	2.64 *	2.68 **	2.61	2.41 **	2.54 *
	あてはまらない	2.22	2.43	2.39	2.42	2.16	2.30
	合計	2.41	2.53	2.53	2.51	2.28	2.41

表 15)「大卒者イメージ」と「職業柄、高学歴の人を相手にする機会がある」との関係

		意欲・態度	適応能力	知識・教養	対人関係能力	リーダーシップ能力	事務処理能力
中卒	あてはまる	2.78 *	2.75	2.89 *	2.88 *	2.75	3.09
	あてはまらない	2.17	2.52	2.33	2.40	2.33	2.72
	合計	2.41	2.60	2.51	2.57	2.49	2.83
高卒	あてはまる	2.16	2.27	2.33	2.33	2.07 *	2.30
	あてはまらない	2.22	2.31	2.35	2.32	2.26	2.38
	合計	2.19	2.29	2.34	2.32	2.18	2.34
短大卒	あてはまる	2.27	2.40	2.33	2.40	2.28	2.44
	あてはまらない	2.28	2.30	2.42	2.38	2.22	2.22
	合計	2.27	2.34	2.38	2.39	2.24	2.31
大卒	あてはまる	2.52 **	2.60 *	2.61	2.53	2.36	2.58 ***
	あてはまらない	2.25	2.42	2.42	2.49	2.19	2.19
	合計	2.41	2.53	2.54	2.51	2.29	2.43

5. 大学イメージと大卒者イメージの関係

大学イメージと大卒者イメージとの関係を調べると、表 16 のような結果が得られた。大学を「教養を身につける機関」と捉えている人々は、どの能力・態度についても比較的肯定的なイメージをもっているし、専門教育を求める人も、知識・教養やリーダーシップ能力について肯定的である。

このように、大卒者イメージは、大学教育の機能に関するイメージと関連がありそうである。そこで、図1による 4 分類を用いて分析をしたところ、表 17 に示すように、すべてにおいて有意差が見出された。すなわち、教養教育を求めている人（Ⅰ型・Ⅲ型）は大卒者に対して肯定的なイメージをもっているのである。それに対し、専門教育のみを求めている人（Ⅱ型）は、大学教育無用型の人と同じように、大卒者の能力・態度に関して否定的に捉える傾向にある。

表 16）大学イメージと大卒者イメージとの関係

		意欲・態度		適応能力		知識・教養		対人関係能力		リーダーシップ能力		事務処理能力	
教育機会の平等	あてはまる	2.30		2.42		2.45		2.44		2.24		2.42	
	あてはまらない	2.29		2.39		2.44		2.40		2.30		2.38	
専門教育	あてはまる	2.34		2.46	*	2.52	***	2.47		2.33	**	2.46	
	あてはまらない	2.26		2.34		2.35		2.37		2.18		2.36	
教養教育	あてはまる	2.40	***	2.53	***	2.57	***	2.50	***	2.37	***	2.53	***
	あてはまらない	2.14		2.20		2.24		2.31		2.06		2.23	
仕事との結びつき	あてはまる	2.36	*	2.48	*	2.46		2.44		2.31		2.52	**
	あてはまらない	2.25		2.35		2.43		2.41		2.22		2.32	
専門学校との比較	あてはまる	2.30		2.41		2.42		2.47		2.26		2.43	
	あてはまらない	2.32		2.43		2.51		2.37		2.30		2.44	

表 17）大学教育機能イメージと大卒者イメージとの関係

	意欲・態度		適応能力		知識・教養		対人関係能力		リーダーシップ能力		事務処理能力	
大学教育万能型	2.40	***	2.54	***	2.61	***	2.52	**	2.40	***	2.54	***
専門教育型	2.13		2.19		2.23		2.31		2.07		2.19	
教養教育型	2.39		2.50		2.48		2.45		2.30		2.48	
大学教育無用型	2.15		2.20		2.24		2.31		2.07		2.26	
合計	2.31		2.41		2.45		2.43		2.27		2.42	

6. おわりに

以上、本稿では、大学および大卒者に対するイメージの形成要因について分析を行った。その分析結果について、若干の考察を加えることとする。

まず分析結果について概観すると、以下のようになる。

大学に対するイメージに関しては、全体的にいって、本人の年齢と学歴以外の要因は大学イメージの形成にほとんど関連しておらず、大学教育の機能や効用に関するイメージは、人々の間で広く共有されていることがうかがいしれた。つまり、大学教育の機能に対してはある程度

の期待が寄せられている反面、その効用に対しては否定的・寛容的なのである。

大卒者に対するイメージも本人の年齢と学歴によって異なる傾向にあったが、全体的にいって否定的なイメージである。つまり、大卒者は能力も意欲もそんなに高くないと捉えられているのであり、それは高卒者・短大卒者、および若年層ほど顕著である。

また、大学イメージと大卒者イメージの関係についていえば、大学教育機能に対するイメージ、特に教養教育に関するイメージによって、大卒者に対するイメージが大きく異なっている。

このような分析結果に関して、まず、その全体的傾向について考えることとしたい。

大学に対するイメージのうち、大学教育の効用に関するイメージにおいては、否定的な見解が多勢を占めている。また、大卒者の能力や態度に対するイメージも否定的な傾向にある。このことは、学歴の実質的な効用を人々が認めていないことを示していよう。だが、その一方では、大学に対して、専門教育・教養教育をおこなう機関であると捉える傾向にある。

そもそも学歴意識に関しては、新堀らによる『学歴意識に関する調査研究』（1965）、広島大学教育社会学研究室編「学歴意識に関する調査研究(1)」（1998）等において調査・分析されてきている。これらの調査研究においては、「実質としての学歴」に関わる学歴意識として、学歴の高い人ほど「一般教養や生活態度のため、学校を出た甲斐がある」「自分が出た学校のおかげで友人やコネができ得をすることがある」と考える傾向にあることが示されている。また、同研究室編「学歴意識に関する調査研究(2)」（1999）では、日常生活を送るうえで必要な技能（日常生活技能）を身につけているかどうかという自己評価において、学歴の高い人の方が、「言語構成能力」や「技術的操作能力」に関する自己評価が高いことが明らかとされている。これらの調査結果より、ある意味、実質としての学歴を人々が認めていると考えられる。

だが、これらの先行研究において取り上げられている実質的な効果に対する意識とは「自分」に関するものである。大卒者に対するイメージ、すなわち「あなたの周囲の高学歴者」という「他者」における学歴の実質的効果に対する意識（イメージ）に関しては、本稿で分析したように、全体的に否定的である。つまり、自分の学歴の実質的効果は認める一方で、他者の学歴の実質的効果は認めない傾向にあると考えられるのである。

学歴意識を研究するうえで、梶田（1983）は、「まなざし」という視点の重要性を説いている。彼によると、現代社会においては、プライドや自信といった自己評価的意識や感情の基盤は、他者の“まなざし”によって基本的に強化されたり脆弱化したりする、という。今回の分析から得られた知見から考えると、すでに学歴を取得した（あるいは取得予定の）人々は、自己のプライドや自信を保つために、自己の学歴の実質的効用を高く評価する一方で、他者の学歴の実質的効用を低く見積もっていると考えられる。

では、大学に対しても、大卒者に対しても、そのイメージの形成には年齢および学歴が大きく関係していることが示唆されたわけであるが、では、なぜ年齢や学歴によってイメージが異なるのであろうか。次はその点について考えたい。

まず年齢については、本人が学歴獲得競争へ参入した（おりた）時代が関係していると考え

られる。高齢者は、高等教育進学率が低く、大学がエリート教育機関として位置づいていた時代を育ってきた人々であり、大卒者はしかるべき社会的地位を獲得していたのである。そのような時代の経験者にとっては、学歴獲得競争に参入したか否かに関わらず、大学は教養も専門的知識もともに習得させ、優秀な人材を輩出する機関としてイメージが固定しているのではないだろうか。またそのような大卒者優遇の時代を肌で感じた人々にとっては、教育内容と仕事内容とが結びつく必要性を見出せないのではないだろうか。それに対して、若い人々は大学大衆化の時代に当てはまるため，大学や大卒者を特別視するようなことがないのであろう。

さらに、高齢者の場合は、学歴獲得競争を親として経験している。回答者の年齢によって子どもの有無や長子の年齢がどのように異なるかを調べると、表 18 のように、97%もの高齢者が 18 歳以上の子どもをもっているのである。彼らにとって、自分の子どもが学歴獲得競争に参入した時代は、3 人に 1 人が高等教育に進学しているような時代である。そのため、「とにもかくにも自分の子どもを大学に行かせたい」と考えていた人、また実際に大学に行かせた人というのは、少なくないのではないだろうか。「教育ママ」という語が現れた時期とほぼ重なることからも、当時の彼らの教育熱は高かったと考えられる。その彼らが大学に対して肯定的・好意的イメージをもっているのは、「大学とは高いお金を払ってまでも進学させるに値する機関である」という当時の親としての意識が現在もつよく根底にあるためかもしれない。また、「大学が教養も専門的知識も習得させない機関であり、大学を出ても能力が低い」と言ってしまえば、そのような大学に子どもを進学させたいと考えた自分の親としての思い（あるいはそのような大学に実際に進学させたこと）がむなしく感じられることであろう。

表 18）本人の年齢と子どもの有無・長子の年齢との関係

	こども			長子の年齢		
	いる	いない		18歳未満	18歳以上	
20-35歳	46.3	53.7	***	100.0	0.0	***
36-50歳	89.9	10.1		55.4	44.6	
51-65歳	93.0	7.0		2.3	97.7	
66歳以上	96.3	3.7		2.9	97.1	
合計	83.1	16.9		33.0	67.0	

次に学歴についていえば、有意差がみられたのは、大学教育の効用に関するイメージと大卒者の能力・態度に対するイメージといった、学歴の実質的な効用に関するものである。先述のように、自己のプライドや自信をまもるために、高卒者・短大卒者は否定的な見解が特につよいのではないだろうか。

なお、大卒者の能力・態度に対するイメージに関しては、職場においてどれだけ高学歴者と接触することが多いか（学歴を身近に感じているのか）との関係についても分析を行い、その結果、中卒者・大卒者は、接触が多いほど（身近に感じているほど）よいイメージをもつ傾向にあった。逆にいえば、高卒者・短大卒者は、学歴を身近に感じようが感じまいが、大卒者に

対して否定的な見解をもっているのである。

このように、高卒者・短大卒者が否定的イメージをもつ背景には、彼らの「意地」が見受けられる。意地とは「「恥」の感覚を防衛するために生まれてくる行動である」（鑪 66 頁）と考えられる。つまり、高卒者・短大卒者は、自分の学歴に関して「恥」の感覚をもっているのではないだろうか。そのため、実際に大学を出ることによって実質的な効用が得られるのかどうかはさておき、それを認めると自分の「恥」の部分をさらけ出すことにつながると感じているのではなかろうか。「隠すべきその正体は大体において社会的に認知されている自分の価値をひき下げたり、マイナスに評価されたり、他人が拒否するかもしれない場合が多い」（鑪 17 頁）のであり、この場合は、高卒・短大卒という事実が自分の価値を引き下げることを意味しているといえよう。高卒者・短大卒者において、「望んだからといって誰でも大学に進学できるわけではない」と考える人の割合が高いという分析結果も、大学に進学しなかった（できなかった）ことに関する「意地」の意識の表れと捉えられないだろうか。

だが、もしこのように「恥」や「意地」といった心情があるとすれば、高卒者や短大卒者はある意味「学歴社会」のなかに（学歴が機能し、学歴によって評価されるしくみ・システムのなかに）、自分たちがいることを前提とし、かつ受け入れていると捉えられる。それに対して、中卒者の場合は、「意地」をとおさずに開き直っていると考えられないだろうか。

ただし、これらは推測の域をでない。今後はさらなる分析が必要である。また、冒頭で述べたように、ここでは、数多い大学・大卒者を十把一絡げに「大学」「大卒者」と括っている。そのために、たとえば一流大学（卒業者）と二流大学（卒業者）に対するイメージの差は捉えようがない。大学進学率の高い時代に育った若年層においては、むしろそのような各大学（卒業者）に対するイメージに関して大きな差異が見出されるのかもしれない。また、回答者の学歴に関して、同じ大卒といった場合にもその出身大学は様々である。本サンプルでは出身大学に偏りがあるために分析には取り上げなかったが、この点も今後の課題である。

◇注

(1) 無回答および「わからない」と回答した者を除き、「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」に４～１の得点を割り当てた。その得点をもとに、能力尺度を算出している。たとえば、「意欲・態度」については、これに含まれる５項目の得点をまず足しあわせて合計得点を算出する（すなわち、20～5 までの得点が各サンプルに割り当てられる）。次にこの合計を項目数の５で割ることにより、１～４の得点が各サンプルに割り当てられるのである。

(2) クロス分析はすべて、どの項目についても無回答者および「分からない」と回答した者を除外している。クロス分析は「とてもそう思う」～「全くそう思わない」の４段階尺度を用いて行っている。なお、年齢は、高校・大学進学率を考慮し、20－35 歳（共通一次後世代）、36－50 歳（高校進学率７割超世代）、51－65 歳（新制第一世代）、66 歳以上（旧制世代）

の４つに分類する。学歴については、「中卒」に旧制小学校・高等小学校卒、「高卒」に旧制中学校・高等女学校・実業学校・師範学校・青年学校卒、「短大卒」に高専・専修学校卒、「大卒」に旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校・旧制大学・新制大学院をそれぞれ含んでいる。また職業については、質問紙において16カテゴリーであったものを、「専門的・管理的職業」「事務的・販売的職業」「農業・労働・その他」という３つに再カテゴリー化したものを用いることとする。

(3)大卒者の内訳を性別に示すと、下表のとおりである。

	年齢					職業			
	20-35歳	36-50歳	51-65歳	66歳以上	合計	専門的・管理的職業	事務的・販売的職業	農業・労働・その他	合計
男	36	39	34	12	121	51	32	13	96
	29.8	32.2	28.1	9.9	100.0	53.1	33.3	13.5	100.0
女	28	19	7	3	57	14	12	3	29
	49.1	33.3	12.3	5.3	100.0	48.3	41.4	10.3	100.0
合計	64	58	41	15	178	65	44	16	125
	36.0	32.6	23.0	8.4	100.0	52.0	35.2	12.8	100.0

(4)表５には「とてもそう思う」「ややそう思う」と回答した者の割合を足しあわせて表記している。なお、表10・11も同様である。

(5)本叢書において、西本はこの２項目を「学校化」の尺度として用いているが、本稿ではそのように扱う意図はない。なお、表14・表15に示す分析は、「とてもあてはまる・ややあてはまる」＝「あてはまる」、「あまりあてはまらない・全くあてはまらない」＝「あてはまらない」の２分類として行っている。

◇参考文献

原田　彰 1965,「学歴コンプレックス」新堀通也編『学歴―実力主義を阻むもの―』ダイヤモンド社。

広島大学教育社会学研究室編　1998,「学歴意識に関する調査研究（１）」広島大学教育社会学研究室『教育社会学研究年報』第１号，1－31頁。

広島大学教育社会学研究室編　1999,「学歴意識に関する調査研究（２）」広島大学教育社会学研究室『教育社会学研究年報』第２号，1－27頁。

梶田叡一 1983,「学歴研究のひとつの課題－“まなざし”と自己概念の視点から－」『教育社会学研究』第38集，33－37頁。

新堀通也他 1965,『学歴意識に関する調査研究』民主主義研究会。

鑪幹八郎 1998,『恥と意地　日本人の心理構造』講談社現代新書。

第２部　資料編

単純集計結果

問１　あなた自身について、次の項目にお答え下さい。

ａ．性別（○をつけて下さい。）　1.男　2.女

性別

男	女	合計
44.6	55.4	100.0
308	383	691

ｂ．あなたの年令は現在何歳ですか。　満（　　）歳

年齢区分

20-35歳	36-50歳	51-65歳	66歳以上	合計
23.2	26.8	33.9	16.2	100.0
160	185	234	112	691

ｃ．あなたは、あなたの世帯の主たる家計支持者ですか。　1.はい　2.いいえ

家計支持者

はい	いいえ	合計
53.4	46.6	100.0
358	313	671

d．広島市に在住されて、通算何年になりますか。

広島市在住年数

0-5年	6-10年	11-20年	21-30年	31-40年	41-50年	51年以上	合計
9.0	5.2	13.0	24.2	18.3	14.3	16.1	100.0
61	35	88	164	124	97	109	678

e．あなたは現在結婚しておられますか。次のうち、どれにあてはまりますか。

1. 未婚である	2. 現在結婚している	3. 離・死別

未婚･既婚

未婚である	現在結婚している	離･死別	合計
14.1	75.7	10.2	100.0
97	519	70	686

f．お子さんは何人いらっしゃいますか。　　(　　)人

子どもの人数

0	1	2	3	4	5	合計
17	16	46.6	18.3	1.7	0.5	100
111	104	304	119	11	3	652

g.一番上のお子さんは現在何歳ですか。　　(　　) 歳

長子の年齢

0-5歳	6-10歳	11-20歳	21-30歳	31-40歳	41-50歳	51歳以上	合計
16.8	5.8	14.6	26.1	22.7	8.8	5.2	100.0
98	34	85	152	132	51	30	582

問２ あなたは休日に何をしてお過ごしですか。あてはまる数字を選んで○をつけて下さい。

	週に1回以上	月に1回くらい	数年に1度くらい	ここ数年間したことはない	わからない	合計
クラシック音楽の音楽会･コンサートへ行く	0.0	5.2	32.0	53.9	8.9	100.0
	0	27	166	279	46	518
美術館や美術の展覧会、博物館へ行く	0.4	17.6	47.2	28.7	6.1	100.0
	2	95	255	155	33	540
ピアノを弾く	4.0	7.3	6.4	50.3	32.1	100.0
	18	33	29	229	146	455
短歌･俳句を作る	1.5	3.0	4.5	57.7	33.4	100.0
	7	14	21	271	157	470
演劇を見に行く	0.2	4.5	26.7	46.6	22.0	100.0
	1	22	131	229	108	491
フランス料理の店で食事をする	0.8	11.1	34.7	37.4	16.1	100.0
	4	53	166	179	77	479
ファミリーレストランで食事をする	6.3	54.8	24.9	9.7	4.3	100.0
	34	295	134	52	23	538
芸術や歴史に関する本を読む	9.6	22.3	22.7	31.3	14.1	100.0
	48	111	113	156	70	498
総合雑誌を読む	29.3	46.6	8.4	9.7	6.1	100.0
	154	245	44	51	32	526
手芸や木工･模型作りなどをする	10.7	18.9	21.7	32.4	16.3	100.0
	54	95	109	163	82	503
手づくりでパンや菓子を作る	4.8	16.3	14.8	39.5	24.6	100.0
	23	78	71	189	118	479
映画を見に行く	0.4	21.3	44.7	28.1	5.5	100.0
	2	109	229	144	28	512
家でビデオ鑑賞をする	23.7	41.3	14.7	13.4	6.9	100.0
	124	216	77	70	36	523
テニスをする	2.6	4.1	10.2	52.4	30.7	100.0
	12	19	47	241	141	460
ゴルフをする	4.3	12.8	9.1	40.3	33.5	100.0
	21	62	44	195	162	484
若手作家の小説を読む	7.6	18.3	19.7	33.3	21.1	100.0
	37	89	96	162	103	487
テレビの歌謡番組を見る	44.1	37.5	5.9	7.3	5.1	100.0
	241	205	32	40	28	546
競艇･競輪に行く	1.1	4.0	4.7	44.0	46.2	100.0
	5	18	21	198	208	450
スポーツ新聞や女性週刊誌を読む	28.7	38.3	10.4	12.4	10.2	100.0
	146	195	53	63	52	509
芸能雑誌や写真雑誌を読む	12.5	33.8	15.9	21.1	16.7	100.0
	59	160	75	100	79	473
パチンコやマージャンをする	6.7	11.5	10.9	38.0	33.0	100.0
	32	55	52	182	158	479
社会活動に参加する	6.0	11.6	17.4	36.7	28.3	100.0
	30	58	87	184	142	501
キャンプなどの野外活動をする	2.0	6.1	35.6	40.1	16.2	100.0
	10	30	174	196	79	489
ドライブをする	17.9	50.3	18.0	7.9	5.9	100.0
	97	273	98	43	32	543
繁華街に出てウインドーショッピングなどをする	16.5	55.5	16.2	7.1	4.7	100.0
	91	305	89	39	26	550
家でくつろいでいる	70.3	25.5	1.0	1.0	2.3	100.0
	428	155	6	6	14	609

問３　あなたの現在のお仕事について、お聞かせください。

(a) あなたのお仕事は、大きくわけてつぎのどれにあたりますか。一つ選んで○をつけてください。

職業

経営者、役員	一般従業者	臨時雇用	派遣社員	自営業主（雇用者なし）	自営業主（雇用者あり）	家族従業者	内職	学生	無職	わからない	合計
5.6	39.7	13.0	0.6	4.0	2.6	3.2	1.7	2.4	26.1	1.1	100.0
37	260	85	4	26	17	21	11	16	171	7	655

(b) あなたの働いているところは、どのような事業を営んでいますか。一つ選んで○をつけてください。

事業内容

農業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	運輸・通信業	卸売・小売業	金融・保険業	不動産業
3.1	0.4	9.8	14.0	2.6	3.7	16.6	4.6	0.9
14	2	45	64	12	17	76	21	4

新聞等	情報・通信サービス	医療・福祉サービス	教育・研究	法律・会計	その他サービス業	公務	その他	合計
0.7	3.1	7.2	6.1	0.7	13.8	6.1	6.8	100.0
3	14	33	28	3	63	28	31	458

(d) あなたの働いているところ（会社・団体など）の従業員（雇われている人）は、全体で何人くらいですか。一つ選んで○をつけてください。[本社・支店・工場などすべて含める]

会社規模

なし	1人	2～4人	5～9人	10～29人	30～99人	100～299人	300～499人	500～999人	1000人以上	国の省庁・国立の機関	県庁・市町村の役所・公立の機関	合計
4.4	3.5	8.4	9.1	11.9	16.6	9.7	4.4	6.4	16.8	2.6	6.2	100.0
20	16	38	41	54	75	44	20	29	76	12	28	453

(e) [(a)で 1～8 の方に]あなたの働いているところでの仕事内容は大きく分けてつぎの 1～16 のどれにあてはまりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。無職の方で過去にお勤めの経験がある方は、もっとも長い間勤めた職場でのお仕事をお答えください。

仕事内容

農耕・林業・漁業作業(自営)	販売的職業	サービス的職業	専門的職業	管理的職業	事務的職業	保安的職業	運輸・通信
2.4	13.7	15.3	16.8	4.1	21.1	1.7	4.1
10	57	64	70	17	88	7	17

窯業、土石製品等製造	金属製品等製造	10・11以外の製造作業	汽かん士、起重機等の機械の運転など	建設作業	労務作業	その他	合計
0.2	3.8	5.0	1.0	4.3	1.2	5.3	100.0
1	16	21	4	18	5	22	417

(g) [(a)で 1～7 の方に]何かの役職についておられますか。この中のどれにあたるでしょうか。おおよそあてはまる番号を一つ選び、○をつけてください。

役職

役職なし	監督、職長、班長、組長	係長、係長相当職	課長、課長相当職	部長、部長相当職	社長、重役、役員、理事	わからない	合計
51.1	4.1	10.7	9.7	4.8	12.7	6.9	100.0
201	16	42	38	19	50	27	393

(h) あなたは現在働いているところでつぎのような職場（所属の部や課など）を経験したことがありますか。あるものすべてに○をつけてください。なお、現在の職場には◎をつけてください。

	経験あり	経験なし	合計
職場－営業	23.2 91	76.8 301	100.0 392
職場－販売	18.1 71	81.9 321	100.0 392
職場－経理･財務	18.6 73	81.4 319	100.0 392
職場－総務･庶務	15.6 61	84.4 331	100.0 392
職場－人事･労務	7.9 31	92.1 361	100.0 392
職場－教育	9.2 36	90.8 356	100.0 392
職場－企画･調査･法務	9.4 37	90.6 355	100.0 392
職場－宣伝･広報	2.6 10	97.4 382	100.0 392
職場－生産･製造･工場	17.9 70	82.1 322	100.0 392
職場－研究･開発･技術	12.2 48	87.8 344	100.0 392
職場－情報システム	3.6 14	96.4 378	100.0 392
職場－部課なし	16.8 66	83.2 326	100.0 392

(i) あなたは転職の経験がありますか。　　(　　) 回

転職経験

0	1	2	3	4	5	6	7	9	10	15	合計
42.4	20.3	13.7	13.7	3.3	3.3	1.3	1.1	0.4	0.2	0.2	100.0
192	92	62	62	15	15	6	5	2	1	1	453

(j) あなたの職場では、個人作業が多いですか、それとも共同作業が多いですか。おおよそあてはまる数字に○をつけてください。

個人作業ー共同作業

1	2	3	4	5	合計
30.1	27.5	19.7	11.8	10.9	100.0
130	119	85	51	47	432

問４ (a)あなたが最後に行かれた（または現在通っている）学校は、つぎのどれにあたりますか。

学歴

旧制尋常小学校	旧制高等小学校	旧制中学校･高等女学校	実業学校	師範学校	旧制高校･専門学校･高等師範学校	旧制大学
1.2	4.1	7.7	0.7	0.3	1.2	0.1
8	28	52	5	2	8	1

新制中学校	新制高校	新制短大･高専	新制大学	新制大学院	わからない	合計
6.9	32.9	19.6	22.6	2.4	0.1	100.0
47	223	133	153	16	1	677

(b) あなたはその学校を卒業されましたか。

卒業－中退

卒業	中退	在学中	わからない	合計
93.3	3.6	2.8	0.3	100.0
625	24	19	2	670

(c)あなたが通われたすべての学校の学校名や学部学科名、学校の所在地などを、さしつかえがない程度にお答えください。

大学設置者

国立	公立	私立	合計
26.6	8.5	64.9	100.0
66	21	161	248

大学課程

全日制	定時制	通信制	合計
92.8	4.7	2.5	100.0
219	11	6	236

専修学校設置者

国立	公立	私立	合計
4.4	31.1	64.4	100.0
2	14	29	45

専修学校課程

全日制	定時制	通信制	合計
81.3	14.6	4.2	100.0
39	7	2	48

高校設置者

国立	公立	私立	合計
1.2	67.4	31.5	100.0
5	289	135	429

高校学科

普通科	農業科	工業科	商業科	その他	合計
69.2	2.0	9.4	12.5	6.9	100.0
310	9	42	56	31	448

高校課程

全日制	定時制	通信制	合計
95.8	3.5	0.7	100.0
413	15	3	431

中学設置者

国立	公立	私立	合計
4.4	86.9	8.8	100.0
7	139	14	160

問５　中学３年の頃、あなたの成績は学年の中でどれくらいだったと思われますか。つぎの中からあてはまるものを選んでください。

中学時代の成績

上の方	やや上の方	ふつう	やや下の方	下の方	わからない	合計
18.7	29.3	38.4	9.1	2.9	1.7	100.0
123	193	253	60	19	11	659

問６　中学３年の頃、あなたのお宅の暮らし向きはどのようでしたか。当時のふつうの暮らし向きと比べてお答えください。

中学時代の家庭の暮らし向き

豊かな方	やや豊かな方	ふつう	やや貧しい方	貧しい方	わからない	合計
5.4	11.5	55.4	16.5	10.4	0.9	100.0
35	75	362	108	68	6	654

問７　あなたのお父さまのご職業についてお聞きします。

(a) あなたのお父さまのこれまでの主な（もっとも長かった）お仕事は大きく分けてこの中のどれにあたりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。

父親の職業

経営者、役員	一般従業者	臨時雇用	派遣社員	自営業主（雇用者なし）	自営業主（雇用者あり）	家族従業者	内職	無職	わからない	合計
7.3	50.5	0.7	0.3	21.6	11.4	2.0	0.2	2.0	4.1	100.0
44	306	4	2	131	69	12	1	12	25	606

(b) あなたのお父さまの働いている（働いていた）ところは、どのような事業を営んでいますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。

父親の事業内容

農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	運輸・通信業	卸売・小売業	金融・保険業
17.6	1.0	0.8	1.5	7.2	19.7	3.3	9.5	8.3	1.8
108	6	5	9	44	121	20	58	51	11

不動産業	新聞等	情報・通信サービス	医療・福祉サービス	教育・研究	法律・会計	その他サービス業	公務	その他	合計
0.7	0.7	1.8	1.0	3.1	0.5	4.1	11.3	6.4	100.0
4	4	11	6	19	3	25	69	39	613

(d) あなたのお父さまは、何かの役職についておられますか。あるいはかつて何らかの役職についておられましたか。それはこの中のどれにあたるでしょうか。おおよそあてはまる番号を一つ選び、○をつけてください。

父親の役職

役職なし	監督、職長、班長、組長	係長、係長担当職	課長、課長担当職	部長、部長担当職	社長、重役、役員、理事	わからない	合計
36.0	8.6	3.6	9.3	9.1	14.8	18.7	100.0
202	48	20	52	51	83	105	561

(e) あなたのお父さまの働いている（働いていた）ところ（会社・団体など）の従業員（雇われている人）は、会社全体で何人くらいですか。あてはまる番号に[本社・支店・向上などすべて含める]

父親の会社規模

なし	1人	2～4人	5～9人	10～29人	30～99人	100～299人	300～499人	500～999人	1000人以上	国の省庁・国立の機関	県庁・市町村の役所・公立の機関	合計
18.0	3.2	7.9	9.4	8.8	9.2	5.6	2.4	2.6	12.4	11.4	9.0	100.0
96	17	42	50	47	49	30	13	14	66	61	48	533

(f) [(a)で 1～8 の方に]あなたのお父さまの働いている（働いていた）ところの仕事内容は大きく分けてつぎの 1～16 のどれにあてはまりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。お父さま無職の方で過去にお勤めの経験がある方は、もっとも長い間勤めた職場でのお仕事をお答えください。

父親の仕事内容

農耕・林業・漁業作業(自営)	販売的職業	サービス的職業	専門的職業	管理的職業	事務的職業	保安的職業	運輸・通信
21.0	8.0	5.6	8.5	3.4	8.0	3.6	9.0
116	44	31	47	19	44	20	50

採掘作業	窯業、土石製品等製造	金属製品等製造	10・11以外の製造作業	汽かん士、起重機等の機械の運転など	建設作業	労務作業	その他	合計
0.4	2.2	8.5	6.1	2.5	6.9	0.7	5.6	100.0
2	12	47	34	14	38	4	31	553

問８　あなたのお父さまが最後に行かれた学校は、つぎのどれにあたりますか。中退、卒業に関係なくお答えください。

父親の学歴

旧制尋常小学校	旧制高等小学校	旧制中学校・高等女学校	実業学校	師範学校	旧制高校・専門学校・高等師範学校	旧制大学	新制中学校	新制高校	新制大学	新制大学院	わからない	合計
21.4	15.5	13.8	2.4	1.2	8.5	4.7	3.9	8.0	5.2	0.9	14.5	100.0
141	102	91	16	8	56	31	26	53	34	6	96	660

問９　あなたのお母さまが、最後に行かれた学校は、次のどれにあたりますか。中退、卒業に関係なくお答えください。

母親の学歴

旧制小学校・高等小学校	高等女学校・実業学校・師範学校・青年学校	旧制専門学校・女子高等師範学校	旧制大学	新制中学校	新制高校	新制短大・高専	新制大学	その他	わからない	合計
34.3	26.0	4.7	0.5	3.6	11.8	2.9	1.5	0.3	14.5	100.0
227	172	31	3	24	78	19	10	2	96	662

問１０　あなたのこれまでの人生で、次に示すような経験がありましたか。あったことをすべて選んでください。

	該当	該当せず	合計
希望通りの進学ができなかった	51.8 280	48.2 261	100.0 541
学校を終えて、希望した職業や会社に進めなかった	24.6 133	75.4 408	100.0 541
会社や役所で、希望通りの昇進ができなかった	11.8 64	88.2 477	100.0 541
続けたかった仕事をあきらめて、転職や退職をした	15.5 84	84.5 457	100.0 541
希望した転職や再就職ができなかった	7.8 42	92.2 499	100.0 541
その他	7.6 41	92.4 500	100.0 541
わからない	16.6 90	83.4 451	100.0 541

問１１　あなたは現在つぎのことにどの程度満足していますか。

	満足している	どちらかといえば満足	どちらともいえない	どちらかといえば不満	不満である	わからない	合計
満足度－生活全般	23.0 154	39.6 266	24.1 162	8.2 55	4.8 32	0.3 2	100.0 671
満足度－職場での処遇	16.0 79	32.3 160	23.0 114	12.7 63	7.7 38	8.3 41	100.0 495
満足度－仕事の内容	19.0 97	31.8 162	26.3 134	10.2 52	6.9 35	5.9 30	100.0 510
満足度－学歴	19.5 113	24.7 143	31.4 182	12.4 72	8.6 50	3.4 20	100.0 580
満足度－社会的地位	15.9 87	22.3 122	39.8 218	8.9 49	3.3 18	9.9 54	100.0 548

問１２　つぎにあげたことがらはあなた自身にどの程度あてはまりますか。あてはまる数字に○をつけてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない	合計
なんでも、成り行きにまかせるのが一番だ	8.3	40.9	34.6	12.2	4.1	100.0
	53	262	222	78	26	641
努力すれば、立派な人間になれる	18.4	51.6	21.4	2.6	6.0	100.0
	120	336	139	17	39	651
いっしょうけんめい話せば、だれでもわかってくれる	13.3	45.3	32.3	3.5	5.7	100.0
	87	296	211	23	37	654
自分の人生は自分自身で決定している	30.7	48.2	16.6	1.8	2.6	100.0
	202	317	109	12	17	657
自分の人生は、運命によって決められている	7.7	30.8	35.8	16.2	9.4	100.0
	51	203	236	107	62	659
幸福になるか不幸になるかは、偶然によって決まる	4.3	21.9	39.8	23.6	10.5	100.0
	28	144	262	155	69	658
自分自身の身におこることは自分のおかれている環境によって決定されている	10.5	47.9	26.6	6.2	8.7	100.0
	69	315	175	41	57	657
どんなに努力しても、友人の本当の気持ちを理解することはできない	5.5	27.2	41.5	15.1	10.6	100.0
	36	177	270	98	69	650
人生は、ギャンブルのようなものだ	6.1	18.7	33.7	27.8	13.7	100.0
	39	120	217	179	88	643
将来何になるかについて考えることは、役に立つ	25.9	44.8	17.9	2.6	8.8	100.0
	168	290	116	17	57	648
努力すれば、どんなことでも自分の力でできる	8.7	44.1	35.4	5.8	6.0	100.0
	57	289	232	38	39	655
たいていの場合、自分自身で決断した方が、よい結果を生む	15.5	49.0	24.4	2.1	9.0	100.0
	102	323	161	14	59	659
幸福になるか不幸になるかは、自分の努力しだいだ	22.6	56.3	13.4	2.3	5.5	100.0
	149	371	88	15	36	659
自分の一生を思いどおりに生きることができる	4.0	23.0	49.4	13.8	9.8	100.0
	26	150	322	90	64	652
将来は、運やチャンスによって決まる	6.3	38.9	34.7	9.0	11.1	100.0
	41	252	225	58	72	648
自分の身におこることを自分の力ではどうすることもできない	8.6	36.2	38.5	8.6	8.2	100.0
	56	235	250	56	53	650
努力すれば、だれとでも友人になれる	9.3	37.9	37.3	8.9	6.6	100.0
	61	248	244	58	43	654
努力することと、成功することはあまり関係がない	7.9	32.6	39.2	14.7	5.6	100.0
	51	210	253	95	36	645
流行には敏感な方だ	5.1	24.1	41.8	20.5	8.4	100.0
	33	155	269	132	54	643
他人の意見に左右される方だ	3.6	35.2	46.4	10.7	4.2	100.0
	23	228	300	69	27	647
友人の数は多い方だ	12.5	33.5	38.4	8.1	7.5	100.0
	82	220	252	53	49	656
好きなことに時間を忘れる	32.0	45.3	17.4	2.8	2.6	100.0
	209	296	114	18	17	654
自分の生活を大切にしたい	45.3	46.6	5.7	0.9	1.5	100.0
	303	312	38	6	10	669
ものを深く考える方だ	21.8	46.3	24.7	3.2	4.1	100.0
	144	306	163	21	27	661

問１３ 仕事にまつわるつぎのような意見があります。それぞれについてあなたの考えにもっとも近いと思われる数字に○をつけてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない	合計
おなじ年齢なら同じくらいの生活費が必要だ	10.4 67	34.8 224	38.6 248	9.2 59	7.0 45	100.0 643
人は勤続を積むうちに職務能力が開発される	16.3 105	49.9 322	24.2 156	5.9 38	3.7 24	100.0 645
同じ仕事であれば、人の仕事ぶりに関係なく同一の賃金を支払うべきだ	4.4 28	12.0 77	47.4 305	32.5 209	3.7 24	100.0 643
実績ある人に賃金を払うべきだ	35.8 232	49.7 322	8.6 56	1.2 8	4.6 30	100.0 648
様々な職場・局面に柔軟に対応できる人を積極的に評価すべきだ	46.4 300	41.9 271	6.8 44	0.5 3	4.5 29	100.0 647

問１４　現在の日本社会の学校教育について次のような意見があります。それぞれの項目について、あなたはどう思いますか。それぞれの項目についてあなたの考えに当てはまる数字に○をつけてください。

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない	合計
中学校は、基本的な学習能力を身につける機関である	50.7 339	42.1 281	5.4 36	0.9 6	0.9 6	100.0 668
中学校は、社会性を身につける機関である	34.9 232	46.6 310	15.8 105	1.8 12	0.9 6	100.0 665
高校での教育内容は社会に出てからでも学習できる	8.7 56	27.9 180	47.9 309	10.5 68	5.0 32	100.0 645
高校は社会に通用するための普通教育を施すところである	20.6 136	47.3 312	24.9 164	4.1 27	3.0 20	100.0 659
高校は大学進学準備機関である	12.2 81	33.1 220	35.5 236	16.0 106	3.2 21	100.0 664
高校は職業に役立つ専門教育を施すところである	4.8 32	24.2 160	52.9 350	13.9 92	4.2 28	100.0 662
高校は個性的な教育を施すところである	8.1 53	30.3 198	43.9 287	12.4 81	5.4 35	100.0 654
大学はいまや望めば誰でも行ける教育機関である	24.5 162	42.4 280	23.2 153	6.8 45	3.0 20	100.0 660
大学は職業に役立つ専門教育を施すところである	22.6 150	36.3 241	31.0 206	7.2 48	2.9 19	100.0 664
大学は高度な教養を身につけるところである	27.3 181	35.9 238	28.4 188	5.6 37	2.9 19	100.0 663
大学での教育内容は直接仕事に結びつかなくてもよい	10.5 69	34.8 228	33.4 219	15.9 104	5.5 36	100.0 656
大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ	24.8 165	39.8 264	23.8 158	3.9 26	7.7 51	100.0 664
今日では大学院まで行かないと良い就職ができない	5.4 36	14.1 94	44.2 294	25.7 171	10.5 70	100.0 665

問１５　あなたの働いているところでは、就職・昇進・昇給・人事（配置転換）などの時に、どのようなことが重視されていると思いますか。就職・昇進・昇給・人事それぞれについて、つぎの中から２つ選び、番号を記入してください。[農林水産業、自営商工、無職の方は、日本社会一般についてお答えください]

(a)就職において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格･人柄	1	238	25.2	48.2
性別	2	13	1.4	2.6
努力	3	18	1.9	3.6
上司の評価	4	9	1.0	1.8
家柄	5	2	.2	.4
年齢	6	40	4.2	8.1
勤続年数	7	3	.3	.6
コネや縁故	8	76	8.0	15.4
生まれつきの能力	9	7	.7	1.4
同僚の評価	10	1	.1	.2
肩書きとしての学歴	11	61	6.4	12.3
実力としての学歴	12	63	6.7	12.8
特定の学校歴	13	26	2.7	5.3
入社試験	14	164	17.3	33.2
幸運	15	10	1.1	2.0
仕事の出来映え	16	14	1.5	2.8
人望	17	8	.8	1.6
本人の希望	18	52	5.5	10.5
学閥	19	9	1.0	1.8
協調性	20	42	4.4	8.5
資格	21	53	5.6	10.7
組織への忠誠心	22	7	.7	1.4
個性	23	17	1.8	3.4
団体スポーツ競技経験	24	5	.5	1.0
その他	25	8	.8	1.6
	Total responses	946	100.0	191.5

200 missing cases; 494 valid cases

(b)昇進において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	37	4.0	7.7
性別	2	9	1.0	1.9
努力	3	82	9.0	17.2
上司の評価	4	249	27.2	52.1
家柄	5	2	.2	.4
年齢	6	21	2.3	4.4
勤続年数	7	85	9.3	17.8
コネや縁故	8	19	2.1	4.0
生まれつきの能力	9	8	.9	1.7
同僚の評価	10	17	1.9	3.6
肩書きとしての学歴	11	22	2.4	4.6
実力としての学歴	12	19	2.1	4.0
特定の学校歴	13	8	.9	1.7
入社試験	14	1	.1	.2
幸運	15	9	1.0	1.9
仕事の出来映え	16	153	16.7	32.0
人望	17	56	6.1	11.7
本人の希望	18	1	.1	.2
学閥	19	13	1.4	2.7
協調性	20	29	3.2	6.1
資格	21	20	2.2	4.2
組織への忠誠心	22	45	4.9	9.4
個性	23	2	.2	.4
その他	25	9	1.0	1.9
	Total responses	916	100.0	191.6

216 missing cases; 478 valid cases

(C)昇給において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	10	1.1	2.1
性別	2	4	.4	.8
努力	3	94	10.4	19.6
上司の評価	4	176	19.5	36.7
家柄	5	1	.1	.2
年齢	6	43	4.8	9.0
勤続年数	7	189	20.9	39.5
コネや縁故	8	10	1.1	2.1
生まれつきの能力	9	3	.3	.6
同僚の評価	10	8	.9	1.7
肩書きとしての学歴	11	13	1.4	2.7
実力としての学歴	12	15	1.7	3.1
特定の学校歴	13	7	.8	1.5
幸運	15	5	.6	1.0
仕事の出来映え	16	228	25.2	47.6
人望	17	10	1.1	2.1
本人の希望	18	1	.1	.2
学閥	19	3	.3	.6
協調性	20	9	1.0	1.9
資格	21	37	4.1	7.7
組織への忠誠心	22	18	2.0	3.8
個性	23	1	.1	.2
その他	25	18	2.0	3.8
	Total responses	903	100.0	188.5

215 missing cases; 479 valid cases

(d)人事（配置転換）において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格･人柄	1	44	5.1	9.5
性別	2	4	.5	.9
努力	3	12	1.4	2.6
上司の評価	4	175	20.1	37.8
年齢	6	16	1.8	3.5
勤続年数	7	49	5.6	10.6
コネや縁故	8	14	1.6	3.0
生まれつきの能力	9	17	2.0	3.7
同僚の評価	10	21	2.4	4.5
肩書きとしての学歴	11	5	.6	1.1
実力としての学歴	12	14	1.6	3.0
特定の学校歴	13	5	.6	1.1
入社試験	14	3	.3	.6
幸運	15	6	.7	1.3
仕事の出来映え	16	112	12.9	24.2
人望	17	39	4.5	8.4
本人の希望	18	152	17.5	32.8
学閥	19	6	.7	1.3
協調性	20	64	7.4	13.8
資格	21	19	2.2	4.1
組織への忠誠心	22	40	4.6	8.6
個性	23	23	2.6	5.0
団体スポーツ競技経験	24	3	.3	.6
その他	25	27	3.1	5.8
	Total responses	870	100.0	187.9

231 missing cases; 463 valid cases

問１６　（現在お勤めの方、あるいはかつて会社などで勤務経験がある方のみ。それ以外の方は問 19 にお進みください）あなたが勤めている会社・組織・団体等には、明文化された規則（契約や業務内容に対する責任と義務が明記してあるような、会社の法規にあたるもの。心得などを示した社訓ではない）がありますか。

会社規則

ある	ない	わからない	合計
71.2	14.0	14.8	100.0
356	70	74	500

問１７　問 16 で「1.ある」を選択した方にお聞きします（それ以外の方はつぎの問 18 にお進みください）。その規則はどのような取り扱いをされているのでしょうか。つぎの各項目について、あてはまる数字に○をつけてください。

	あてはまる	あてはまらない	わからない	合計
規則に提示された原則通りに組織は運営されている	68.9 239	21.6 75	9.5 33	100.0 347
問題や違反があったときにのみ引き合いに出される	36.8 114	43.9 136	19.4 60	100.0 310
全く使われていない	5.61 16	70.53 201	23.86 68	100.00 285

問１８　（現在お勤めの方、あるいはかつて会社などで勤務経験がある方のみ。それ以外の方はつぎの問 19 にお進みください）あなたは、あなたがお勤めになっている会社・組織・団体等と雇用に関する明文化された契約を結びましたか。

会社契約

ある	ない	わからない	合計
51.8	30.5	17.7	100.0
246	145	84	475

問１９ あなたは、働くところで一緒になる人にどのようなことを期待しますか。つぎの中から一つ選び、○をつけてください。

同僚期待

性格の良い人	努力する人	家柄のよい人	同年齢の人	学歴が高い人	協調性のある人	統率力のある人	仕事のできる人	もの知りな人	個性のある人	忠誠心の厚い人	その他	合計
33.2	11.6	0.4	0.4	0.2	30.8	3.8	15.4	0.5	0.9	1.8	1.1	100.0
183	64	2	2	1	170	21	85	3	5	10	6	552

問２０ あなたの働いているところにおいて、就職、昇進、昇給、人事のやり方は、公平だと思いますか(無職の方はもっとも長い間勤めた職場のことをお答えください)。

	公平だと思う	どちらともいえない	不公平だと思う	わからない	合計
就職	35.4	42.1	9.0	13.5	100.0
	197	234	50	75	556
昇進	24.1	41.9	18.5	15.5	100.0
	134	233	103	86	556
昇給	29.3	38.9	18.1	13.7	100.0
	165	219	102	77	563
人事	16.9	46.1	18.6	18.4	100.0
	94	256	103	102	555

問２１　最近あなたの働いているところで、就職、昇進、昇給、人事の基準に何らかの変化がありましたか。(a)～(d)それぞれについて最近特に重視するようになったと思われるものを２つ選び、番号を記入してください[農林水産業、自営商工、無職の方は、問 23 へお進みください]。

(a)就職において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格･人柄	1	81	20.0	37.5
性別	2	8	2.0	3.7
努力	3	9	2.2	4.2
上司の評価	4	12	3.0	5.6
年齢	6	18	4.4	8.3
勤続年数	7	3	.7	1.4
コネや縁故	8	35	8.6	16.2
生まれつきの能力	9	5	1.2	2.3
肩書きとしての学歴	11	18	4.4	8.3
実力としての学歴	12	39	9.6	18.1
特定の学校歴	13	10	2.5	4.6
入社試験	14	59	14.5	27.3
幸運	15	4	1.0	1.9
仕事の出来映え	16	6	1.5	2.8
人望	17	1	.2	.5
本人の希望	18	18	4.4	8.3
学閥	19	7	1.7	3.2
協調性	20	13	3.2	6.0
資格	21	25	6.2	11.6
組織への忠誠心	22	7	1.7	3.2
個性	23	9	2.2	4.2
団体スポーツ競技経験	24	4	1.0	1.9
その他	25	15	3.7	6.9
	Total responses	406	100.0	188.0

478 missing cases; 216 valid cases

(b)昇進において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	14	3.4	6.4
性別	2	1	.2	.5
努力	3	36	8.7	16.4
上司の評価	4	110	26.6	50.0
年齢	6	6	1.5	2.7
勤続年数	7	32	7.7	14.5
コネや縁故	8	13	3.1	5.9
生まれつきの能力	9	5	1.2	2.3
同僚の評価	10	11	2.7	5.0
肩書きとしての学歴	11	9	2.2	4.1
実力としての学歴	12	7	1.7	3.2
特定の学校歴	13	1	.2	.5
入社試験	14	1	.2	.5
幸運	15	5	1.2	2.3
仕事の出来映え	16	68	16.5	30.9
人望	17	22	5.3	10.0
本人の希望	18	3	.7	1.4
学閥	19	2	.5	.9
協調性	20	20	4.8	9.1
資格	21	10	2.4	4.5
組織への忠誠心	22	22	5.3	10.0
個性	23	2	.5	.9
その他	25	13	3.1	5.9
	Total responses	413	100.0	187.7

474 missing cases; 220 valid cases

(c)昇給において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格･人柄	1	10	2.4	4.5
努力	3	42	10.2	18.8
上司の評価	4	95	23.1	42.4
年齢	6	16	3.9	7.1
勤続年数	7	49	11.9	21.9
コネや縁故	8	6	1.5	2.7
生まれつきの能力	9	3	.7	1.3
同僚の評価	10	4	1.0	1.8
肩書きとしての学歴	11	11	2.7	4.9
実力としての学歴	12	5	1.2	2.2
特定の学校歴	13	1	.2	.4
幸運	15	2	.5	.9
仕事の出来映え	16	107	26.0	47.8
人望	17	3	.7	1.3
本人の希望	18	1	.2	.4
学閥	19	2	.5	.9
協調性	20	13	3.2	5.8
資格	21	12	2.9	5.4
組織への忠誠心	22	12	2.9	5.4
個性	23	2	.5	.9
その他	25	16	3.9	7.1
	Total responses	412	100.0	183.9

470 missing cases; 224 valid cases

(d)人事（配置転換）において

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格･人柄	1	16	4.1	7.7
性別	2	1	.3	.5
努力	3	9	2.3	4.3
上司の評価	4	84	21.8	40.2
年齢	6	4	1.0	1.9
勤続年数	7	20	5.2	9.6
コネや縁故	8	7	1.8	3.3
生まれつきの能力	9	4	1.0	1.9
同僚の評価	10	11	2.8	5.3
肩書きとしての学歴	11	4	1.0	1.9
実力としての学歴	12	7	1.8	3.3
幸運	15	3	.8	1.4
仕事の出来映え	16	55	14.2	26.3
人望	17	9	2.3	4.3
本人の希望	18	51	13.2	24.4
学閥	19	4	1.0	1.9
協調性	20	28	7.3	13.4
資格	21	15	3.9	7.2
組織への忠誠心	22	25	6.5	12.0
個性	23	9	2.3	4.3
その他	25	20	5.2	9.6
	Total responses	386	100.0	184.7

485 missing cases; 209 valid cases

問２２ 現在働いているところで、将来あなたが今より上の地位に昇進する見通しはどの程度ありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

昇進見通し

かなりある	ある程度ある	どちらともいえない	あまりない	ない	今より上の地位はない	わからない	合計
3.6	17.0	18.2	11.2	31.6	11.4	7.0	100.0
15	70	75	46	130	47	29	412

問２３ 現在の日本社会において、個人に関してつぎにあげる(a)～(e)は何によって決まると思いますか。下にあげた選択肢の中から選び、それぞれあてはまる番号を２つまで選んで番号を記入してください。また、(f)あなたのお仕事にとりわけ必要だと思われるものを２つ選び、番号を記入してください。

(a)学歴

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	13	1.5	2.9
性別	2	4	.5	.9
努力	3	172	20.2	38.1
上司の評価	4	9	1.1	2.0
家柄	5	20	2.3	4.4
年齢	6	3	.4	.7
コネや縁故	8	10	1.2	2.2
生まれつきの能力	9	105	12.3	23.2
同僚の評価	10	3	.4	.7
肩書きとしての学歴	11	135	15.8	29.9
実力としての学歴	12	97	11.4	21.5
特定の学校歴	13	90	10.6	19.9
入社試験	14	32	3.8	7.1
幸運	15	13	1.5	2.9
仕事の出来映え	16	4	.5	.9
人望	17	3	.4	.7
本人の希望	18	48	5.6	10.6
学閥	19	34	4.0	7.5
協調性	20	4	.5	.9
資格	21	37	4.3	8.2
個性	23	3	.4	.7
団体スポーツ競技経験	24	6	.7	1.3
その他	25	7	.8	1.5
	Total responses	852	100.0	188.5

242 missing cases; 452 valid cases

(b)収入

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	7	.8	1.5
性別	2	6	.6	1.3
努力	3	109	11.8	22.7
上司の評価	4	122	13.2	25.4
家柄	5	5	.5	1.0
年齢	6	33	3.6	6.9
勤続年数	7	180	19.5	37.5
コネや縁故	8	7	.8	1.5
生まれつきの能力	9	14	1.5	2.9
同僚の評価	10	1	.1	.2
肩書きとしての学歴	11	54	5.8	11.3
実力としての学歴	12	38	4.1	7.9
特定の学校歴	13	14	1.5	2.9
入社試験	14	2	.2	.4
幸運	15	18	1.9	3.8
仕事の出来映え	16	199	21.5	41.5
人望	17	1	.1	.2
本人の希望	18	2	.2	.4
学閥	19	11	1.2	2.3
協調性	20	9	1.0	1.9
資格	21	63	6.8	13.1
組織への忠誠心	22	15	1.6	3.1
個性	23	1	.1	.2
その他	25	13	1.4	2.7
	Total responses	924	100.0	192.5

214 missing cases; 480 valid cases

(c)社会的地位

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	57	6.5	12.4
性別	2	5	.6	1.1
努力	3	76	8.6	16.6
上司の評価	4	30	3.4	6.5
家柄	5	47	5.3	10.2
年齢	6	15	1.7	3.3
勤続年数	7	24	2.7	5.2
コネや縁故	8	23	2.6	5.0
生まれつきの能力	9	19	2.2	4.1
同僚の評価	10	13	1.5	2.8
肩書きとしての学歴	11	113	12.9	24.6
実力としての学歴	12	69	7.8	15.0
特定の学校歴	13	44	5.0	9.6
幸運	15	14	1.6	3.1
仕事の出来映え	16	42	4.8	9.2
人望	17	128	14.6	27.9
本人の希望	18	5	.6	1.1
学閥	19	30	3.4	6.5
協調性	20	42	4.8	9.2
資格	21	33	3.8	7.2
組織への忠誠心	22	23	2.6	5.0
個性	23	8	.9	1.7
団体スポーツ競技経験	24	5	.6	1.1
その他	25	14	1.6	3.1
Total responses		879	100.0	191.5

235 missing cases; 459 valid cases

(d)近所の評判

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	360	40.1	77.1
性別	2	2	.2	.4
努力	3	17	1.9	3.6
上司の評価	4	1	.1	.2
家柄	5	60	6.7	12.8
年齢	6	3	.3	.6
勤続年数	7	4	.4	.9
コネや縁故	8	2	.2	.4
生まれつきの能力	9	5	.6	1.1
同僚の評価	10	3	.3	.6
肩書きとしての学歴	11	38	4.2	8.1
実力としての学歴	12	8	.9	1.7
特定の学校歴	13	20	2.2	4.3
幸運	15	3	.3	.6
仕事の出来映え	16	13	1.4	2.8
人望	17	148	16.5	31.7
本人の希望	18	7	.8	1.5
学閥	19	3	.3	.6
協調性	20	149	16.6	31.9
資格	21	2	.2	.4
組織への忠誠心	22	13	1.4	2.8
個性	23	11	1.2	2.4
団体スポーツ競技経験	24	13	1.4	2.8
その他	25	13	1.4	2.8
	Total responses	898	100.0	192.3

227 missing cases; 467 valid cases

(e)会社や組織内での地位

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	42	4.6	9.0
性別	2	3	.3	.6
努力	3	56	6.2	12.0
上司の評価	4	188	20.7	40.2
家柄	5	1	.1	.2
年齢	6	8	.9	1.7
勤続年数	7	37	4.1	7.9
コネや縁故	8	30	3.3	6.4
生まれつきの能力	9	3	.3	.6
同僚の評価	10	63	6.9	13.5
肩書きとしての学歴	11	40	4.4	8.5
実力としての学歴	12	30	3.3	6.4
特定の学校歴	13	16	1.8	3.4
入社試験	14	3	.3	.6
幸運	15	14	1.5	3.0
仕事の出来映え	16	143	15.7	30.6
人望	17	62	6.8	13.2
本人の希望	18	4	.4	.9
学閥	19	22	2.4	4.7
協調性	20	43	4.7	9.2
資格	21	10	1.1	2.1
組織への忠誠心	22	81	8.9	17.3
個性	23	5	.6	1.1
その他	25	4	.4	.9
	Total responses	908	100.0	194.0

226 missing cases; 468 valid cases

(f)あなたの仕事に必要なもの

Category label	Code	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
性格・人柄	1	100	11.5	22.3
性別	2	7	.8	1.6
努力	3	150	17.3	33.4
上司の評価	4	47	5.4	10.5
家柄	5	2	.2	.4
年齢	6	10	1.2	2.2
勤続年数	7	8	.9	1.8
コネや縁故	8	8	.9	1.8
生まれつきの能力	9	30	3.5	6.7
同僚の評価	10	15	1.7	3.3
肩書きとしての学歴	11	6	.7	1.3
実力としての学歴	12	21	2.4	4.7
特定の学校歴	13	3	.3	.7
入社試験	14	5	.6	1.1
幸運	15	17	2.0	3.8
仕事の出来映え	16	176	20.3	39.2
人望	17	31	3.6	6.9
本人の希望	18	37	4.3	8.2
協調性	20	87	10.0	19.4
資格	21	55	6.3	12.2
組織への忠誠心	22	18	2.1	4.0
個性	23	20	2.3	4.5
団体スポーツ競技経験	24	1	.1	.2
その他	25	14	1.6	3.1
	Total responses	868	100.0	193.3

245 missing cases; 449 valid cases

問２４　つぎのような意見があります。それぞれについてあなたの意見に近い数字を選び、○をつけてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない	合計
どのようなときでも、規則や原則よりも、まず話し合いを重視する	16.9 102	49.3 298	27.8 168	2.8 17	3.3 20	100.0 605
同じ組織の長や同僚の不祥事がニュースに出ると、自分も世間に申し訳ない気がする	12.7 76	48.9 292	25.8 154	8.0 48	4.5 27	100.0 597
仕事上のミスは、あくまでミスをした人にその責任がある	12.5 75	41.4 249	37.4 225	5.1 31	3.7 22	100.0 602
会社や組織の中では、あまり目立たない方がよい	3.0 18	25.7 153	51.2 305	12.2 73	7.9 47	100.0 596
今の勤務先が潰れても、自分の身につけた技術で世の中を渡り歩くことができる	12.8 76	31.7 188	30.4 180	12.1 72	13.0 77	100.0 593
会社・組織では、与えられた仕事に忠実であるよりも、その会社・組織に忠実であるべきで	4.3 25	22.3 130	49.3 288	12.5 73	11.6 68	100.0 584
近所の町内会の仕事は、面倒くさい	12.5 75	39.5 236	33.6 201	9.5 57	4.8 29	100.0 598

問２５ あなたの周囲にいる大学卒の人たちを全体としてみたとき、つぎのことがどの程度あてはまると思いますか。

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない	合計
のみこみが早い	9.7	35.8	43.4	5.5	5.7	100.0
	58	215	261	33	34	601
意欲的に働いている	5.4	26.4	54.6	9.1	4.6	100.0
	32	156	323	54	27	592
協調性がある	5.1	26.6	53.0	9.3	6.1	100.0
	30	157	313	55	36	591
向上心がある	6.6	33.3	46.2	7.5	6.5	100.0
	39	196	272	44	38	589
考え方に柔軟性がある	5.6	33.0	47.4	8.1	5.9	100.0
	33	195	280	48	35	591
指導力がある	5.8	28.1	48.7	10.8	6.6	100.0
	34	166	288	64	39	591
事務処理能力に優れている	6.9	32.7	46.2	7.4	6.8	100.0
	41	193	273	44	40	591
社交性がある	9.6	40.6	38.6	6.4	4.9	100.0
	57	242	230	38	29	596
常識がある	5.0	31.1	48.1	11.9	3.9	100.0
	30	185	286	71	23	595
人をまとめる力がある	4.1	25.0	53.8	9.3	7.8	100.0
	24	147	317	55	46	589
責任感がある	5.9	24.9	50.0	11.7	7.5	100.0
	35	147	295	69	44	590
専門的知識･技術がある	10.6	44.4	32.8	6.9	5.2	100.0
	63	264	195	41	31	594
教養を身につけている	6.6	36.1	45.6	6.6	5.1	100.0
	39	214	270	39	30	592
努力家である	4.4	25.2	52.0	10.8	7.6	100.0
	26	149	308	64	45	592
独創力がある	4.7	22.4	53.8	10.8	8.3	100.0
	28	133	319	64	49	593
物事に対して積極的である	4.4	24.7	53.4	9.3	8.3	100.0
	26	146	316	55	49	592
臨機応変に対応できる	5.7	32.4	43.8	11.2	6.9	100.0
	34	193	261	67	41	596

問２６ つぎにあげたことがらはあなた自身にどの程度あてはまりますか。あてはまる数字に○を付けてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない	合計
子どもの進学のことが近所でよく話題になる	6.6 40	30.7 185	35.3 213	14.6 88	12.8 77	100.0 603
自分の職場に高学歴の人が多い	13.0 76	23.4 137	38.1 223	16.7 98	8.9 52	100.0 586
家族･親戚に高学歴の人が多い	10.7 65	32.9 200	43.6 265	9.0 55	3.8 23	100.0 608
となり近所に高学歴の人がいる	6.6 40	23.6 144	43.8 267	9.5 58	16.4 100	100.0 609
テレビ･雑誌などの教育関連の話題が気になる	7.3 44	30.4 184	41.7 253	16.3 99	4.3 26	100.0 606
近所に有名進学校･有名大学などがある	5.3 32	16.0 97	39.9 242	31.5 191	7.4 45	100.0 607
職業柄、高学歴の人を相手にする機会がある	14.5 86	28.3 168	32.2 191	17.5 104	7.6 45	100.0 594

問２７ 過去一年間のあなた個人の収入は税込みでつぎのどれに近いですか。臨時収入、副収入も含めてあてはまる番号に○をつけてください。

問２８ 過去一年間のあなたの配偶者（ご主人、奥さま）の収入は税込みでつぎのどれに近いですか。臨時収入、副収入も含めてあてはまる番号に○をつけてください。

	なし	70万未満	100万円位	200万円位	300万円位	400万円位	500万円位	600万円位	700万円位
本人の収入	8.9 56	8.3 52	14.2 89	9.4 59	13.4 84	8.9 56	9.1 57	5.9 37	5.4 34
配偶者の収入	19.9 110	6.5 36	10.3 57	5.1 28	9.4 52	9.2 51	9.4 52	5.8 32	7.2 40

800万円位	900万円位	1100万円位	1300万円位	1500万円位	1700万円位	2000万円位	2300万円以上	わからない	合計
4.5 28	4.5 28	2.9 18	1.6 10	0.5 3	0.3 2	0.6 4	0.2 1	1.3 8	100.0 626
4.3 24	4.3 24	2.9 16	1.3 7	0.7 4	0.0 0	0.4 2	0.4 2	2.9 16	100.0 553

調　査　票

1998年7月

学歴と生活に関する意識調査

調査の趣旨とご協力のお願い

今日の日本では多様化・個性化時代を迎え、人々の生活形態やものの対する考え方も多様になってきていると思われます。そうしたなかで、学歴に関しては、大手企業を中心にその扱いに関する新しい形が模索されはじめている一方で、官庁や企業のキャリア組(幹部候補生)には、特定大学卒が集中しているともいわれております。

そこで、これからの社会における生活や学歴のあり方を考えるための基礎資料を得ることを目的として、アンケート調査を企画しております。この調査票では、みなさまがどのような生活やお仕事を営んでおられるのか、そしてみなさまの職場などで、実際のところ学歴がどのような働きをしているのか、みなさま自身学歴に対してどんな考えをお持ちなのかを率直にお聞きしたいと考えております。

広島市の選挙人名簿をもとに、層化抽出法で無作為にサンプリングを行い、みなさまを調査対象として選出させていただきました。この調査は、どなたからご回答をいただいたか、誰にもわからない仕組みになっております。また、調査で得られたデータは、すべて統計的に処理いたしますので、みなさまにご迷惑をおかけすることは決してございません。ご多忙中、たいへん恐縮に存じますが、調査の趣旨をご理解いただいたうえで、ご協力下さいますよう、切にお願い申し上げる次第であります。

ご回答いただきました調査票は同封の封筒に密封し、必ず７月３１日（金）までに郵便ポストにご投函ください。

<「学歴と生活に関する意識」研究会>

なお、この調査についてのお問い合わせがある場合は、下記へお願い致します。

研究代表・村澤昌崇（広島大学大学教育研究センター）
〒739-8512 東広島市鏡山 1-2-2
電話:0824-24-6058, ファックス:0824-24-6057,
電子メールアドレス:mrswm@ipc.hiroshima-u.ac.jp

Ⅰ.はじめに、あなた自身やご家族のことについてお聞きします。

問1　あなた自身について、次の項目にお答え下さい。

a．性別（○をつけて下さい。）　1.男　2.女

b．あなたの年令は現在何歳ですか。　満（　　）歳

c．あなたは、あなたの世帯の主たる家計支持者ですか。　1.はい　2.いいえ

d．広島市に在住されて、通算何年になりますか。　（　　）年

e．あなたは現在結婚しておられますか。次のうち、どれにあてはまりますか。

1.　未婚である	2.　現在結婚している	3.　離・死別

f．お子さんは何人いらっしゃいますか。　（　　）人

（いらっしゃらないときは0とご記入ください）

g.一番上のお子さんは現在何歳ですか。　（　　）歳

問2　あなたは休日に何をしてお過ごしですか。あてはまる数字を選んで○をつけて下さい。

	週に1回以上	月に1回くらい	1年に1度くらい	ここ1年間したことはない	わからない
A.　クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く	1	2	3	4	9
B.　美術館や美術の展覧会、博物館へ行く	1	2	3	4	9
C.　ピアノを弾く	1	2	3	4	9
D.　短歌・俳句を作る	1	2	3	4	9
E.　演劇を見に行く	1	2	3	4	9
F.　フランス料理の店で食事をする	1	2	3	4	9
G.　ファミリーレストランで食事をする	1	2	3	4	9
H.　芸術や歴史にかんする本を読む	1	2	3	4	9
I.　総合雑誌を読む	1	2	3	4	9
J.　手芸や木工・模型作りなどをする	1	2	3	4	9
K.　手づくりでパンや菓子を作る	1	2	3	4	9
L.　映画を見に行く	1	2	3	4	9
M.　家でビデオ鑑賞をする	1	2	3	4	9
N.　テニスをする	1	2	3	4	9
O.　ゴルフをする	1	2	3	4	9
P.　若手作家の小説を読む	1	2	3	4	9
Q.　テレビの歌謡番組を見る	1	2	3	4	9
R.　競艇・競輪に行く	1	2	3	4	9
S.　スポーツ新聞や女性週刊誌を読む	1	2	3	4	9
T.　芸能雑誌や写真雑誌を読む	1	2	3	4	9
U.　パチンコやマージャンをする	1	2	3	4	9
V.　社会活動に参加する（ボランティア活動・消費者運動など）	1	2	3	4	9
W.　キャンプなどの野外活動をする	1	2	3	4	9
X.　ドライブをする	1	2	3	4	9
Y.　繁華街に出てウインドーショッピングなどをする	1	2	3	4	9
Z.　家でくつろいでいる	1	2	3	4	9

問３　あなたの現在のお仕事について、お聞かせください。

(a)　あなたのお仕事は、大きくわけてつぎのどれにあたりますか。一つ選んで○をつけてください。

1. 経営者、役員（重役）
2. 常時雇用されている一般従業者
3. 臨時雇用、パート、アルバイト
4. 派遣社員
5. 自営業主（雇用者なし）
6. 自営業主（雇用者あり）
7. 家族従業者
8. 内職　　→(e)にお進みください
9. 学生　　→問４にお進みください
10. 無職（専業主婦含む）→問４にお進みください
19. わからない

(b) あなたの働いているところは、どのような事業を営んでいますか。一つ選んで○をつけてください。

1. 農業
2. 林業
3. 漁業
4. 鉱業
5. 建設業
6. 製造業
7. 電気・ガス・熱供給・水道業
8. 運輸・通信業
9. 卸売・小売業、飲食店
10. 金融・保険業
11. 不動産業
12. 新聞等
13. 情報・通信サービス（郵便局含む）
14. 医療・福祉サービス（保育園含む）
15. 教育・研究（学校給食・公民館・大学病院含む）
16. 法律・会計
17. その他サービス業
18. 公務
19. その他（　　）

(c)　(b)でお答えいただいたお勤め先の事業について、もしよろしければ具体的にお教えください[たとえば、稲作、漁業、建設業、洋菓子の製造、旅行業、銀行、小学校、市役所、など具体的にお答えください]

(d)　あなたの働いているところ（会社・団体など）の従業員（雇われている人）は、全体で何人くらいですか。一つ選んで○をつけてください。[本社・支店・工場などすべて含める]

1. なし
2. １人
3. ２～４人
4. ５～９人
5. 10～29 人
6. 30～99 人
7. 100～299 人
8. 300～499 人
9. 500～999 人
10. 1000 人以上
11. 国の省庁・国立の機関
12. 県庁・市町村の役所・公立の機関

(e)　[(a)で 1～8 の方に]あなたの働いているところでの仕事内容は大きく分けてつぎの 1～16 のどれにあてはまりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。無職の方で過去にお勤めの経験がある方は、もっとも長い間勤めた職場でのお仕事をお答えください。

1. 農耕・林業・漁業作業（自営）
2. 販売的職業に従事
3. サービス的職業に従事
4. 専門的な職業（医者、弁護士、各種技術士、教員、看護婦、芸術家など）に従事
5. 管理的な職業（国会・地方議員、会社・団体役員など）に従事
6. 事務的な職業（総務・企画・営業・受付など）に従事
7. 保安的な職業（自衛官・警察・消防・看守など）に従事
8. 運輸・通信（電車・自動車・船舶・航空機の運転・操縦、車掌、通信士など）に従事
9. 採掘作業（採鉱員・採炭員、石切出作業者など）に従事
10. 窯業（陶磁器、ガラスの製造）、土石製品・金属材料・化学製品製造などに従事
11. 金属製品・機械などの製造作業に従事
12. 上記 10. 11. 以外の製品の製造作業（食品・製紙・製材・洋服仕立てなど）に従事
13. 汽かん士、起重機・建設機械・発電所の機械の運転・点検、電気・電話工事などに従事
14. 建設作業（大工、配管、道路・鉄道工夫、現場監督など）に従事
15. 労務作業（倉庫夫、運搬労務、清掃員など）に従事
16. その他（　　）

(f)　(e)のなかに該当する物がない、あるいはわからない場合は、下の空欄に具体的にお書きください。[例えば、住宅の設計、貯金の窓口事務、ウェイトレス、板前、小学校の教員、稲作、工場労働者、など具体的にお答えください]

(g) [(a)で 1～7 の方に]何かの役職についておられますか。この中のどれにあたるでしょうか。おおよそあてはまる番号を一つ選び、○をつけてください。

1. 役職なし 2. 監督、職長、班長、組長 3. 係長、係長相当職 4. 課長、課長相当職	5. 部長、部長相当職 6. 社長、重役、役員、理事 9. わからない

(h) あなたは現在働いているところでつぎのような職場（所属の部や課など）を経験したことがありますか。あるものすべてに○をつけてください。なお、現在の職場には◎をつけてください。

1. 営業 2. 販売 3. 経理・財務 4. 総務・庶務 5. 人事・労務 6. 教育 7. 企画・調査・法務	8. 宣伝・広報 9. 生産・製造・工場 10. 研究・開発・技術 11. 情報システム 12. その他 （具体的に　　） 88. 職場は部や課などに分かれていない

(i) あなたは転職の経験がありますか。　（　　）回（ない方は 0 とご記入ください）

(j) あなたの職場では、個人作業が多いですか、それとも共同作業が多いですか。おおよそあてはまる数字に○をつけてください。

個人作業が多い	1……2……3……4……5	共同作業が多い

問 4 (a) あなたが最後に行かれた（または現在通っている）学校は、つぎのどれにあたりますか。

1. 旧制尋常小学校 2. 旧制高等小学校 3. 旧制中学校・高等女学校 4. 実業学校 5. 師範学校 6. 旧制高校・専門学校・高等師範学校 7. 旧制大学	12. 新制中学校 13. 新制高校 14. 新制短大・高専 15. 新制大学 16. 新制大学院 19. わからない

(b) あなたはその学校を卒業されましたか。

1	2	3	9
卒業	中退	在学中	わからない

(c) あなたが通われたすべての学校の学校名や学部学科名、学校の所在地などを、さしつかえがない程度にお答えください。

	学校名	国公私	学部・学科名など	課程種別	所在地
(1) 大学・短大・高専	学校名	1. 国立 2. 公立 3. 私立	学部	1. 全日制 2. 定時制 3. 通信制	都道府県名
(2) その他の学校（専修学校など）	学校名	1. 国立 2. 公立 3. 私立	学科・分野など	1. 全日制 2. 定時制 3. 通信制	都道府県名
(3) 高校	学校名	1. 国立 2. 公立 3. 私立	学科 1. 普通科 2. 農業に関する学科 3. 工業に関する学科 4. 商業に関する学科 5. その他（　　）	1. 全日制 2. 定時制 3. 通信制	都道府県名
(4) 中学		1. 国立 2. 公立 3. 私立			都道府県名

問５　中学３年の頃、あなたの成績は学年の中でどれくらいだったと思われますか。つぎの中からあてはまるものを選んでください。

上の方	やや上の方	ふつう	やや下の方	下の方	わかならない
1	2	3	4	5	9

問６　中学３年の頃、あなたのお宅の暮らし向きはどのようでしたか。当時のふつうの暮らし向きと比べてお答えください。

豊かな方だった		ふつう		貧しい方だった	わかならない
1	2	3	4	5	9

問７　あなたのお父さまのご職業についてお聞きします。

(a) あなたのお父さまのこれまでの主な（もっとも長かった）お仕事は大きく分けてこの中のどれにあたりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。

1. 経営者、役員（重役）
2. 常時雇用されている一般従業者
3. 臨時雇用、パート、アルバイト
4. 派遣社員
5. 自営業主（雇用者なし）
6. 自営業主（雇用者あり）
7. 家族従業者
8. 内職　→　(f)へお進みください。
9. 学生　→　問８へお進みください。
10. 無職　→　問８へお進みください。
19. わからない

(b) あなたのお父さまの働いている（働いていた）ところは、どのような事業を営んでいますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。

1. 農業
2. 林業
3. 漁業
4. 鉱業
5. 建設業
6. 製造業
7. 電気・ガス・熱供給・水道業
8. 運輸・通信業
9. 卸売・小売業、飲食店
10. 金融・保険業
11. 不動産業
12. 新聞等
13. 情報・通信サービス（郵便局含む）
14. 医療・福祉サービス（保育園含む）
15. 教育・研究（学校給食・公民館・大学病院含む）
16. 法律・会計
17. その他サービス業
18. 公務
19. その他（　　）

(c)　(b)でお答えいただいた事業について、もしよろしければ具体的にお教えください。[たとえば、稲作、漁業、建設業、洋菓子の製造、旅行業、銀行、小学校、市役所、など具体的にお答えください]

(d) あなたのお父さまは、何かの役職についておられますか。あるいはかつて何らかの役職についておられましたか。それはこの中のどれにあたるでしょうか。おおよそあてはまる番号を一つ選び、○をつけてください。

1. 役職なし
2. 監督、職長、班長、組長
3. 係長、係長相当職
4. 課長、課長相当職
5. 部長、部長相当職
6. 社長、重役、役員、理事
9. わからない

(e) あなたのお父さまの働いている（働いていた）ところ（会社・団体など）の従業員（雇われている人）は、会社全体で何人くらいですか。あてはまる番号に[本社・支店・向上などすべて含める]

1. なし
2. １人
3. ２～４人
4. ５～９人
5. 10～29 人
6. 30～99 人
7. 100～299 人
8. 300～499 人
9. 500～999 人
10. 1000 人以上
11. 国の省庁・国立の機関
12. 県庁・市町村の役所・公立の機関

(f) [(a)で 1～8 の方に]あなたのお父さまの働いている（働いていた）ところの仕事内容は大きく分けてつぎの 1～16 のどれにあてはまりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。お父さま無職の方で過去にお勤めの経験がある方は、もっとも長い間勤めた職場でのお仕事をお答えください。

1. 農耕・林業・漁業作業（自営）
2. 販売的職業に従事
3. サービス的職業に従事
4. 専門的な職業（医者・弁護士・技術者・教員・看護婦など）に従事
5. 管理的な職業（国会・地方議員、会社・団体役員など）に従事
6. 事務的な職業（総務・企画・営業・受付など）に従事
7. 保安的な職業（自衛官・警察・消防・看守など）に従事
8. 運輸・通信（電車・自動車・船舶・航空機の運転・操縦、車掌、通信士など）に従事
9. 採掘作業（採鉱員・採炭員、石切出作業者など）に従事
10. 窯業、土石製品・金属材料・化学製品製造などに従事
11. 金属製品・機械などの製造作業に従事
12. 上記 10. 11. 以外の製品の製造作業（食品・製紙・製材・洋服仕立てなど）に従事
13. 汽かん・起重機・建設機械・発電所の機械の運転・点検、電気・電話工事などに従事
14. 建設作業（大工、配管、道路・鉄道工夫、現場監督）に従事
15. 労務作業（倉庫夫、運搬労務、清掃員）に従事
16. その他（　　）

(g) (f)のなかに該当する物がない、あるいはわからない場合は、下の空欄に具体的にお書きください。
[例えば、住宅の設計、貯金の窓口事務、ウェイトレス、板前、小学校の教員、稲作、工場労働者、など具体的にお答えください]

問８ あなたのお父さまが最後に行かれた学校は、つぎのどれにあたりますか。中退、卒業に関係なくお答えください。

1. 旧制尋常小学校
2. 旧制高等小学校
3. 旧制中学校・高等女学校
4. 実業学校
5. 師範学校
6. 旧制高校・専門学校・高等師範学校
7. 旧制大学
12. 新制中学校
13. 新制高校
14. 新制短大・高専
15. 新制大学
16. 新制大学院
19. わからない

問９ あなたのお母さまが、最後に行かれた学校は、次のどれにあたりますか。中退、卒業に関係なくお答えください。

1. 旧制小学校・高等小学校
2. 高等女学校・実業学校・師範学校・青年学校
3. 旧制専門学校・女子高等師範学校
4. 旧制大学(大学院を含む)
5. 新制中学校
6. 新制高校
7. 新制短大・高専
8. 新制大学
9. 新制大学院
10. その他(学校名　　)
19. わからない

問１０ あなたのこれまでの人生で、次に示すような経験がありましたか。あったことをすべて選んでください。

1	希望通りの進学ができなかった。
2	学校を終えて、希望した職業や会社に進めなかった。
3	会社や役所で、希望通りの昇進ができなかった。
4	続けたかった仕事をあきらめて、転職や退職をした。
5	希望した転職や再就職ができなかった。
6	その他（　　）
9	わからない

問１１　あなたは現在つぎのことにどの程度満足していますか。

	満足している	どちらかといえば満足している	どちらともいえない	どちらかといえば不満である	不満である	わからない
a.生活全般	1	2	3	4	5	9
b.職場での処遇	1	2	3	4	5	9
c.仕事の内容	1	2	3	4	5	9
d.学歴	1	2	3	4	5	9
e.社会的地位	1	2	3	4	5	9

問１２　つぎにあげたことがらはあなた自身にどの程度あてはまりますか。あてはまる数字に○をつけてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない
a. なんでも、成り行きにまかせるのが一番だ。	1	2	3	4	9
b. 努力すれば、立派な人間になれる。	1	2	3	4	9
c. いっしょうけんめい話せば、だれでもわかってくれる。	1	2	3	4	9
d. 自分の人生は自分自身で決定している。	1	2	3	4	9
e. 自分の人生は、運命によって決められている。	1	2	3	4	9
f. 幸福になるか不幸になるかは、偶然によって決まる。	1	2	3	4	9
g. 自分自身の身におこることは自分のおかれている環境によって決定されている。	1	2	3	4	9
h. どんなに努力しても、友人の本当の気持ちを理解することはできない。	1	2	3	4	9
i. 人生は、ギャンブルのようなものだ。	1	2	3	4	9
j. 将来何になるかについて考えることは、役に立つ。	1	2	3	4	9
k. 努力すれば、どんなことでも自分の力でできる。	1	2	3	4	9
l. たいていの場合、自分自身で決断した方が、よい結果を生む。	1	2	3	4	9
m. 幸福になるか不幸になるかは、自分の努力しだいだ。	1	2	3	4	9
n. 自分の一生を思いどおりに生きることができる	1	2	3	4	9
o. 将来は、運やチャンスによって決まる。	1	2	3	4	9
p. 自分の身におこることを自分の力ではどうすることもできない。	1	2	3	4	9
q. 努力すれば、だれとでも友人になれる。	1	2	3	4	9
r. 努力することと、成功することはあまり関係がない。	1	2	3	4	9
s.流行には敏感な方だ。	1	2	3	4	9
t.他人の意見に左右される方だ。	1	2	3	4	9
u.友人の数は多い方だ。	1	2	3	4	9
v.好きなことに時間を忘れる。	1	2	3	4	9
w.自分の生活を大切にしたい。	1	2	3	4	9
x.ものを深く考える方だ。	1	2	3	4	9

Ⅱ.つぎに、仕事や学校に関する一般的なことがらについてお聞きします。

問１３　仕事にまつわるつぎのような意見があります。それぞれについてあなたの考えにもっとも近いと思われる数字に○をつけてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない
a. おなじ年齢なら同じくらいの生活費が必要だ。	1	2	3	4	9
b. 人は勤続を積むうちに職務能力が開発される。	1	2	3	4	9
c. 同じ仕事であれば、人の仕事ぶりに関係なく同一の賃金を支払うべきだ。	1	2	3	4	9
d. 実績ある人に賃金を払うべきだ。	1	2	3	4	9
e. 様々な職場・局面に柔軟に対応できる人を積極的に評価すべきだ。	1	2	3	4	9

問１４　現在の日本社会の学校教育について次のような意見があります。それぞれの項目について、あなたはどう思いますか。それぞれの項目についてあなたの考えに当てはまる数字に○をつけてください。

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない
a. 中学校は、基本的な学習能力を身につける機関である。	1	2	3	4	9
b. 中学校は、社会性を身につける機関である。	1	2	3	4	9
c. 高校での教育内容は社会に出てからでも学習できる。	1	2	3	4	9
d. 高校は社会に通用するための普通教育を施すところである。	1	2	3	4	9
e. 高校は大学進学準備機関である。	1	2	3	4	9
f. 高校は職業に役立つ専門教育を施すところである。	1	2	3	4	9
g. 高校は個性的な教育を施すところである。	1	2	3	4	9
h. 大学はいまや望めば誰でも行ける教育機関である。	1	2	3	4	9
i. 大学は職業に役立つ専門教育を施すところである。	1	2	3	4	9
j. 大学は高度な教養を身につけるところである。	1	2	3	4	9
k. 大学での教育内容は直接仕事に結びつかなくてもよい。	1	2	3	4	9
l. 大学の教育内容よりも、専門学校の教育内容の方が社会に出て役に立つ。	1	2	3	4	9
m. 今日では大学院まで行かないと良い就職ができない。	1	2	3	4	9

Ⅲ.あなたのお仕事や職場のことについてお聞きします。

問１５　あなたの働いているところでは、就職・昇進・昇給・人事（配置転換）などの時に、どのようなことが重視されていると思いますか。就職・昇進・昇給・人事それぞれについて、つぎの中から２つ選び、番号を記入してください。[農林水産業、自営商工、無職の方は、日本社会一般についてお答えください]

(a)就職において		
(b)昇進において		
(c)昇給において		
(d)人事（配置転換）において		

1. 性格・人柄
2. 性別
3. 努力
4. 上司の評価
5. 家柄
6. 年齢
7. 勤続年数
8. コネや縁故
9. 生まれつきの能力
10. 同僚の評価
11. 肩書きとしての学歴
12. 実力としての学歴
13. 特定の学校歴
14. 入社試験
15. 幸運
16. 仕事の出来映え
17. 人望
18. 本人の希望
19. 学閥
20. 協調性
21. 資格
22. 組織への忠誠心
23. 個性
24. 団体スポーツ競技経験
25. その他

問１６　（現在お勤めの方、あるいはかつて会社などで勤務経験がある方のみ。それ以外の方は問 19 にお進みください）あなたが勤めている会社・組織・団体等には、明文化された規則（契約や業務内容に対する責任と義務が明記してあるような、会社の法規にあたるもの。心得などを示した社訓ではない）がありますか。

1.ある	2.ない	9.わからない

問１７　問 16 で「1. ある」を選択した方にお聞きします（それ以外の方はつぎの問 18 にお進みください）。その規則はどのような取り扱いをされているのでしょうか。つぎの各項目について、あてはまる数字に○をつけてください。

	あてはまる	あてはまらない	わからない
1. 規則に提示された原則通りに組織は運営されている。	1	2	9
2. 問題や違反があったときにのみ引き合いに出される。	1	2	9
3. 全く使われていない。	1	2	9

問１８　（現在お勤めの方、あるいはかつて会社などで勤務経験がある方のみ。それ以外の方はつぎの問 19 にお進みください）あなたは、あなたがお勤めになっている会社・組織・団体等と雇用に関する明文化された契約を結びましたか。

1.ある	2.ない	9.わからない

問１９　あなたは、働くところで一緒になる人にどのようなことを期待しますか。つぎの中から一つ選び、○をつけてください。

1.性格の良い人
2.努力する人
3.家柄のよい人
4.同年齢の人
5.学歴が高い人
6.協調性のある人
7.統率力のある人
8.仕事のできる人
9.もの知りなひと
10.個性のある人
11.忠誠心の厚い人
12.その他
（　　）

問２０　あなたの働いているところにおいて、就職、昇進、昇給、人事のやり方は、公平だと思いますか(無職の方はもっとも長い間勤めた職場のことをお答えください)。

	公平だと思う	どちらとも いえない	不公平だと思う	わからない
就職について	1	2	3	9
昇進について	1	2	3	9
昇給について	1	2	3	9
人事について	1	2	3	9

問２１　最近あなたの働いているところで、就職、昇進、昇給、人事の基準に何らかの変化がありましたか。(a)～(d)それぞれについて最近特に重視するようになったと思われるものを２つ選び、番号を記入してください[農林水産業、自営商工、無職の方は、問 23 へお進みください]。

(a)就職において		
(b)昇進において		
(c)昇給において		
(d)人事（配置転換）において		

1. 性格・人柄の良さ
2. 性別
3. 努力
4. 上司の評価
5. 家柄
6. 年齢
7. 勤続年数
8. コネや縁故
9. 生まれつきの能力
10. 同僚の評価
11. 肩書きとしての学歴
12. 実力としての学歴
13. 特定の学校歴
14. 入社試験
15. 幸運
16. 仕事の出来映え
17. 人望
18. 本人の希望
19. 学閥
20. 協調性の高さ
21. 資格
22. 組織への忠誠心
23. 個性
24. 団体スポーツ競技経験
25. その他

問２２　現在働いているところで、将来あなたが今より上の地位に昇進する見通しはどの程度ありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

1	2	3	4	5	6	9
かなりある	ある程度 ある	どちらとも いえない	あまりない	ない	今より上の 地位はない	わからない

問２３　現在の日本社会において、個人に関してつぎにあげる(a)～(e)は何によって決まると思いますか。下にあげた選択肢の中から選び、それぞれあてはまる番号を２つまで選んで番号を記入してください。また、(f)あなたのお仕事にとりわけ必要だと思われるものを２つ選び、番号を記入してください。

(a)学歴		
(b)収入		
(c)社会的地位		
(d)近所の評判		
(e)会社や組織内での地位		
(f)あなたのお仕事		

1. 性格・人柄の良さ
2. 性別
3. 努力
4. 上司の評価
5. 家柄
6. 年齢
7. 勤続年数
8. コネや縁故
9. 生まれつきの能力
10. 同僚の評価
11. 肩書きとしての学歴
12. 実力としての学歴
13. 特定の学校歴
14. 入社試験
15. 幸運
16. 仕事の出来映え
17. 人望
18. 本人の希望
19. 学閥
20. 協調性の高さ
21. 資格
22. 組織への忠誠心
23. 個性
24. 団体スポーツ競技経験
25. その他

問２４　つぎのような意見があります。それぞれについてあなたの意見に近い数字を選び、○をつけてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない
a. どのようなときでも、規則や原則よりも、まず話し合いを重視する。	1	2	3	4	9
b. 同じ組織の長や同僚の不祥事がニュースに出ると、自分も世間に申し訳ない気がする。	1	2	3	4	9
c. 仕事上のミスは、あくまでミスをした人にその責任がある。	1	2	3	4	9
d. 会社や組織の中では、あまり目立たない方がよい。	1	2	3	4	9
e. 今の勤務先が潰れても、自分の身につけた技術で世の中を渡り歩くことができる。	1	2	3	4	9
f. 会社・組織では、与えられた仕事に忠実であるよりも、その会社・組織に忠実であるべきである。	1	2	3	4	9
g. 近所の町内会の仕事は、面倒くさい。	1	2	3	4	9

問２５　あなたの周囲にいる大学卒の人たちを全体としてみたとき、つぎのことがどの程度あてはまると思いますか。

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	わからない
A. のみこみが早い。	1	2	3	4	9
B. 意欲的に働いている。	1	2	3	4	9
C. 協調性がある。	1	2	3	4	9
D. 向上心がある。	1	2	3	4	9
E. 考え方に柔軟性がある。	1	2	3	4	9
F. 指導力がある。	1	2	3	4	9
G. 事務処理能力に優れている。	1	2	3	4	9
H. 社交性がある。	1	2	3	4	9
I. 常識がある。	1	2	3	4	9
J. 人をまとめる力がある。	1	2	3	4	9
K. 責任感がある	1	2	3	4	9
L. 専門的知識・技術がある。	1	2	3	4	9
M. 教養を身につけている。	1	2	3	4	9
N. 努力家である。	1	2	3	4	9
O. 独創力がある。	1	2	3	4	9
P. 物事に対して積極的である。	1	2	3	4	9
Q. 臨機応変に対応できる。	1	2	3	4	9

問２６　つぎにあげたことがらはあなた自身にどの程度あてはまりますか。あてはまる数字に○を付けてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	わからない
a. こどもの進学のことが近所でよく話題になる。	1	2	3	4	9
b. 自分の職場に高学歴の人が多い。	1	2	3	4	9
c. 家族・親戚に高学歴の人が多い。	1	2	3	4	9
d. となり近所に高学歴の人がいる。	1	2	3	4	9
e. テレビ・雑誌などの教育関連の話題が気になる。	1	2	3	4	9
f. 近所に有名進学校・有名大学などがある。	1	2	3	4	9
g. 職業柄、高学歴の人を相手にする機会がある。	1	2	3	4	9

問２７　過去一年間のあなた個人の収入は税込みでつぎのどれに近いですか。臨時収入、副収入も含めてあてはまる番号に○をつけてください。

1. なし	10.800 万円位（750～850 万円未満）
2. 70 万円未満	11.900 万円位（850～1,000 万円未満）
3. 100 万円位（70～150 万未満）	12.1,100 万円位(1,000～1,200 万円未満)
4. 200 万円位（150～250 万円未満）	13.1,300 万円位(1,200～1,400 万円未満)
5. 300 万円位（250～350 万円未満）	14.1,500 万円位(1,400～1,600 万円未満)
6. 400 万円位（350～450 万円未満）	15.1,700 万円位(1,600～1,850 万円未満)
7. 500 万円位（450～550 万円未満）	16.2,000 万円位(1,850～2,300 万円未満)
8. 600 万円位（550～650 万円未満）	17.2,300 万円以上（約　　万円）
9. 700 万円位（650～750 万円未満）	18.わからない

問２８　過去一年間のあなたの配偶者（ご主人、奥さま）の収入は税込みでつぎのどれに近いですか。臨時収入、副収入も含めてあてはまる番号に○をつけてください。

1.なし	10.800 万円位（750～850 万円未満）
2.70 万円未満	11.900 万円位（850～1,000 万円未満）
3.100 万円位（70～150 万未満）	12.1,100 万円位(1,000～1,200 万円未満)
4.200 万円位（150～250 万円未満）	13.1,300 万円位(1,200～1,400 万円未満)
5.300 万円位（250～350 万円未満）	14.1,500 万円位(1,400～1,600 万円未満)
6.400 万円位（350～450 万円未満）	15.1,700 万円位(1,600～1,850 万円未満)
7.500 万円位（450～550 万円未満）	16.2,000 万円位(1,850～2,300 万円未満)
8.600 万円位（550～650 万円未満）	17.2,300 万円以上（約　　万円）
9.700 万円位（650～750 万円未満）	18.わからない

この質問紙に、全部お答えになって、お感じになったことがありましたら、何でもご自由にお書きください。

どうも、ご多忙中のところ、調査にご協力くださいまして、ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。お手数ですが、同封の封筒に密封し、７月３１日（金）までに郵便ポストに投函して下さいますようお願い申し上げます。

執筆者紹介（執筆順）

村澤　昌崇	広島大学　大学教育研究センター	助手
西本　裕輝	琉球大学　法文学部	助手
作田　良三	広島大学　教育学部	助手

地方拠点都市における学歴と学歴意識に関する調査研究

（高等教育研究叢書63）

2000（平成12）年３月31日　発行

著　者　村澤昌崇・西本裕輝・作田良三

発行所　広島大学大学教育研究センター

〒739−8512　東広島市鏡山1−2−2

電話（0824）24−6240

印刷所　株式会社　タカトープリントメディア

〒730−0052　広島市中区千田町3丁目2−30

電話（082）244−1110（代表）

ISBN 4-938664-63-1

REVIEWS IN HIGHER EDUCATION

No.63 (March 2000)

An Investigation Research about the Educational Career and Educational Consciousness in Local Core City

RESEARCH INSTITUTE FOR
HIGHER EDUCATION
HIROSHIMA UNIVERSITY

ISBN4-938664-63-1